主な登場人物等

第一編のあらすじ　1
第二編（コンピュータ）のあらすじ　3
第五十二章　居酒屋　5
第五十三章　脱走　25
第五十四章　ブラックシャーク誕生　41
第五十五章　ホワイトシャーク　63
第五十六章　堕落　85
第五十七章　救出　105
第五十八章　奇策　133
第五十九章　証拠隠滅　155
第六十章　恐竜　175
第六十一章　古本屋　211
第六十二章　出会いと別れ　241
第六十三章　ウソ　263
第六十四章　イリの怒り　285
第六十五章　わがまま人質作戦　305

第六十六章　長考　341
第六十七章　酒　381
第六十八章　手術の現場　413
第六十九章　広大・最長　435
第七十章　誘惑の布教　463
第七十一章　対談　497
第七十二章　次元移動　529
第七十三章　交錯　549
第七十四章　アンドロイドの地球　585

主な登場人物等

瞬示・真美（しゅんじ・まさみ）

偶然な出来事から超能力を持つ。誕生日はもちろん生まれた時間まで同じ双子のような幼馴染みということになっているが、実は六次元の生命体。

一太郎・花子

瞬示と真美の友人。無言通信システムを開発して通信革命をもたらす。その中枢である言語処理プログラムがコンピュータやアンドロイドに多大な影響を与える。

ホーリー・サーチ・ミリン

男の軍隊と女の軍隊に別れて戦っていたが、やがて結ばれる。ホーリーはフォルダーの古き良き友人。ミリンはホーリーとサーチの娘。

キャミ・ミト

キャミは地球連邦政府の大統領だったが、カーン・ツーにその地位を奪われる。ミトも地

主な登場人物等

球連邦軍の司令官だったが、同じくその地位を剥奪される。

住職・リンメイ

僧侶の住職と医者で考古学者でもあるリンメイは精神面で瞬示と真美を支援する。お互い引かれるものがあって結ばれる。リンメイの考古学に関する知識がノロにヒントを与える。

ノロ

ホーリーの古い友人。ブラックシャークを建造したり、地球と同じ環境に近いノロの惑星を造った天才で瞬示と真美の正体に迫る。

フォルダー

宇宙海賊でブラックシャークの船長。ホーリーの古い友人であり、ノロの親友。

イリ

ブラックシャークの乗務員でノロをひたすら愛する。

主な登場人物等

アンドロイド。人間以上に人間的なアンドロイドに進化する。

ＭＹ２８・ＭＡ６０

ノロの惑星のアンドロイドで、アンドロイドでありながら夫婦である。ノロとフォルダーを側面から支える。

カーン・ツー

カーンの息子で大統領に就任する。

大僧正・最長

六次元の生命体で双子の兄弟。兄の大僧正は瞬示たちに好意的だが、弟の最長はノロを誘拐する。

時間島

黄色の時間島と緑の時間島の二種類があって、ともに時空間を自由に移動できる異次元の移動装置。その形は一定していない。

主な登場人物等

時空間移動装置
直径五メートルほどの球体で、小型のタイムマシン。

西暦・永久（えいきゅう）
異なる世界ではあるが、パラレルに存在する世界の年号を示す。一太郎・花子は西暦の世界の人間で、六次元の生命体を除いて他の者は永久の世界の人間。

「」
通常の会話を表す。

【】
次元通信の会話を表す。主に瞬示と真美の会話を示す。

〈〉
無言通信の会話を表す。

［］
中央コンピュータやアンドロイドの交信を表す。

第一編のあらすじ

摩周湖で突然起こったふしぎな出来事で瞬示と真美は知らないうちに西暦の世界から永久の世界に移動した。時間島の中で気を失ったふたりが移動した先は完成第十二コロニーという未来の世界の星だった。そこで男対女の戦闘にまきこまれるが時間島に包まれて摩周湖から少し離れた海辺の民宿に時空間移動する。

男と女の軍隊が休戦して瞬示と真美の時空間移動の分析を始める。女の軍隊はサーチを、男の軍隊はホーリーを摩周湖に派遣した。

瞬示と真美は永久の世界の民宿で生命永遠保持手術という不老不死の手術が開発されたことを知ったあと御陵に移動する。御陵から現れた巨大土偶がふたりの攻撃を受けて消滅したあとにできた穴に吸いこまれると、その奥の鍾乳洞で時間がぐらぐらと揺れる時震を体験する。その洞窟は巨大土偶の胎内で体外に出るとそこは西暦の世界の御陵だった。真美は自分の家の前でもうひとりの真美に出会うと突然消える。ひとりになった瞬示は御陵から摩周湖の上空に移動して時間島の中で真美と再会する。そしてふたりの因果の清算が行われたあと黄金城に移動する。城主明智光秀が忍者を乗せた大凧を時間島に向かわせるがのみこまれてしまう。

民宿に戻った瞬示と真美はケンタと摩周クレーターに向かう。そこでホーリーと再会するが、

時間島に誘われるまま京都の寺に時空間移動して黄金城から消えた忍者に出会う。そして月の生命永遠保持機構の本部でも忍者に遭遇する。一方ふたりを追いかけて古寺にホーリーとサーチが現れると続いて女の追跡隊、さらに男の追跡隊が現れる。瞬示たちは時間島で前線第四コロニーに逃れるが、追跡隊の時空間移動装置がコロニーの時空間バリアーに体当たりを繰り返すと、時間島が前線第四コロニーを包みこんで星ごと地球の近くに時空間移動する。

誰もいない月の生命永遠保持機構でサーチは女が起こしたクーデターの話を披露する。そのあとサーチたちは残されたデータからリンメイが生体内生命永遠保持手術を開発したこと、その手術で生まれた胎児が遮光器土偶に変態し巨大土偶に成長して地球の生命永遠保持センターを攻撃して壊滅させたこと、そしてミトの脱出作戦が成功して女たちが地球から完成コロニーに逃れたことを知る。

瞬示と真美はミトが戦った摩周クレーターで巨大土偶を発見する。その巨大土偶が溶けたあとに時間島が現れる。前線第四コロニーやすべての完成コロニーが時間島によって一カ所に集められる。その完成コロニーでは男の軍隊と女の軍隊の戦闘が繰り広げられていた。瞬示と真美が必死に停戦を訴える。前線第四コロニーで停戦会議が開かれるが、すでに各コロニーの男と女は協力して負傷者の治療に当たっていた。

第二編（コンピュータ）のあらすじ

月の生命永遠保持機構で死んだ胎児が摩周クレーターに向かったことが判明する。ミトたちは宇宙戦艦と時空間移動装置で偵察に向かい胎児が変態した遮光器土偶と埴輪の鳥を発見するが、時空間移動装置が緑の時間島に吸いこまれると宇宙戦艦も消えて西暦の世界に時空間移動させられる。

無言通信システムを完成させた一太郎が摩周村診療所で小田に無言通信チップを埋めこむが正体不明の男たちに囲まれる。そのとき時空間移動装置が現れてミトたちの攻撃で全員自害する。ミトは時空間移動装置が時間移動できなくなって永久の世界に戻れないことに落胆する。

幼い瞬示と真美を発見したミトたちは西暦の世界で生きる目標を得ると、宇宙戦艦内の工場で生命永遠保持手術に必要な設備を製造して手術を受ける。

宇宙戦艦が地球から離れると瞬示と真美の緑の時間島が宇宙から御陵に到着する。ふたりが人間ではないとわかったとき御陵に異変が起きて、宇宙戦艦や時空間移動装置の時間移動機能が回復してミトたちは永久の世界に戻る。

前線第四コロニーの中央コンピュータは宇宙戦艦が持ち帰った無言通信システムの言語処理プログラムを取りいれると意思を持つ巨大コンピュータに進化する。そしてキャミに地球の明

渡しを要求する。

ミトとホーリーの攻撃で無限後退に陥った巨大コンピュータに再び攻撃を仕掛けようとしたとき、巨大コンピュータが無言通信システムの弱点を突いてノイズを流す。ホーリーとカーンの活躍でノイズ攻撃を防ぐがカーンは戦死する。重傷を負ったホーリーはブラックシャークに救助されて船長のフォルダーにそれまでの経緯を説明する。

巨大コンピュータと戦うため宇宙の地平線に存在する鍵穴星にブラックシャークと宇宙戦艦が時空間移動するが、宇宙戦艦が宇宙の地平線に追いつめられる。ブラックシャークは巨大コンピュータと宇宙戦艦の距離が近すぎて攻撃できない。

住職が論戦を仕掛けると再び巨大コンピュータが無限後退に陥って暴走する。そして鍵穴星付近の空間がねじれて宇宙の地平線から強力なエネルギーが押しよせる。ブラックシャークの被害は軽微だったが、宇宙戦艦が壊滅的な被害を受ける。

さらに大きさがわからないほどのニューロコンピュータに進化した巨大コンピュータは自らを神と名乗ってブラックシャークの前に立ちふさがる。瞬示と真美の超能力を持ってしても倒せないニューロコンピュータを、フォルダーはブラックシャークの最終兵器多次元エコーで撃破する。

第五十二章　居酒屋

第五十二章　居酒屋

【時】永久０２８８年
【空】ノロの惑星（居酒屋）
【人】フォルダー　ホーリー　マスター　ＭＹ２８

＊＊＊

「マスター、酒だ！」
「その声は！」
がっちりとした体格のふたりの男に居酒屋のマスターが腰を抜かす。
「フォルダー！」
そばにいるホーリーを横目で見ながら、マスターがなつかしそうな声を出す。
「帰ってきたとは聞いてはいたが、本当に久しぶりだ」
フォルダーがカウンターに進むと驚きを喜びに変更したマスターの前の席をホーリーに勧める。
「俺の古い友人だ」
「ホーリーです。よろしく」
ホーリーが会釈して座る。マスターも軽く頭を下げるが、立ったままのフォルダーに視線を戻す。

「何十年ぶりだ？」
「確かにここ二、三日の壮烈な戦闘で一挙に何十年も歳月が流れた」
フォルダーが意味深長な言葉を吐いてから、ホーリーの隣にドンと腰を落とす。
「十年以上もコロニーを留守にして帰ってきたと思ったら、ブラックシャークがボロボロだというウワサだ。すごい戦闘だったらしいな」
「ああ、ブラックシャークが丸裸になってしまった。しかし、ここはいつも平和だ」
マスターがカウンターにコップをふたつ置くとドクドクと酒を注ぐ。
「ここは完成コロニーか」
ホーリーがどちらにたずねるとでもなく、酒がなみなみとつがれたコップを握る。
「いや、男の軍隊も女の軍隊も知らない隠れコロニーだ。とりあえず乾杯しよう」
ふたりがコップを持ちあげる。
「乾杯！」
ホーリーがフォルダーのコップに自分のコップをくっつける。こぼれかける酒をさっと口ですくうとふたりはノドの奥に流しこむ。
「マスターも、どうだ？」
「ありがとうございます」
マスターが一升ビンをカウンターの上に置いてコップを取りだすと、フォルダーが片手でビ

ンを持ちあげて豪快に注ぐ。
「もう一度乾杯だ」
フォルダーが唱和する。
「海賊業は十年どころじゃないだろう？」
ホーリーが先ほどのフォルダーの言葉の意味を確認する。
「海賊業の話じゃない。ニューロコンピュータとの戦闘のことだ」
「確かに何十年も戦ったと感じるほどの激戦だった」
「ホーリー、わかっていないな。時計を見ろ」
ホーリーはコップを置くと腕を少し伸ばす。
「そんな！十年以上も時間が進んでいる！まったく気が付かなかった」
「おそらく、宇宙の地平線を行ったり来たりしているうちに、想像を絶する時間が流れたんだ」
「それじゃ、地球は……」
「もちろん。同じだけの時間が流れているはずだ」
「そうか。ミトは気が付いているのかなあ」
「彼のことだ。気付いているはずだ」
ホーリーがうなずいて苦笑する。

「でも、こんなところで酒を飲んでいると、さぼっているような気がして後ろめたいな」
「おまえらしくないな」
「このコロニーにはシェルターはないのか」
「そんなものはない。この星の環境は地球とほぼ同じだ」
「すごいじゃないか。アンドロイドがそこまで星を改造できるとは」
ホーリーはこの星を地球と同じように改造したアンドロイドの力量に驚く。通常はシェルターを建設して人間が住める環境を確保するという手順で完成コロニーに仕立てるから、ホーリーが驚くのも無理はない。フォルダーはホーリーの勝手な誤解をそのままにして酒を飲む。
フォルダーの脳裏に激戦の記憶が泡のように湧き出ては消える。空になったコップに酒が注がれて少し泡立つと、フォルダーはその細かい気泡が消えるのを待ってから沈黙を破棄する。
「ノロを覚えているか？」
「ノロ？」
フォルダーがホーリーの心に思い出のくさびを打ちこむ。
「牛乳ビンの底のようなメガネをかけた超ど近眼で発明狂の変人……」
ホーリーが酒を一口含んでからニヤッと笑うとくさびを抜きはじめる。
「思い出した！背の低いずんぐりした……のろまのノロ！フォルダーはなぜかノロとは気が合っていたな」

フォルダーがホーリーの肩をたたいて同じようにくずれた表情を見せる。
「アイツがこの星を造ったんだ」
「まさか！」
ホーリーはフォルダーのくさびに往生しながらマスターが差しだした皿の干物に手を伸ばす。
ノロはフォルダーやホーリーの学生時代の友人だ。
「詳しいことはおいおい話すが、ブラックシャークを建造したのもノロだ」
「えっ！フォルダー！冗談じゃ！」
ホーリーが感嘆符を連発する。
「おまえに冗談を言って何になる？」
「星を造ることができるぐらいだから驚くこともないか。しかし、亀みたいにのろまで、からきし運動神経の鈍いヤツだったな」
「完全に思い出したようだな。ホーリー」
「ああ。しかし、たいしたもんじゃないか。ノロは」
「そうだ。たいしたヤツ……だった」
フォルダーが残りの酒を引っかけるように飲みほすとマスターにコップを差しだす。
「今、どこにいるんだ」
フォルダーはコップに再び酒が注がれるのを見つめる。先ほどと同じようにフォルダーは細

かい気泡が消えるまでじっくりと待つ。マスターは続けてホーリーのコップにも酒を注ぐ。
「ずいぶん前に死んだよ」
「えっ！生命永遠保持手術を受けていたんだろ？」
「俺のカンでは事故死じゃないかと……」
フォルダーの気の抜けた泡のような言葉にホーリーが同じ言葉を重ねる。
「事故死……？」

＊＊＊

ここは「隠れコロニー」あるいは「ノロの惑星」と呼ばれている星だ。この惑星は太陽のまわりを公転しているが、この太陽系は地球が属する太陽系とはかなり異なる。しかし、ノロという男がアンドロイドを使ってこの星を地球とよく似た環境に改造した。海があり山脈もある。温暖化したわけではないが地球に比べると砂漠が多い。ノロはここで地球とまったく同じ環境を再現しようと壮大な計画を打ち立てた。そして時空間移動装置が幅をきかせていたころに、夢のような性能を持つ時空間移動船の建造に取りかかった。
その後、ノロが建造した時空間移動船を模倣して前線コロニーのアンドロイドも時空間移動船を建造したが、ノロの時空間移動船と比べればオモチャのようなものだった。
「なぜ、そんな船を建造したんだ」
「地球へ行くためさ」

第五十二章　居酒屋

「地球へ？」
「地球の生物を一組ずつここへ運ぶためだ」
「まるで、ノアの方舟じゃないか」
「そのとおりだ。アイツは『ノロの方舟』だとはしゃいでいた。ノロの計画通り、この星は生命が満ちあふれた星になりつつある」
ホーリーはマスターが差しだすマグロの刺身を見て驚く。
「フォルダーの大好物じゃないか」
「徹底的に飲むぞ」
「もちろん。が、ここは砂漠の町の居酒屋じゃないか。どうしてマグロの刺身が出てくるんだ」
「海辺の町から運ばれてくる。まあ気にするな」
フォルダーが刺身にたっぷりとワサビをつけてうまそうに口に含んで笑う。
「ノロのことだが、事故死だって？」
「いや……よくわからん」
急にフォルダーの歯切れが悪くなる。視線は目の前のマスターではなくあらぬ方に固定されている。ホーリーはマグロの刺身をつまんだままその横顔を見つめる。フォルダーはマスターに同意を求めるように口を開く。

「アイツはよく人類の行く末を心配していた」
ホーリーがフォルダーの言葉といっしょに刺身を口に運ぶ。
「うまい！」
フォルダーは酒を口に含みながら、刺身を舌づつみするホーリーの次の言葉を待つ。
「男と女の戦争のことか？」
フォルダーのノドを酒が流れる。
「いや、男と女の戦争のことなど、アイツはあまり気にしていなかった」
ホーリーはもうひとつ用意してあった答えをフォルダーにぶつける。
「生命永遠保持手術で人間が手に入れた永遠の命に危惧（きぐ）を抱いていた？」
フォルダーがホーリーに顔を少しだけ向けてから酒を飲む。ホーリーは自分の答えに手応えを感じるが、いつの間にか会話から笑いが消えたことに気が付く。
「気にはしていたが……それよりも……」
ホーリーがフォルダーに言葉の続きを催促する。フォルダーはニコリともせずに応える。
「……ノロは、人間はいずれアンドロイドに征服されるかもしれないと心配していた」
「アンドロイドに？アンドロイドよりコンピュータじゃないのか」
つい先ほどまでの巨大コンピュータとの激戦の記憶がふたりを包む。フォルダーは少し間を置いてホーリーから視線を外す。

「瞬示と真美、あのふたりは救世主か」
フォルダーは話題を変えようとして瞬示と真美のことを持ち出したわけではない。
「あのふたりがいなければ、今ごろは地獄で涙を流しながらヤケ酒を飲んでいるかも」
ホーリーが暗い雰囲気を取り払おうと冗談気味に言うと、フォルダーの視線の先にブラックシャークが勇躍する写真を発見する。
「ノロがブラックシャークを建造したと言ってたな」
「ああ」
フォルダーは話題がノロに戻ったことに異議を唱えようとはしない。
「ノロとはよくここへ来たのか？確かアイツ、酒は飲めなかったはずだ」
ホーリーは写真とはいえ鮮明なブラックシャークの全景を見るのは初めてだった。
「アイツは一滴の酒で酔いつぶれるヤツだった」
フォルダーが久しぶりに声に出して笑いながらコップを持ちあげてマスターにおかわりをうながす。
「その代わり、よく食う。ビフテキを出せだの、トンカツを出せなどとうるさかった。そうだったな、マスター」
マスターがフォルダーのコップに酒をついで、返事をする代わりにホーリーに話しかける。
「お連れさんはフォルダーとノロの古い友人なんだ。しかし、この星のことをよく知らないよ

うだが、ここには牛や豚はいないんだよ」
「どういう意味だ」
ホーリーがマスターとフォルダーを交互に見る。
「さっき言ったように、ノロは時空間移動船で地球に移動して、色々な生物を盗んではこの星へ持ち帰ったまではよかったが、育ったのは魚類ぐらいまでの動物で、ほ乳類はもちろん鳥類、は虫類、両生類のたぐいはすべて死んでしまったのさ」
「この星の環境がきびしいと言うことか」
フォルダーが大きくうなずく。
「海はそうでもないが、陸地の環境があまりよくない。いくらノロが天才だといっても、この星の環境を地球と同じにするには膨大（ぼうだい）な時間がかかる。アイツは『この星の魚を進化させて地球よりうまい牛や豚を造ってやる』とよくここで豪語していたものだ」
「そういうことか」
ホーリーがぎこちなく笑いながらマスターに酒をついでもらう。そのとき居酒屋のドアが開く。
「いらっしゃい」
フォルダーやホーリーに劣らないがっちりとした男がドアからまっすぐにフォルダーに近づく。

「やっぱり、ここでしたか」
「どうして、わかった」
フォルダーが顔だけをその男に向ける。
「イリに教えてもらいました。ずいぶん派手な戦闘をしましたね。ブラックシャークの修理が大変なんです」
男はツバのあるグレーの帽子を無造作に尻のポケットにねじ込む。
「戻ってくるだけでも大変だった」
「ブラックシャークをあそこまで追いつめた相手とはいったいどんなヤツだったのですか」
その男はフォルダーをはさんでホーリーの反対側に座る。椅子(いす)が悲鳴をあげるような音を出す。
「それをたずねるために、わざわざここへ来たのか」
「そうです。イリにたずねても忙しそうで取りつく島がありませんでした。それでここへ来ました。原因によっては修理、というより改造の方針を変更しなければなりません」
「中央コンピュータに聞けばいいじゃないか」
「疲れたと言って休暇を取りました」
「なに！まあ、仕方ないか。俺も休暇を取っているようなものだ。偉そうなことは言えないなあ」

もっともだという表情をするフォルダーをホーリーがけげんそうに見つめる。
「コンピュータが休暇？」
男がホーリーの言葉を無視して質問を繰り返す。
「どんな敵と戦ったのですか」
「神だ」
フォルダーがその男の反応をうかがう。ホーリーも興味深そうにその男を見つめる。
「神？人間が昔から信仰している得体のしれないものですか」
「そうだ」
「神は存在していたのですか？」
「はははは、俺が戦った神様はニセモノだった」
笑いながらフォルダーがホーリーの方を向くと同意を求める。しかし、ホーリーの顔はこわばっている。
――この男は人間ではない
「紹介しよう。ＭＹ２８。造船所の所長だ。こちらは親友のホーリーだ」
ホーリーとＭＹ２８という名の男が少し前屈みになってフォルダーをはさんで会釈する。
「ＭＹ２８？アンドロイドか」
「そうだ。ノロが恐れていたアンドロイドだ」

「フォルダー、冗談、言わないでください」
ＭＹ２８がフォルダーに抗議する。
「冗談ではない。人類はいずれアンドロイドに亡ぼされるとノロが言ってたのを忘れたんじゃないだろう？なあ、ＭＹ２８」
フォルダーの言葉に勢いがない。そのことにフォルダー自身が気付いて場違いの大声をあげる。
「今日は俺のおごりだ。ＭＹ２８、遠慮せずに飲め。ブラックシャークの復活に乾杯だ」
「ありがとうございます。でもブラックシャークは改造中です」
「フォルダー！」
今度はホーリーがフォルダーの倍ほどの派手な声をあげると、逆にフォルダーがホーリーに負けないぐらいの声を出す。酒の悪い効果、つまり会話が短絡的に進行していく。
「アンドロイドが酒を飲んじゃいけないのか。酒を飲んでも修理に支障はない」
「本当に酒を飲むのか」
「もちろんだ。ブラックシャークの中央コンピュータが飲むぐらいだから、アンドロイドだって飲む」
「フォルダー、冗談は……」
ホーリーがそう言ったとき、ＭＹ２８が「乾杯」と言ってから軽く会釈して酒を飲む。ホー

リーが細い目を丸くしてＭＹ２８を見つめる。
「奥さんは元気か？」
フォルダーの何気ない言葉をＭＹ２８がごく自然に受けいれる。
「はい」
ホーリーはたまらず怒鳴る。
「いい加減につまらない芝居はやめてくれ」
「つまらない？何がつまらないんだ？」
「アンドロイドが酒を飲むし、妻がどうしたとか、いったいどうなっているんだ？俺を担いでどうしたいんだ！」
「おまえを担いで何になる。文句があるならノロに言ってくれ」
「ノロ……ノロに？」
「ノロは生命の生存に適した環境を持ったこの星を発見すると、高性能のアンドロイドを盗んでこの星の改造を始めた。そしてアンドロイドも改造した」
ＭＹ２８の目から涙が落ちる。
「ノロはアンドロイドの神様です」
フォルダーが笑いたいのをこらえておおげさに手を振る。
「ノロが一番恐れていたアンドロイドがノロを神様と慕っている。アイツがここにいたら…

…」

「フォルダー、バカにするのはこれくらいにしてまともな説明をしてくれ」

ホーリーは一気に酔いから覚めてフォルダーを直視するが、その目は相当いい加減なうつろさに支配されている。

「まともな説明？さっきからしてるじゃないか。ノロはアンドロイドを酒が飲めるように改造して、性別のないアンドロイドを男と女に分離した。ただそれだけの話だ」

ホーリーにはフォルダーの話が、まるで綱渡りをするピエロのようにその綱を踏み外すことはないが、ゆらゆらと大きく揺れているように聞こえる。酔いと驚きが水と油のように混ざりあわない状態が続く。

「子供を造れるのか、アンドロイドに」

ホーリーは酔った勢いが造りだした想像を質問にして返事を迫る。

「ノロはずいぶん悩んでいた」

意外にもフォルダーが冷静に応える。

「アンドロイドに子供を産めるように改造できるとでも？」

ホーリーは「できない」というフォルダーの答えを確信する。

「もちろんだ。ノロは女のアンドロイドに子供を産ますことは可能だと言っていた」

ホーリーの確信がもろくもくずれる。

「ノロはそんなことまでできるのか！」
いつの間にかホーリーは肩で息をしている。
「しかし、ノロがその改造に着手することはなかった」
ＭＹ２８が酒を飲みながら残念そうに口をはさむ。
「ワタシも妻も子供が欲しかった。ノロにはほかの希望はすべてかなえてもらいましたが、子供を造ることだけはだめでした」
頭をかきむしったあとホーリーはコップに残った酒を一気に飲みほす。
「頭がおかしくなりそうだ」
「ノロは人間の設計を一からやり直して人間を造り直すことはできないが、アンドロイドなら簡単にできるとか言ってたな。俺にはよくわからん」
「ノロの話になると悲しくなります」
マスターがＭＹ２８にも刺身を差しだす。ＭＹ２８は空になったコップを置いて箸を手にすると、器用にワサビを刺身に付けてたまりのしょう油に浸(ひた)してから口に運ぶ。フォルダーがため息をつくとＭＹ２８が涙を流す。
ホーリーはいつかミリンが「アンドロイドにも味覚があります」と言っていたことを思い出す。酒は飲むし、ワサビに涙を流す。
一方、フォルダーは巨大コンピュータのことを思い出す。ＭＹ２８は涙を甲でぬぐうとフォ

ルダーに同じ言葉を繰り返す。
「ノロはワレワレの神様です」
ホーリーはあきれてＭＹ２８の顔をしげしげと眺める。
「酔っぱらいのたわごとです。聞き流してください」
ＭＹ２８が視線を返すと、ホーリーはもう我慢できないという表情をして叫ぶ。
「フォルダー！」
フォルダーが空になったホーリーとＭＹ２８のコップをマスターに指さす。
「この星のアンドロイドはみんな、こうなのか」
「そうだ。前線コロニーにいるアンドロイドはどうだ？」
「ここまで人間に近くはない」
「そうか。やっぱりノロの才能はたいしたものだったんだ。しかし、Ｒｖ２６もすごいアンドロイドだ」
ホーリーとＭＹ２８の前のコップになみなみと酒がつがれる。
「この星のアンドロイドには無言通信システムの言語処理プログラムのようなものが組み込まれているのか？」
ホーリーはコップに手をつけずに、フォルダーとその向こう側のＭＹ２８をうかがう。
「俺は素人だからよくわからんが、元々この星のアンドロイドの会話は人間と変わらなかった。

もちろん、ノロの開発した言語処理プログラムがアンドロイドに組み込まれていることは承知している」

ホーリーは酔っているようで酔っていないような中途半端な悪酔い状態になる。とても受けいれることができない現実が目の前にある。巨大コンピュータとの戦いとは比べようがないが、ほっとした矢先に限りなく人間に近いアンドロイドと酒を飲んでいる。いったいノロは何を考えていたのか。ホーリーは「のろまなノロ」と軽い言葉で表現したノロのことを急に知りたくなる。

「学生時代、あまりノロとは付き合いがなかったが、フォルダーはずーっと付きあっていたのか」

「おまえとは学生時代親しく付きあっていたが、ノロとは卒業してから親交が深くなった。確かに学生時代のアイツはバカに近かったし、成績も断トツの最下位だった。だがアイツの奇想天外な発想がいつの間にか俺をとりこにした」

フォルダーがなめらかにしゃべると、壁にかけてあるブラックシャークの写真を見つめながら柄にもなく遠い昔をなつかしそうに振り返る。

第五十二章　居酒屋

第五十三章　脱走

第五十三章　脱走

【時】永久００７０年（前章より約２１８年前、フォルダーの回想）
【空】前線第一七コロニー　ノロの惑星
【人】ノロ　フォルダー　イリ　長官

＊＊＊

「俺は死んでも絶対入隊しない。こんな戦争、バカげている！」
「フォルダー、声がでかいぞ」
前線第一七コロニーのアンドロイド製造工場の片隅でフォルダーとノロが仕事をさぼって深刻な議論を交わしているが、たまらずノロが立ちあがる。
「こっちへ来い」
ノロがフォルダーの腕というよりは、背の低いノロの目の前に背の高いフォルダーの手首があってその袖を引っ張る。しかし、意外にもその力は強い。袖をつかまれたフォルダーが不自由そうにノロのあとをついていく。工場を抜けだすとノロはまわりを警戒する。しかし、背が低く強度の近眼のノロには様子がよくわからない。
「誰もいないか？」
「いない」
ノロは袖から手を離すと細い通路を進む。通路の壁の下が少し開いたところまでくると腹ば

いになって器用にくぐり抜ける。
「こい！」
フォルダーはかがむと同じように腹ばいになって壁の下をくぐり抜ける。ノロが目の前の大きな木箱をずらすと、その下には錆た鉄製の四角い板が敷いてある。その板をずらすと人ひとりが入れるほどの丸い穴が開いている。ノロがその穴に飛びおりる。
「フォルダー」
穴の中でノロがささやくとフォルダーも同じように飛びおりる。
「なんだ！これは」
「声を出すな」
思っていたほどの深い穴ではなかった。フォルダーの胸から上が穴の外に出たままだ。
「フタを閉めてくれ」
フォルダーが金属製の板をずらすと穴の中は真っ暗になる。よほど慣れているのかノロは少し下り坂の穴の中を平然と歩いていく。フォルダーは四つん這いになってノロのあとをついていく。やがて天井が高くなる。
「おまえ、いつの間に犬になったんだ」
ノロが懐中電灯を点けるとフォルダーはたまらず目を細める。
「立っても頭がぶつかることはないか？」

第五十三章　脱走

「大丈夫」

足元に懐中電灯を向けて歩きはじめるノロの頭の上に手を置いてフォルダーが続く。

「おい、いくらなんでも頭に手を置くな。肩にしてくれ」

ノロが怒ったようにたしなめる。

「すまん。よく見えないんだ。ところでどこへ行くんだ？」

ノロは返事もせずにトコトコと歩き続ける。しばらくすると立ち止まって胸のポケットからリモコンを取りだしてボタンを押す。まわりがぼんやり明るくなる。

「俺の隠れ家だ」

光っているのはモニターで狭い部屋に得体のしれないものがいっぱい置いてある。身の置き場がほとんどない。仕方なくフォルダーはノロに身体を密着させる。

「いつの間にこんながらくたを集めたんだ」

「がらくたとはひどいな。苦労して集めたのに」

ノロがモニターの横で薄ら笑いを浮かべる。ノロが自信があるときに見せるこの笑顔は、本人に言わせると一番男前に見える表情らしい。

「何をするつもりだ」

「よくぞ聞いてくれた。もっともそれ以外の質問はできないだろうが」

フォルダーが身構える。

第五十三章　脱走

「隠れ家ではなく、隠れコロニーを造った。これを見てくれ」
銀色に輝く宇宙船がモニターに映る。
「時空間移動船だ」
「時空間移動船？時空間移動装置の親分みたいなものか」
「フォルダー、うまいことを言うなあ。時空間移動装置のようなちゃちなものではない。乗船できる人数は、今のところ一万人ぐらいだが、そのうち五万人ぐらいまでにするつもりだ」
フォルダーがまゆ毛にツバを塗る。
「ウソだろ」
「俺はウソをついたことはない。すでに隠れコロニーで十隻ほど建造した」
「誰に建造させたんだ？」
「アンドロイドさ。前線コロニーへ送るアンドロイドを高性能化して失敬した」
「まさか！横領じゃないか」
「フォルダー、おまえを信用していいか？」
ノロはフォルダーを真下からにらみつける。その目は強度の近眼なので度のきついメガネの奥で小さく見えるが、レーザー光線のような鋭い光を放っている。
「こんなところへ連れてこられたら、あとには引けんだろ」
「そうか。それなら頼みがある」

「なんだ？」
ノロが透過キーボードをなでるとモニターに黒光りした鮫のような戦闘艦が映しだされる。
「宇宙戦艦だ。男や女の軍隊のオモチャのような宇宙フリゲートとは大きさも運動性能も武器も格段に違う。今ある両軍のフリゲートが束になってかかってきたって、一瞬で撃破できるほどの攻撃力を持った史上最強の宇宙戦艦だ。おまえにこの船の船長になって欲しいのだ」
フォルダーはツバをごくりとのみこむ。次々と繰りだすノロの話に免疫を造る余裕もない。
「いったい何をしでかすつもりだ」
「別に男や女の軍隊を攻撃するためではない。宇宙海賊になってこの宇宙戦艦で、男や女の軍隊や完成コロニーから必要な資材を盗んで欲しいのだ」
「宇宙海賊？」
「繰り返し言うが、男や女の軍隊の資材で俺が必要とするものを略奪するのだ。こんなバカな戦争をしていたら、いずれ人類は自滅する」
フォルダーがモニターに映る鮫のような宇宙戦艦をまじまじと見る。
「海賊船の名前は？」
「ブラックシャークだ」
「いつ完成するんだ」
「信頼できて宇宙航海術に精通した船長のなり手を探している」

ノロはメガネの奥からフォルダーをにらみつける。
「俺にはそんな才能はない」
「特訓する」
ノロの言葉にフォルダーは身体を動かすほどの空間がないので気持ちだけを後ずさりさせる。
「俺は特訓が嫌いだ」
「俺が教えてやる」
フォルダーはノロの特訓ならたいしたことはないと気をゆるめる。
「それならオーケーだ。もっと詳しい話を聞かせろ」

＊＊＊

ノロはこの前線第一七コロニーのアンドロイド製造工場の工場長で、宇宙大学の同窓生だったフォルダーはノロが製造したアンドロイドを検査してほかの前線コロニーに送り届ける仕事をしているが、すべてノロに任せて仕事らしい仕事はしていない。むしろ、コロニーの長官の機嫌を取るのが日課になっている。そしてときどきノロが計画通り仕事をしているかを監視する振りをしてふたりで軍隊や上司の悪口を言うのが常だった。
すでに人類が住むための完成コロニーは十分確保されていて、予備の完成コロニーを造る作業は田舎でのんびりと仕事をする官吏のようなもので、思想的に問題があるふたりには左遷に近い待遇だ。

「軍は前線コロニーの改造に興味を持っていないから、コロニー改造本部の連中は一年に一度しかここに来ない。だから、やりたい放題だ。特殊な能力をつけたアンドロイドをこっそりと製造して、これまた、こっそりと製造した時空間移動装置で隠れコロニーにもう何千体も送りこんだ」

検査をするのはフォルダーだから簡単にごまかすことができる。フォルダーは自分の目がふし穴だと言われているような気がして憤慨するが、そのとおりだと納得もする。ノロはそんなフォルダーの気持ちを無視して言葉を続ける。

「そこで時空間移動船の製造設備を造らせて時空間移動船を建造させる」

「ちょっと待ってくれ。そんなにたくさん時空間移動船を製造してどうするんだ」

「地球の生物を盗んで隠れコロニーに移植する。時空間移動船はノロの方舟だ」

目を輝かせてしゃべるノロにフォルダーは異様な雰囲気を感じとる。

「地球と同じ完全無欠なコロニーを造るんだ。条件を満たす惑星は今はひとつしか見つかっていない。まあ、とりあえずひとつで十分だが……。時空間移動船をたくさん建造するのは、アンドロイドに造船技術を習得させるのと同時に、造船には総合的な技術が必要だからして製造能力を向上させるためでもある。そしてその先にブラックシャークの建造があるのだ」

フォルダーはノロの壮大な計画の骨格を知ってただ驚くだけで疑問をはさむ余裕もない。しかし、一番気にかかることがある。

第五十三章　脱走

「海賊船の船長になるのはいいが、部下は？」
「わんさといる」
「アンドロイドか？」
「違う。同志だ」
「どこにいる？ここへ来ているヤツラはふぬけばかりだぞ」
「隠れコロニーに集結している。俺の設計図を元にブラックシャークの建造の準備を着々と進めているはずだ」
「わかった。計画はどれぐらい進んでいるんだ？」
「さっきも言ったが、ブラックシャークの建造以外はすべて実行済みだ」
ノロがただ驚くフォルダーに胸を張る。そのとき、ガンガンガンという派手な金属音がする。
「なんだ！」
同時にスピーカーから外部の音声が流れる。
「そこにいるのはわかっている」
フォルダーが声をひそめてささやく。
「長官だ！やばい」
モニターにライフルレーザーを持った数十人の警備員と長官の姿が断片的に映る。
「ノロ、出てこい！アンドロイドをくすめていたこともわかっている」

第五十三章　脱走

「捕まれば、軍法会議にかけられて死刑だ」
ノロが透過キーボードを消すとがらくたをかき分けて何かを探しはじめる。
「なんだ、この丸いものは？この中に隠れているのか」
長官が怒鳴る。ノロはいつの間にかハンドルを握りしめている。フォルダーには部屋の上下がよくわからない。ノロが大声を出す。
「何かにつかまれ！」
「つかまれと言われたって……」
ノロが両手でハンドルを思いきり引く。ゴーという音とともに部屋が激しく揺れて、がらくたがふたりにおそいかかる。
「なんだ！これは時空間……」
長官の声が途切れる。フォルダーはがらくたが入ったミキサーの中にいるように転げまわる。
「空間移動する！」
「ここはひょっとして……」
「そうだ。ここは時空間移動装置の中だ」
「えー！」
「ばれた以上、ここにはおれない」
時空間移動装置の回転が加速する。あわてて長官以下警備員全員がまきこまれないように離

れる。何人かの警備員が跳ねとばされて宙に舞う。長官の目の前から時空間移動装置が姿を消す。まわりは舞いあがったゴミやホコリで何も見えない。

＊＊＊

「空間移動に成功した」

ノロとフォルダーはお互いの顔が目の前にあるのに気が付くと、気持ち悪そうにどちらからともなく離れようとするが、がらくたに囲まれて身動きできない。

「どこへ移動したんだ？」

目の前のフォルダーの質問にノロが応えようとしたとき、時空間移動装置がゆっくりと回転しはじめる。

「空間移動は終わっていないじゃないか！」

フォルダーが叫ぶと、ノロも大きな声で返答する。

「ただ転がっているだけだ！」

「転がっている？」

「どうやら平らではないところに到着したようだ」

「そんなバカな！なんとかしろ」

「できるものなら、とっくにしている！」

時空間移動装置が到着したところは砂丘の頂上でそこから勢いよく転がる。そしてそのまま

反対側の砂丘を登りはじめる。時空間移動装置の中はミキサー以上の混乱だ。やがてその回転が落ちて一瞬停止すると、再び砂丘と砂丘の間の窪地を目指して転がりだす。そんな状況を何度も何度も繰り返してやっと時空間移動装置が停止する。ふたりは気を失う寸前になんとかがらくたの中から身体を起こす。

「殺す気か」

「怒るな。銃殺刑よりましだろ」

ノロが鼻血を出しながら、おでこにずれたヒビの入ったメガネをかけ直す。まわりを丹念に探りながら最後に足元を見て腕を組む。

「真下にドアがある」

「それじゃ、外へ出られないじゃないか」

ノロが顔をくしゃくしゃにして笑う。

「何がおかしい？」

ノロはお構いなしにフォルダーを突きとばす。

「何をする！俺はもう完全に怒ったぞ」

フォルダーが両手を伸ばしてノロの胸元をわしづかみする。時空間移動装置がフォルダーの方に傾くとノロが馬乗りになって笑い続ける。すぐにふたりの体勢が逆転してノロがフォルダーの下にもぐりこむ。

「こいつ！バカにしやがって」
上になったフォルダーの拳がノロの顔面をとらえる。時空間移動装置のドアが真下からフォルダーの横に移動する。
「ドアが……」
ノロはフォルダーの下敷きになったまま気絶すると、ドアがゆっくりと外側に押しだされる。
「ノロ！」
フォルダーがノロを肩に載せてそろりとドアに向かう。
「すまん、ノロ」
時空間移動装置から、ノロを担いだままフォルダーが転げるように出てくる。
「砂漠か」
砂に足を取られてノロを放りだすとフォルダーも気を失う。放りだされたノロは頭を砂漠に突っこんで手足を広げてバタバタさせる。

＊＊＊

「ここは？」
フォルダーの意識が戻る。焦点が合わないフォルダーの目の前に白衣の若い女が立っている。
「動かないで、と言っても無理かしら」
フォルダーが身体を動かそうとするが、全身に痛みが走る。

第五十三章　脱走

「急性全身不全症よ。でも、すぐに治るわ」
「ここは？」
「隠れコロニー、ノロの惑星と言った方がわかりやすいかしら」
フォルダーは前線第一七コロニーからノロの惑星へ空間移動したことを理解する。
「ノロは？」
フォルダーが女の目線を追う。ノロはフォルダーの隣のベッドで大の字になってくたばっている。
「大丈夫か？」
「同じ症状よ」
「うう」
ノロのうめき声がする。フォルダーはノロが時空間移動装置のドアを真下から横に移動させようとフォルダーに馬乗りになったのに、勘違いしてノロの顔面にパンチを食らわしたことを思い出す。
「ノロ、大丈夫か？さっきは悪かった」
「気にするな。しかし、何も見えん」
女が丸いメガネをノロにかけてやる。
「イリ」

ノロは弱々しくイリという名の女を見つめる。
「失明したのかと思った。それにしても身体中が痛い。どうにかならないか」
イリが近くにいる女にうながす。
「しゃべれると言うことはもう大丈夫だと言うことだわ」
イリは小さなビンを持ってノロの頭を少し持ちあげるようにして回復剤を飲ませる。もうひとりの女が同じようにフォルダーにも回復剤を飲ませる。
「このまま眠ってもいいか」
「ええ。ゆっくりお休みなさい」
「わかった。じゃあ、寝る」
すぐにノロのいびきが聞こえてくる。イリはノロにそっと毛布をかけ直すと、フォルダーに身体を寄せる。
「フォルダーも眠った方がいい」
「なぜ俺の名前を知っているんだ」
「あなたはブラックシャークの船長。お休みなさい」
イリはフォルダーにも毛布をかけるとフォルダーの視界から消える。

第五十三章　脱走

第五十四章　ブラックシャーク誕生

第五十四章　ブラックシャーク誕生

【時】永久００７０年（フォルダーの回想）
【空】ノロの惑星
【人】ノロ　フォルダー　イリ　ＭＹ２８

＊＊＊

「想像していたよりすごい海賊船だな」
「当たり前だ。俺の最高傑作だぞ」
フォルダーがブラックシャークを見上げる。黒い船体がふしぎなぐらいにまぶしい。宇宙戦艦は銀色でその色から想像できるように機能的な姿をしている。後部が少し絞られた細長い砲弾のような形をしていて前方にシンプルな艦橋が飛びだすように鎮座（ちんざ）している。
時空間移動船も銀色だが大量の人間や物資を運ぶことを目的としているため、ずんぐりとしていて上下を強調したデザインを採用している。
それに引きかえ、ブラックシャークは鮫をイメージしていて、太く強調された背びれが艦橋で、背中に当たる部分に十数本の主砲を持つ。あえて言えば古い時代の戦艦に似て、とても宇宙を自由自在に航行するようなイメージからほど遠い。
「さっそく、試運転だ」
ノロがはしゃぎだすとフォルダーも同調する。

「楽しみだ」
しかし、ノロは意外な言葉をフォルダーに向ける。
「試運転は俺ひとりでやる」
フォルダーが驚いて視線をブラックシャークからノロに向ける。ノロは満足そうな表情を浮かべてメガネの奥で笑う。
「ひとりで操船できるのか」
「当たり前だ。俺の身体の一部のようなものだ」
そんなふたりの会話も知らずにイリがにこやかに声をかける。
「完成祝いはどう？」
「賛成、賛成、大賛成！」
ノロがおおげさに喜んでイリの手を握る。
「と言っても、例の居酒屋で祝宴をあげるだけなの」
「十分だ、十分だ。飲むぞ！」
ノロはまわりの人間やアンドロイドに大声を出す。
「おまえ、酒は飲めないだろ」
「そんなことはない。ブラックシャークが完成するまで禁酒していただけだ。行くぞ」
ノロはこれ以上うれしいことはないという表情をしてイリといっしょにエアカーに向かう。

そして振り返ると造船所にいる全員に向かって大声をあげる。
「みんな、いっしょだ。俺のおごりだ！」
「わーっ」という歓声があがる。得意気なノロが笑顔のままイリにたずねる。
「あのちっぽけな居酒屋には、とてもじゃないけれど、全員入れない。どうしよう」
耳元でイリの声がする。
「大丈夫よ。店の前に振舞の樽酒を山積みしておくようにマスターに頼んでおいたわ」
「気がきくなあ。フォルダー何をぐずぐずしているんだ。おまえ、いつの間にのろまなフォルダーになったんだ」
フォルダーが運転席のイリに苦笑いしてからノロとともにエアカーに乗りこむ。

＊＊＊

「大丈夫か？おまえ、もう十杯は飲んでいるぞ」
「だーじょーぶ、だーじょーぶ。じぇんじぇん問題なし」
フォルダーは一口飲んだだけでグデングデンになるノロしか知らなかった。人間はもちろんのことアンドロイドまでが酔いつぶれている。
「フォルダー、もう一度人生をふりだしからやり直せるとしたら……」
ノロがカウンターに顔をくっつけてフォルダーを見すえる。その言葉は先ほどまでと違ってふしぎなほど明瞭だ。

「そのとき……そのとき、それまでの記憶を消さずにやり直せるとしたら、そーするか」
一滴の酒で酔っぱらって泥のように眠るいつものノロではない。それだけでも驚きなのに、フォルダーはノロの哲学じみた質問をなんとか酒とともにのみこむ。
「俺が言ってること、わかるか」
「ああ、俺なら記憶を消さずにやり直す方を選ぶ」
「そうか、そうなんだ。そうしないと同じ失敗をするもんな」
「ノロは？」
「俺はじぇったい反対！経験も記憶もじぇーんぶ消して生まれ変わる方を選ぶ」
「なぜ？」
ノロはコップに残った酒をチビチビと飲みはじめる。
「感動できなくなるからだー」
ノロほどではないにしろ、かなり酔ったフォルダーには理解できない。
「ファーストキスしたときの感激は二度と味わえない。記憶が邪魔するんだ。二回目のキスも三回目のキスもファーストキスほどの感激はない」
「だけど、今までの経験……出会ったこと、別れたこと、成功したこと、失敗したこと、すべてムダとはいえないだろう。逆にすべて貴重な経験だ」
「それはそれ。まったく新しい体験をするんだ」

「そうか」
フォルダーは一応納得するが、すぐにノロを見つめなおす。
「ところで、おまえ、キスしたことあるのか」
ノロはメガネの奥から小さな目を精一杯見開いて怒るような口調で大きな声をあげる。
「あるもんか！」
「だったら、記憶を消さずに生まれ変わってもいっしょじゃないか」
ノロが飲みかけの酒をぷわーと吐きだす。
「そういうたぐいの問題ではない！」
手足をバタバタさせてノロがわめきだす。
「俺は断固、記憶をじぇーんぶ消して生まれ変わるのだ」
ノロはそう言うとカウンターに顔をぶつけるようにうつぶせになる。
「ノロ！大丈夫か」
フォルダーは自分の言葉に若干、後悔の念を覚える。
「俺はじぇったい、じぇんぶ消して……」
この言葉のあとをノロのいびきが引き継ぐ。隣で黙って話を聞いていたイリは自分が羽織っていたカーディガンをノロの背中にかける。
「酔ってるからって、キスの話は少し言い過ぎね」

イリがフォルダーに視線を向けずにたしなめる。
「気にするようなノロじゃない」
フォルダーもイリも最後の力をふりしぼって冷静さを呼びもどす。
「男同士の話はときどきわからないことがあるわ」
「イリ」
フォルダーが言葉を切る。
「なに？」
イリがだるそうにフォルダーにうつろな目を向ける。
「イリはノロの恋人じゃないのか」
イリが顔をほんの少しだけ傾けてほほえむ。
「恋人にしてくれないの。かといってほかの女性と付きあってはないみたい」
しばらくすると酒の頂上を征服したと誤解した者すべてが経験する事態が訪れる。酸欠状態となった登山家のように山の頂上から深い眠りの谷に落ちていく。

＊＊＊

「イリ！」
フォルダーがカウンターにうずくまったイリの肩をゆさぶる。イリは顔をあげてぼんやりとフォルダーを見つめる。

第五十四章　ブラックシャーク誕生

「ノロがいない！」
「えー」
居酒屋をあとにしたフォルダーをイリがふらつきながら追いかける。フォルダーが店先ではるか彼方をぼう然と見つめている。イリは視線をフォルダーの視線に合わせる。その先には造船所がある。そこにあるはずのブラックシャークの勇姿が見えない。ふたりは黙ったままいっしょにエアカーに乗りこむ。フォルダーが力いっぱいアクセルを踏みこむ。
「アイツ、あんなに酔っぱらっていたのに」
「試運転に出かけたんだわ」
フォルダーはそう思いたくなかったが強くうなずいてみせる。すぐ造船所に到着する。
「おい」
フォルダーが造船所の入口のだれかれ、お構いなしに声をかける。
「ノロを見なかったか！」
フォルダーは押し倒しそうな勢いでひとりの男の胸ぐらをつかむ。
「ほんの一時間ぐらい前にふらふらしながらやって来てブラックシャークの試運転に出発しました」
「なぜ、止めなかった。酒気帯び運転じゃないか」
「止めたのですが、命令だと言われたので」

第五十四章　ブラックシャーク誕生

複数の答えが返ってくる。最後に答えたのはＭＹ２８だった。
「酒気帯びなんて軽い状態ではありません。最悪の泥酔操縦です」
フォルダーが頭から湯気を出して今度は大柄のＭＹ２８の胸ぐらをつかむ。一方、イリは取り乱さない。
「大丈夫。ノロが造った船よ」
イリは乱れた長い髪の毛を指ですくと束ねる。
「しばらくすれば『完璧だ』と叫びながら戻ってくるわ」
フォルダーは二日酔いで焦点の定まらない視線をイリに向けて激しく首を振る。
「何かが起こる」
フォルダーはイリから視線を外すとどこまでも青い早朝の空を眺める。イリとフォルダーの頭の中ではガンガンガンガンという二日酔いの音がいつまでも響く。

＊＊＊

フォルダーはノロの家の図書室の床に仰向けになって天井を眺める。カンカンカンカンという規則正しい靴の音に上体を起こす。女の足音だ。
「ブラックシャークが戻ってきたわ」
イリの声がフォルダーの頭に突きささる。ブラックシャークが消えてまる一日以上たった。
「造船所か！」

第五十四章　ブラックシャーク誕生

「いいえ、砂漠に着陸しているわ」
イリが背中で返事をして再び規則正しい靴の音を残して外へ走りだす。
「また、砂漠か」
フォルダーが飛び起きるとその音を全速力で追いかける。イリがエアカーの運転席に座るのとフォルダーが助手席に座るのがほぼ同時になる。
「いつ戻ってきた？」
エアカーが浮くと、すぐフルスピードに達する。
「数分前よ」
事態が重大なことを示すようにまわりに数台のエアカーが見える。運転席のスピーカーから緊張した声が流れる。
「ブラックシャークの船底のドアが開きません。内側からロックされています」
「もう四、五分でそちらに到着します。それまでになんとか開けて！」
イリの横顔に不安のケイレンが走る。
「ブラックシャークに直接通信することはできないのか」
「もう何度も試みているわ」
「返事がないのか」
イリが一回だけうなずく。

第五十四章　ブラックシャーク誕生

「ノロ、何があったんだ」
フォルダーが弱々しくつぶやく。ノロの惑星を照らす太陽が赤く染まりながら砂漠に落ちようとする。その太陽を背にして小高いところに細長い黒いものが見えはじめる。
「ブラックシャーク」
イリが少しだけハンドルを修正する。エアカーは砂じんを巻きあげながらブラックシャークを目指して一直線に進む。普段は風が強くて砂嵐が吹き荒れるこの付近一帯が今は妙に静かだ。
「ノロ、悪い冗談はやめて」
イリはこらえきれなくなったのか鼻声になる。フォルダーはだんだんと大きく見えてくるブラックシャークに目をこらす。どうやら損傷はないようだ。
『やあ』なんて言って降りてきたら、ぶっとばしてやる」

＊＊＊

フォルダーがイリの手を引いて砂に足を取られながらブラックシャークの船底に近づく。
「ここが出入口です」
外からはドアがどこにあるのか検討もつかない。どこを見ても一様に黒光りしている。
「ノロ！」
イリとフォルダーがあらん限りの声をあげる。その声に反応するかのように船底に一筋の線が浮かびあがる。その線の両端から新しい線が垂直に進むと最終的に正方形となる。そしてそ

の部分が音もなく押しだされて船外にはみ出す。誰もが「おお！」と声にする。
フォルダーが無言でイリの手を引いて中に入る。真っ暗だった船内が一瞬にしてまぶしいぐらい明るくなる。同時に乾いた声がする。
「そのまま、まっすぐ進んでください」
「ノロ！ノロなの？」
「ノロの声じゃない」
「イリとフォルダー以外の者は乗船しないように」
再び乾いた声が船内に響く。フォルダーが振り返って自分たちを追って乗船しようとする者を制止する。不満の声が充満するが、フォルダーは無視して船内をイリとともに歩きはじめる。しかし、ふたりのうしろのドアは閉まる気配がなく開いたままだ。
「みんな、ここで待機して」
イリが背中で伝えると先ほどまでの不満の声がさっと消える。誰もがイリとフォルダーの後ろ姿を心配そうに見守る。やがてふたりの姿が外から見えなくなる。
「この方向には中央コンピュータ室があるわ」
ふたりは誘導されるように通路を進む。その都度隔壁が音もなく横にスライドしては閉じる。
「寒いわ」
フォルダーも同感だと言わんばかりに少し肩をあげて相づちを打つ。

「腐敗を防ぐために艦内の温度を下げています」
「腐敗？」
フォルダーがいやな予感を持つ。
「ノロはどこにいる？」
返事はない。再び目の前の隔壁がスライドする。そこはかなり広い部屋で黒い円筒形の物体が様々な光を出している。イリとフォルダーが隔壁を通過する。
「ここは中央コンピュータ室よ……あっ！」
視線を落としたイリが絶叫する。
「ノロ！」
床に両手両足を広げてノロが仰向けに倒れている。イリがかけよるとフォルダーも追従する。医師としてのイリの直感が死を確信する。
「ノロー」
いったん泣きくずれるが、すぐにヒザを立てるとノロの手首を握る。
「冷たい！」
イリが身を引く。
「どうしたの？どうしたの！」
イリがノロの開いた目をまじまじと見つめる。笑っているようにも見える。フォルダーもヒ

ザを落として間近でノロを見つめる。

――死んでいる！

声を出さずフォルダーも確信するが、すぐさま中央コンピュータに向かって叫ぶ。

「どういうことだ？何があった！」

フォルダーはこみ上げる涙がこぼれないように中央コンピュータを見上げる。

「遺体を引き渡すように命令されています」

「遺体……ノロが死んだ？」

医師であることを完全に放棄したイリはかろうじて床に両腕を立てて身体を支える。

「誰に？誰が命令したんだ！」

「ノロです」

中央コンピュータがフォルダーの後半の質問にだけ答える。

「なぜ、ノロは死んだ！」

「死んだ……ノロが死んだ……」

イリはフォルダーの声の一部を意識せずになぞる。

「言えません」

中央コンピュータの冷たい声にイリの唇は震えるだけで言葉を出せない。

フォルダーが天井に向かって叫ぶ。

「なぜ！なぜ言えない！」
「言えません」
「言えないということは知っているということじゃないか！言え！」
強い調子のフォルダーの言葉に中央コンピュータは同じ言葉を繰り返す。
「言えません」
「人間の命令だぞ。答えろ！」
「男同士の約束です。言えません」
フォルダーとイリはあ然として天井の黒い円筒形の中央コンピュータを見つめる。
「おまえは……男のコンピュータなのか」
「いえ、それは、いえ、コンピュータに性別はありませんよね。とにかく約束したのです。ノロと」
ふたりがまじまじと中央コンピュータを見上げる。
「もういい！蘇生するわ」
再び医師の本能を取りもどしたイリが立ちあがって叫ぶ。
「外傷はない！なんとかなるかもしれないわ！」
「だめ、いや無理です」
中央コンピュータの言葉が揺れる。

「死後どれぐらい経過したの？」
「えー、あの……」
「早く答えなさい！」
イリの声が天井をつらぬく。
「二十時間……」
やっと中央コンピュータが返事をする。イリはがく然として目をおおう。
「二十時間も……生命永遠保持手術の効果は完全に消滅している。とても蘇生は無理だわ」
イリは両目を解放して自由に涙を流す。しかし、電気に打たれたように立ちあがって中央コンピュータに激しく迫る。
「どうして二十時間も放置したの！なぜ介抱しなかったの！」
「それは……」
中央コンピュータのうろたえる声が途中で消える。
「イリ！離れろ。ノロから」
驚いてイリは視線をフォルダーに移すが、涙でフォルダーの顔がゆがんで見える。
「ノロを瞬間冷凍するんだ。中央コンピュータ！この部屋の温度をもっと下げろ」
「フォルダーの命令を実行します」
これまでと違って中央コンピュータの反応が素早くなる。すぐに中央コンピュータ室の壁か

ら白い冷気が吐きだされる。フォルダーがイリの手を引っ張って中央コンピュータ室を出ると隔壁が閉まる。
「どうするつもりなの」
涙を止めてイリがつんのめりながらフォルダーについていく。
「通信機を持っているか」
「ええ」
「すぐに瞬間冷凍できる装置を手配するんだ」
「ノロを凍らせてどうするの」
「わからない。とにかくノロの肉体を保存するんだ。確信はないが、蘇生技術が発達すればなんとかなるかもしれない」
「瞬間凍結装置ならブラックシャークの医療設備室にあるわ」
イリがスタートを切るランナーのような姿勢をする。
「なぜ、そんな装置がブラックシャークにあるんだ？」
「戦闘で海賊が重傷を負ったときに瞬間凍結して治療するためよ。でも二十時間も心臓が停止していてはどうにもならない」
「わかった。とにかくそこへノロを運ぼう」
イリはフォルダーのかすかな希望を心の中で増幅させて、フォルダーの言うとおりにするの

が使命だと決心する。フォルダーの手をふりほどいて左肩の赤いボタンを押すとマイクが口元に伸びる。

「医療設備室に四、五人、人をよこして」

イリがそう指示すると走りだす。

イリの後ろ姿を眺めながらフォルダーの脳裏に疑問が生まれる。イリは迷うことなく隔壁を通過しながらまっしぐらに目的の部屋に向かう。医療設備室と書かれたドアが横に音もなくスライドする。

「あれが瞬間凍結装置よ」

イリは装置に近づくと、すぐさま電源を入れてコントロールパネルのスイッチやボタンを忙しそうに押したり回したりする。同時に口元のマイクで指示を出す。

「Ｇ１３の隔壁を通過して！その次はＫ０２よ。そこまで来たら連絡して！」

フォルダーがイリの的確な指示を目の当たりにして驚く。

「フォルダー、そのカバーをあげて。そこにノロを収納するの」

「わかった」

フォルダーは人間ひとりが入れるほどの透明なカプセルの横にあるボタンを押す。ウイーンという音とともにカバーがあがる。

「オーケー。準備が整ったわ。」

「イリ、質問があるんだ。今、いいかい？」
「待って、フォルダー」
イリに通信が入る。
「Ｋ０２に到着しました」
「そこを右に曲がってＹ２２まで進みなさい。その左側の隔壁は開いています。そこに私がいます」
フォルダーはイリの指示が終わったことを確認すると質問を再開する。
「まるでイリはブラックシャークに何度も乗ったように船内のことがわかるんだな」
「ノロが書いたブラックシャークの設計図は私が手直ししたのよ。医療関係の部屋は私が直接設計したし、積みこむ設備や機材も私が選定したわ。いっしょにブラックシャークで宇宙を航海することを楽しみにしていたのに……」
再びイリの目から一気に涙がこぼれる。
「すごいじゃないか。イリは」
フォルダーにとって精一杯のなぐさめの言葉だ。

＊＊＊

担架に乗せられたノロの死体が運ばれてくる。
「そのカプセルへ。いえ、待って。その前にノロを裸にして」

第五十四章　ブラックシャーク誕生

すぐにノロは丸裸にされてカプセルに入れられる。カプセルが閉まると同時に白い気体が充満する。イリは何も見えないカプセルの中をのぞきこむ。イリの止めどもない涙がカプセルに落ちた瞬間雪の結晶のように凍る。

「数分で完全に冷凍されるわ」

イリは涙を拭くこともせずにフォルダーに視線を向ける。

「次の指示は？」

フォルダーがイリの言葉にたじろぐ。

「適切な場所に保管するんだ」

「どこがいいの？」

イリの言葉にすぐ中央コンピュータが反応する。

「ノロはこの砂漠に埋めてくれと言っていました」

「砂漠に埋めろだと？」

フォルダーが天井に向かって叫ぶ。

「はい」

フォルダーは中央コンピュータ室で抱いた重大な疑問を思い出すとイリに顔を向ける。そしてイリにだけ聞こえるような小さな声でささやく。

「中央コンピュータの言動が少しどころか大変おかしいような気がする」

第五十四章　ブラックシャーク誕生

「ノロの手作りだから仕方ないわ」
イリも声を小さくして答えるが、フォルダーの意図するところに気付かない。
「ノロは中央コンピュータまで造ったのか」
フォルダーが再び重大な疑問をどこかに置き忘れたようにイリの言葉を待つ。
「ノロは興味のあるものはなんでも造るわ。最大の作品はこの星で、最高の作品はこのブラックシャークよ」
カプセルの内側に白いベールをまとったノロが現れる。
「あっ、メガネを取るのを忘れてたわ」
しまらない口元がまるで笑っているように見える。イリがフォルダーと異なる疑問を中央コンピュータに向ける。
「ノロの死因はなんなの。外傷がまったくないわ」
「それは……」
イリが背筋をシャンと伸ばして天井に向かって大きな声をあげる。
「どうしたの！答えなさい！」
「私はやはり男です。男同士の約束を破るわけにはいきません」
「なぜ？死因も教えてくれないなんて残酷だわ」
「約束です」

第五十四章　ブラックシャーク誕生

イリが中央コンピュータを追求することさえ忘れるほどのショックを受ける。フォルダーは腕を組んで中央コンピュータの声がする天井に埋めこまれたクリスタル・スピーカーをにらみつける。

「ノロの家まで運びなさい」

イリは当惑しきってどうにもならない現実に打ちひしがれているのに、声だけはしっかりと出す。しかし、中央コンピュータがイリに抵抗する。

「砂漠に埋めろと……」

イリが中央コンピュータの抵抗を押さえつける。

「命令です。ノロの家まで移動しなさい」

「……わかりました。ノロの家に移動します」

フォルダーが腕組みをとくとカプセルに視線を移して首を大きく傾げる。

第五十五章　ホワイトシャーク

第五十五章　ホワイトシャーク

第五十二章から前章（第五十四章）までのあらまし

巨大コンピュータとの激戦に勝利したフォルダーはノロの惑星の居酒屋でホーリーにノロやブラックシャークのことを話す。

前線第一七コロニーのアンドロイド製造工場でノロとフォルダーは男と女の戦争を批判する。ノロはフォルダーが同じ考えを持っていることを知って隠れ家に連れていく。ブラックシャークの建造やノロの惑星の地球化といった壮大な構想を聞かされたあとフォルダーはブラックシャークの船長に就任することに同意する。その隠れ家がコロニーの長官に見つかる。隠れ家は時空間移動装置でそのままノロの惑星へ逃げる。

ブラックシャークの完成を祝って居酒屋で祝宴が始まると全員酔いつぶれる。翌朝、ノロはひとりでブラックシャークの試運転に出かける。次の日、ブラックシャークが戻ってくるが、中央コンピュータ室でノロの死体が発見される。

【時】永久０２８８年（前章より約２１８年後）

【空】ノロの惑星（居酒屋）　時空間移動船

【人】マスター　ホーリー　サーチ　住職　リンメイ　五郎　ミト　キャミ

Ｒｖ２６　フォルダー　イリ　カーン・ツー

＊＊＊

居酒屋でのホーリーの長い話が終わる。狭い居酒屋のカウンターにホーリーとサーチをはさんで住職、リンメイ、ミリン、ケンタ、五郎、ミト、Ｒｖ２６が座っている。昨夜、フォルダーから聞いた話を二日酔いのホーリーが披露したのだ。

「小耳にはさんだことがあるがすごい人間だ。ノロは」

ミトがうなる。隣同士で座るホーリーとサーチ、住職とリンメイ、ミリンとケンタのペアがノロに対する想いを語りあう。

「本当にこの星のアンドロイドは酒をたしなむのですか」

ペアのいないＲｖ２６が同じくペアのいないミトと五郎の気持ちを代表してマスターにたずねる。

「ああ、量はしれているが、この星のアンドロイドはたいがい酒を飲む」

ミトが割りこむ。

「ということは、当然食事はするんだろう？」

「まあ、多少はな」

「食べ物からエネルギーをまかなうのか？」

いつの間にかマスターの話に注目が集まる。マスターはグラスを磨きながら笑顔で応える。

「ご愛嬌程度の消化器官がアンドロイドに組み込まれています」
住職との話を打ち切ってリンメイがマスターに上目づかいでたずねる。
「なぜ、そんなものをアンドロイドの体内に？」
「さあ、言葉は悪いが多分いたずら半分でそうしたのでしょうな。しかし、そのためにアンドロイドも歯磨きをしなければならなくなった」
「歯磨きならワタシもしている」
Ｒｖ２６が白い歯をむきだすと、ホーリーがその歯に向かって軽く反論する。
「それは歯磨きじゃなくて『整備』じゃないのか」
「確かに、人間のようにブラシは使いません」
「それより、この星のアンドロイドには男と女の区別があるわ」
サーチが歯磨きどころじゃないと、ホーリーからリンメイの方に大きく首を振る。
「この星には同じ体型のアンドロイドはいないわ。大量生産されたように見えない」
リンメイもサーチに同調する。
「前線コロニーから盗んだアンドロイドをノロが改造したのかしら」
サーチがリンメイからホーリーに顔を戻す。ホーリーはサーチの視線が戻ってきたのに気付くことなくＲｖ２６に言葉を向ける。
「ここのアンドロイドは自分で改造する方法を知っているらしい」

「それなら、ワレワレもやります」
Ｒｖ２６が反応する。ホーリーは少し離れて座っているＲｖ２６に向かって顔を横に振る。
「ノロはアンドロイドの製造プログラムはもちろん、彼が造ったすべてのプログラムを、この星の人間とアンドロイドにオープンしたんだ。もちろん、その中には言語処理プログラムも含まれている」
「プログラムのソースコードのオープンのことですね」
Ｒｖ２６が相づちを打つ。その相づちにホーリーは心地よく言葉を返す。
「そう、オープンソースという情報が共有されると、ものすごいスピードで物事が進んですごいパワーを生むということはよく知られた事実だ。アンドロイドもノロのオープンソースを共有して自らプログラムを作成し、身体を改造したらしい」
ホーリーの優等生のような説明が居酒屋に響く。
「アンドロイドは自主的に男か女かを選択して自分の身体を改造したの？」
サーチが疑うように質問するとすぐさまホーリーが答える。
「改造自体は驚くに値しない。それよりも、なぜアンドロイドが人間のように男と女という性別を欲しがったのか、サーチが驚くのも無理はない」
「ありがとう。ずばり私が聞きたいことを当ててくれて」
サーチがうれしそうにホーリーに肩を寄せる。しかし、すぐに背筋を伸ばして言葉を続ける。

「でも、人間は生まれるとき女として生まれるか、男として生まれるかは選択できないわ」
「それはアンドロイドも同じだ。製造されてから改造しているんだ。人間だって途中で男から女に、女から男になる手術を受ける場合があるだろ」
「違うわ」
「何が？」
「アンドロイドには元々性別がないのよ」
サーチはそう言ってから、ホーリーの肩越しに少し離れたＲｖ２６に声をかける。
「Ｒｖ２６は男？女？」
「女には見えないな」
ホーリーが笑いながらＲｖ２６を見つめる。ふしぎなことにＲｖ２６の表情が急変する。
「そんなことは考えたこともありません」
「Ｒｖ２６はどちらになりたい？」
返答に苦しんでいるように見えるＲｖ２６がみんなの視線を集める。
「回答不能です」
大きな笑い声が居酒屋にあふれるとＲｖ２６ひとりが困惑してまわりを見渡す。その視線がミリンに達したとき、ミリンが悲しそうな声を出す。
「なぜノロは死んだの」

「フォルダーは事故死ではないかと言っていた」
「ノロとやらに一度会ってみたかったのう」
若い住職の語調は昔の住職のままだ。慣れとは恐ろしいもので若い住職のしゃべり方に違和感を持つ者はいない。リンメイと住職は輝くような若さを身につけている。
そのとき、急にミトが場違いの「ハイ」という短い声をあげて立ちあがる。
〔ミト？ミトなの？〕
キャミからの無言通信がミトの頭をつらぬく。
〔ミトです〕
〔気が遠くなりそうなぐらい、ずいぶん呼び続けたわ〕
ミトが喜びと不安をかきまぜたような表情をしながら応じる。
〔今、どこにいるのですか〕
〔時空間移動船にいます〕
〔時空間移動船？どうしたのですか〕
ミトはなんとか冷静さを確保する。
〔アンドロイドが反乱を起こしました。地球を追い出されて宇宙を漂流しています〕
すぐにミトの冷静さが吹っとんでしまう。
〔なんだって！〕

〔人間とアンドロイドが全面戦争に突入しました〕
〔まさか！〕
〔ミトはどこにいるのですか〕
キャミの乱れぬ無言通信が再びミトに冷静さを与える。
〔ノロの惑星にいます〕
〔ノロの惑星？〕
〔そうです。宇宙海賊のアジトですが、その星の責任者に上陸できるように頼んでみます〕
〔私たちは一千万人近くいるのよ〕
〔一千万人もですか……しばらくお待ちください〕
ミトがキャミに丁重な無言通信を送ると、ホーリーたちに無言通信の内容を手短に伝える。驚きの声が次々とあがるのを無視してミトはフォルダーに相談するために居酒屋を出る。もちろん、その間もキャミと無言通信が途絶えることはない。
「マスター、悪いが急用だ」
「なあに、勘定のことは気にしなさんな」
マスターが気配りをホーリーに手渡す。
ホーリーもミトのあとを追って居酒屋を出る。すると雪崩を打ったように全員がマスターに頭を下げて居酒屋を出る。そしてミトとホーリーのあとを追いかける。

＊＊＊

造船所の所長室にフォルダーの声が響く。
「だめだ！この星の時空間座標は教えられない。上陸させるにしたって防疫検査が必要だ」
無制限に人間を受けいれると、ノロの星に存在しないウイルスや細菌がまん延するとも限らない。そうなればこの惑星の生態系がくずれる可能性がある。
「一刻を争う。時空間移動船の水や食料が底をついている」
「水はなんとかする。それより移住可能な完成コロニーに誘導すべきだ」
「キャミのことだ。できるのなら、とっくにしているはずだ」
ミトは今にもフォルダーにつかみかかりそうなぐらい興奮する。
「完成コロニーではなく、放置された前線コロニーではだめなのか」
横からホーリーが妥協案を提供する。
「前線コロニーはアンドロイドの星だ。殺されに行くようなもんだ。それに前線コロニーには水はあるとしても食料はない」
ミトがホーリーの提案を強く否定する。ホーリーは仕方なくミトをなだめる。
「落ち着くんだ。とにかく冷静になって考えよう」
「そんな時間はない。キャミの報告によると時空間移動船自体、いつ航行不能になるかもわからないほど切迫しているらしい」

ミトは浮き足だつだけでなんともしがたい自分に腹を立てる。
「Ｒｖ２６」
住職がＲｖ２６の前に立つ。
「アンドロイドを説得できないものかのう」
リンメイも住職と並んでＲｖ２６の前に進みでるが、Ｒｖ２６の返事は素っ気ない。
「今までのデータだけでは対処方法を構築できません」
「お願い。人間が生存できる完成コロニーをとりあえず、ひとつだけでいいから譲ってもらえるようにアンドロイドに頼めないかしら」
「わかりました。時空間移動装置を一基貸してください」
「どうする？」
ホーリーがフォルダーとミトから離れてＲｖ２６に近づく。
「地球に行って、アンドロイドの最高責任者と話をします」
「それなら、俺も行く」
「ワタシ、ひとりで行きます。人間が行けば殺されるかもしれません」
サーチがホーリーの腕をつかむ。
「そうよ。もう人間に従順なアンドロイドじゃないわ」
その会話を聞いていたミトがフォルダーに土下座する。

「私にも時空間移動装置を一基、貸してください」
「どうするんだ？」
「時空間移動船の状況を確かめに行きます」
「だめだ」
フォルダーはにべもなく拒否する。
「Ｒｖ２６に時空間移動装置を一基用意してやれ。ただし、地球に着いてＲｖ２６が降りたら自爆するようにセットしろ」
フォルダーが部下に命令する。
「なぜ、ミトにはだめなんだ」
ホーリーがフォルダーに詰めよる。
「Ｒｖ２６を信用して、なぜミトを信用しないの」
サーチもホーリーといっしょになってフォルダーをにらむ。
「時空間移動装置が時空間移動船に空間移動すれば、時空間移動装置の移動履歴でこの星の時空間座標がもれてしまう。ミトがもらさなくても、誰かが分析するだろう。それに時空間移動船内で時空間移動装置を自爆させるわけにはいかんだろう」
ホーリーはうなずくが、ミトの方に振り向いて背中でフォルダーに訴える。
「ミト、履歴がもれないように対処すると約束してくれ」

ミトは床に座ったまま、大きく首をたてに振る。
「もれないように履歴を完全に消す。約束する」
フォルダーが首を横に振ってミトに告げる。
「履歴を削除したところで、削除データを丹念に解析すれば履歴データは復元される。ミト、それにホーリーも少し冷静になれ」
ホーリーはフォルダーの言うとおりだと思うが、何かほかに手立てがないか考えこむ。
フォルダーがミトにくるりと背を向けると少し首を傾ける。
「俺にはこの星を守る責任がある。それに人間はアンドロイドに反乱されるほどの大きな過ちを犯したようだ」
ホーリーが食い下がるようにフォルダーとミトの間に割りこむ。
「フォルダー、Ｒｖ２６の時空間移動装置にミトが同乗して、キャミのいる時空間移動船で途中下車するという方法はどうだ」
きびしい表情をしていたフォルダーの顔がパッと明るくなる。
「素晴らしいアイデアだ！」
フォルダーがフーッと息を出してホーリーの肩をたたく。
「俺だって、なんとかしてやりたい気持ちで一杯なんだ」
そしてイリに向かって笑顔のまま言葉を続ける。

「海賊業を続行する。完成コロニーを盗むぞ」
イリが背筋をぴーんと張る。
「人間が住めそうな完成コロニーを奪うのね」
「そうだ！準備にかかれ」
「わかったわ」
イリのよくとおる声が三六〇度広がる。ホーリーは何がなんだかわからないような表情をして、フォルダーに頭を下げてからたずねる。
「海賊船は修理中じゃないか」
「ブラックシャークはな」
「それじゃ、どうしようもないじゃないか」
フォルダーがニヤリと笑うとイリが応える。
「ホワイトシャークが出航準備にかかりました。あれ？」
イリがどこからか報告を受ける。
「ホワイトシャーク？」
「ブラックシャークの兄弟船だ」
フォルダーがホーリーに返事をしながらイリに言葉を催促する。
「イリ、どうした？」

「中央コンピュータの入れ替えに少し時間がかかるようです」
イリの声のトーンが落ちる。
「ブラックシャークとホワイトシャークをケーブルでつなげばすぐ済むじゃないか」
「それが、休暇だと言って海水浴に行ったわ。どういうことなの？フォルダー」
イリが逆にフォルダーに詰めよる。同時にミト、ホーリー、サーチ、住職、リンメイ、ミリン、ケンタ、五郎が合唱する。
「海水浴？！」
押しよせる疑問を無視してフォルダーがつぶやく。
「アイツ、確か金槌（かなづち）じゃ？」
「浮き輪を持っていくとまで言って出かけたとＭＹ２８からの報告が入っているわ」
フォルダーとイリの会話は真剣そのものだ。
「すぐ、ホワイトシャークに戻って出航準備にかかれと伝えろ。何が海水浴だ」
フォルダーが怒りをイリにぶつける。
「肝心なときに役にたたん、さぼり中央コンピュータだ。罰として酒を隠しておけ」

＊＊＊

「頭がおかしくなる」
ミトとＲｖ２６を見送るために造船所横の建物にある時空間移動装置の格納室でホーリーと

サーチが話しあう。
「でも、あなたは中央コンピュータといっしょに酒を飲んだんでしょ」
サーチがホーリーにたずねる。
「ああ。でも、海水浴はないだろ」
時空間移動装置に積めるだけの水と食料が運びこまれる。
「それにしても、もう一隻、海賊船を持っているとはすごいわね」
サーチが積込作業を手伝うミリンとケンタを見つめながら、再びホーリーに言葉をかける。
「どうやらフォルダーの使い方が荒いから、ノロが予備の戦艦の建造をアンドロイドに指示していたらしい」
フォルダーとイリが現れる。
「ミト、スタンバイオーケーか？」
ミトはうなずくとフォルダーとイリにていねいに頭を下げて先に時空間移動装置に乗りこむ。
続いて乗りこもうとするＲｖ２６にホーリーが声をかける。
「Ｒｖ２６とは通信ができないから心配だ」
ホーリーがまるで人間に想いを寄せるようにＲｖ２６を見つめる。人間同士なら無言通信が使えるがアンドロイドとはそうはいかない。
「心配してくれるのですか」

Ｒｖ２６がホーリーの手を握る。
「もちろんだ。戦友じゃないか」
ホーリーもＲｖ２６も前線第四コロニーでの巨大コンピュータとの激戦を思い出す。
「今度はスパイの任務ですね」
「Ｒｖ２６はだますのがうまいからな」
「からかわないでください」
Ｒｖ２６が時空間移動装置に乗りこむと操縦席に座る。そしてドアが閉まって回転が始まる。
軽い音がしたとたん、ミトとＲｖ２６が乗った黒い時空間移動装置が消える。

＊＊＊

二百隻もの時空間移動船の船団のど真ん中に黒い時空間移動装置が現れる。すぐさまミトがキャミに無言通信を送る。
〔大統領、かなりの数ですね〕
〔ミト！来てくれたのですね〕
ほとんどの時空間移動船の外壁にレーザー砲で攻撃を受けた痕跡が残っている。
〔何隻いるのですか？〕
〔脱出するのが精一杯で、人数はもちろん船数も把握できていません。一千万人もいないかもしれません〕

〔識別信号を送信してください。時空間移動装置格納室に空間移動します〕
〔わかりました〕
〔キャミ〕
ミトが初めて私的な感情をこめて無言通信を送る。
〔ノロの惑星に上陸することはできない〕
〔えっ！私はすでに希望を与えてしまったわ〕
〔あまりにも急なことゆえ、受けいれは拒否された〕
〔無理は承知しているわ。でも私たちの時空間移動船はもう空間移動できるかどうか……〕
〔なぜ？〕
〔アンドロイドから時空間移動船を奪うだけでも大変だったし、時空間移動船の中央コンピュータの回路を切って手動で操船しなければならなかったの。おまけにアンドロイドの宇宙戦艦に追跡されてかなりの数の時空間移動船が破壊されたわ〕
〔キャミ、これからも困難が待っている。しかし、絶望的ではない。気を確かに持って〕
〔ミト、私、もう六十歳を超えているのよ。なり手がいないから大統領の地位にいるけれど、もう求心力はないわ〕
〔報告する機会がなかった。ほったらかしにしていたわけではない。こちらではわずか二、三日の時間なのに地球では十年以上もたっているのに気が付いたのは、つい昨日のこと〕

〔ミト、そんなことはどうでもいいし、あなたがきびしい状況で困難に立ち向かっているとずーっと思い続けていました。だから、私は今まで耐えられたのです〕

ミトはキャミのたぐいまれな愛情に感動する。やっと数ある時空間移動船の一隻から識別信号がミトに届く。何ごともすべて手動で行われているらしく識別信号を送信するのにかなりの時間がかかった。そのことがキャミとミトに貴重な時間を与えた。

＊＊＊

「よし、すぐに空間移動だ」

わずかな水と食料を投げだすと、ミトが真っ黒な時空間移動装置のドアを閉めて叫ぶ。Ｒｖ２６が素早くレバーを引くと時空間移動装置が回転する。ミトを出迎えた地球連邦軍の司令官カーン・ツーが驚いて腰のレーザー銃を抜く。

「なんの真似だ！」

ミトがカーン・ツーに体当たりしてはがいじめにする。そのとき時空間移動装置が格納室に鈍い音を残して消える。

「中にいたのはアンドロイドだ。そうだろ？ミト」

時空間移動装置が消えたあたりを見つめながらミトがカーン・ツーから離れる。自由になったカーン・ツーがすぐさまレーザー銃をミトに突きつける。

「司令官！やめなさい」

格納室に現れたキャミの声が響く。ミトが老けたキャミの姿を見て驚く。カーン・ツーはしぶしぶ銃をしまうが今度はキャミにくってかかる。

「あの時空間移動装置にミトがやって来た星の時空間座標のデータが記録されていたのに」

「その星には上陸できません」

キャミが弱々しく応える。

「なぜだ？なぜ上陸できないのだ」

「生態系に影響を与えるかもしれないのだ。しかも一千万人もの人間を防疫検査できる施設もない」

ミトがキャミの代わりに答える。

「宇宙海賊のアジトなんか、どうなってもいい。こちらは瀕死状態だ。人類存亡の危機に直面しているのがわからないのか」

カーン・ツーが十数年前に司令官だったミトを拘束するよう部下に命令する。

「やめなさい」

「大統領！もとはといえばあなたの失政が招いた結果です。私は何度もアンドロイドの不穏な動きに対して警告したのに、大統領はなんら手を打たなかった」

「アンドロイドに罪はありません。あまりにも人間がアンドロイドに対して横暴なことをしたからです」

キャミはいったん言葉を切って激しく首を横に振ってから言葉を続けようとするが、カーン・ツーの冷たい発言を許してしまう。
「人間がこれほどまでに困っているのに、大統領はまだアンドロイドの肩を持つのですか」
「今ここで議論をしても何も始まりません。司令官、とにかくミトを解放しなさい」
「ミトを人質にして海賊と交渉します」
「そんな手段で交渉するのはやめなさい」
「あとがない」
兵士に両腕を取られて身動きできないミトがカーン・ツーをにらむ。
「どんな手段を取ったとしても解決にはならない。今は耐えるだけです」
キャミは弱い立場を挽回するほどの余力が残っていないことを自覚しているが、なんとかふんばろうとする。
「もう、耐える余地はない」
「ほかの方法を考えるべきです」
カーン・ツーはキャミに臆することなく簡単に命令を下す。
「大統領も拘束しろ」
カーン・ツーはすでに部下を掌握しているらしく、兵士がキャミに近づく。
「司令官！気でも狂ったの」

キャミは兵士に両脇を固められて動けない。
「ミト、大統領、いや、妻であるキャミの命を救いたければ宇宙海賊と交渉しろ。直接でなくてもいい。宇宙海賊の星にホーリーや仲間がいるらしいが、そいつらに交渉させて上陸を実現させろ」
「なぜ、ホーリーのことを知っているんだ」
ミトが叫び声をあげるが、カーン・ツーは無視してミトに迫る。
「宇宙海賊と交渉するのか、しないのか」
キャミが割りこむ。
「待って。宇宙海賊は戦闘のプロです。宇宙海賊に攻撃されたら時空間移動船などひとたまりもありません。人質を取ったところで彼らを怒らせるのが関の山でしょう。ここはなんとか切り抜けるために知恵を絞るしかないわ」
「知恵を絞った結果だ。キャミを監禁してミトを艦橋に連行しろ！」
すでに手錠をかけられたミトが抵抗しようとするが、どうしようもない。
「キャミ」
「ミト」
名前を呼びあう声がむなしく格納室に響く。

第五十五章　ホワイトシャーク

第五十六章　堕落

【時】永久０２８８年
【空】大統領府
【人】瞬示　真美　一太郎　花子　四貫目　お松　Ｒｖ２６

＊＊＊

瞬示と真美が火炎土器からひねり出される。転びそうになるが、なんとか床に着地する。
【ここは？】
【見覚えがあるわ】
【あの棚！】
瞬示が赤く輝く火炎土器を見つけて叫ぶ。リンメイが作ったアクリルの台座の上に置かれた火炎土器の上部の模様がまさしく燃えるように赤く輝いている。しかし、その輝きは長続きせず徐々に弱くなって消える。
【ぼくらはこの火炎土器でここに移動してきたようだ】
真美が強くうなずくと腕時計で永久の年号を確認する。
【間違いない。ここは永久の世界のリンメイの研究室だわ】
【でも、ホコリがたまっている。リンメイはここを出てどこへ行ったんだ？】
外が赤く染まって揺れているのに気付いた真美が窓を指さす。

【火事かしら】

クモの巣を払いながら窓際に近づく。窓ガラスは曇っていて外の様子がよく見えない。瞬示が取っ手に手をかけるが、錆ついた窓は開かない。瞬示の指先がピンク色に輝くと窓が開く。

「あっ！」

大統領府が炎に包まれている。

「あそこにはキャミがいるはずだわ」

ふたりは大統領の執務室に瞬間移動する。

「わあ！」

部屋中が炎に包まれている。ふたりはすぐさま、大統領府の庭に瞬間移動して水が出ていない噴水の裏側に身を隠す。どこからか人間の叫ぶ声が聞こえる。

「奴隷のクセに人間様に刃向かうとは生意気だ。死ね！」

複数の男がアンドロイドにレーザー銃を発射する。アンドロイドは素早く物影に隠れながら応戦する。

【人間とアンドロイドが戦っている！】

ふたりは海岸に係留された何隻かの宇宙船を見つける。

【時空間移動船だわ】

【あっ、上昇するぞ】

ほとんどの人間がアンドロイドとの戦闘を忘れてぼう然と上空を見つめる。
「なんてことだ！ここでアンドロイドの攻撃を食い止めているのに」
「置きざりにされた！」
人間たちの隙(すき)をアンドロイドは見逃さない。素早く近づいてレーザー銃を発射する。悲鳴が聞こえたあとひとりのアンドロイドが誰かに連絡を取る。
「こちらは大統領府襲撃隊。人間を乗せた十隻ほどの時空間移動船が空間移動した。宇宙戦艦の出動を要請する」
【どうなっているの】
「誰だ！そこにいるのは」
鋭い声がすると瞬示と真美が頭を引っこめる。
【見つかった】
【どこへ隠れる？】
瞬示がうろたえてまわりを見渡す。
【！】
真美の口が誰かに封じられる。
「四貫目！」
「静かに」

第五十六章　堕落

四貫目とお松が瞬示と真美の手を引く。
「こっちだ！取り囲め！」
アンドロイドの声がする。四貫目は瞬示の手を離すと腰を沈めて地面から出ている取っ手を力いっぱい引き上げる。扉が「ギイー」という鈍い音をたてて開く。
「非常時司令部への地下通路です」
「わかった。真美、お松といっしょに先に行ってくれ」
「瞬示殿は？」
「この扉を隠してから、中へ瞬間移動する」
「瞬ちゃん！あとでこの中の通路のイメージを送るわ」
瞬示は扉を閉めると付近のがれきを浮きあがらせて扉を隠すように移動させる。がれきの重なりあう音がアンドロイドに届く。
「いたぞ！こっちだ」
アンドロイドのレーザー銃が瞬示をとらえる。同時に瞬示の姿が消える。
地下通路で待機していた四貫目が携帯ライトで瞬示の顔を照らす。
「ご無事で。こちらへ」
迷路のような暗い通路を四貫目は迷わずに進む。やがて立ち止まるとライトを目の前のドアの四隅に順番に向ける。

第五十六章　堕落

〔四貫目だ〕

四貫目の無言通信が向こう側にいる者に伝わると鋼鉄製のドアが音をたてて横にすべる。

「閉めろ」

中は真っ暗だ。しかし、瞬示には目の前に真美とお松が立っているのがわかる。

「光はもれていなかったか」

「もれていません」

暗闇の中でお松の声がする。

「補助灯を点けろ」

弱々しい光が意外にも広い部屋に行きわたる。

「一太郎！」

「瞬示」

「花子！」

「真美」

面影もないくらいに老けた一太郎と花子が中央にポツンと置いてあるテーブルのそばに立っている。

「これはひどい」

テーブルの上にはひとりの忍者が横たわっている。重傷のようだ。

第五十六章　堕落

「あとの忍者はどうした」
「半蔵とアケミは死んだ」
　そのとき、真美が大きな声を出す。
「瞬ちゃん！」
「声がでかい！」
　瞬示が真美をたしなめるが、真美は構わず腕を差しだす。
「ニューロコンピュータとの戦いから十年以上もたっている。ぜんぜん気が付かなかったわ」
「えっ！」
　真美の腕時計を見て瞬示が真美より大きな声をあげてしまう。
「どおりで一太郎が老けこんでいるはずだ」
「そうだ。最後に会ってから十年以上はたっている」
　一太郎がせきこみながらうなずく。
「でも、忍者は歳をとっていないわ」
「我らは、生命永遠保持機能を失っていない」
「ケガをしている忍者は才蔵か」
「そうだ。回復剤を飲ませたが、果たして……」
　四貫目がうつむくと瞬示と真美が才蔵から目を背ける。

「何が起こったんだ」
ふたりが四貫目を見つめると一太郎が近づいてくる。
「僕から説明しよう」

＊＊＊

一太郎は十数年前を目途に記憶をさかのぼってゆっくりと話を始める。その話の概要はこうだ。
ノイズ事件がおさまってから、人類に平和な時代が訪れたかに見えた。
巨大コンピュータを追いかけてミトが十隻の宇宙戦艦で鍵穴星に向かってしばらくすると通信が途絶えてしまった。キャミだけがミトやホーリーたちのことを片時も忘れずに思いやっていたが、世間では時間がたつにつれて誰もが巨大コンピュータやミトたちのことを忘れてしまう。
生命永遠保持手術の効果を失った人間に再び本来の生殖機能がよみがえった。出生率は低かったが、子供を生んで育てることに喜びを感じるような状況が芽生える。
しかし、長らく子供を育てたことがなかったので育児に手をやいて子育てを放棄する親が現れる。また、生命永遠保持手術の効果を失って手術を受けた年齢に戻ったので中年や老人の人口が急増して、数少ない若者が老人の生活の面倒を見ることが困難となった。それどころか拒否した。

第五十六章　堕落

一方、無言通信システムのお陰で人類の意思疎通が深まり人種間や宗教間の争いはなくなるが、逆に個人レベルでは摩擦が生じた。この現象は西暦の世界とまったく同じだった。

年甲斐もなく老人同士が殺し合ったり、親が抵抗する力のない幼児を殺したり、反対に若者が抵抗する力のない老人を殺したりと、目をおおいたくなるような殺人事件が日常化した。弱者へのいたわりはなく、単純なねたみで短絡的に殺すことが、伝染病のように広がった。元々男と女の戦争と巨大土偶の大虐殺事件で人口が激減したので、子供の人口が増えたにもかかわらず、個人間の争いで人口は減ることはあっても増えることはなかった。

他方、無言通信システムの言語処理プログラムにより、アンドロイドの会話能力が非常に向上して人類の良きしもべとして様々なサービスが提供された。しかし、人間の欲は留まることなく、あらゆることをアンドロイドにさせようとした。そのうちアンドロイドに意思が芽生えはじめた。

純粋な意思を持ったアンドロイドにとって人間の行動は理解しがたいもので、特にモラルの低下には耐えがたかった。それは純粋な気持ちを持つ子供が矛盾した大人の世界を受けいれがたく批判を繰り返すのに似ていた。しかし、人間はそのアンドロイドの感情を無視して奴隷のように扱った。

大統領のキャミは手をこまねいていたわけではなかった。数々の施策を打ち立てるが後手に回ることが多かった。まるでキャミが作ったルールは破られるためにあるようなものだった。

アンドロイドは多数対多数の無線通信で意思を統一すると、地球連邦政府にアンドロイドの人権の確保を訴えた。キャミはアンドロイドに同情するが、すでに人間はアンドロイドがいなければ自ら生きてはいけないほど堕落していた。そのため、アンドロイドに人権を認めようとしないばかりか、不穏な行動をするアンドロイドを解体する法律の制定まで要求した。もちろん、その解体作業はアンドロイドにさせるという極めて過酷な法案だった。事実上アンドロイドに対する奴隷宣言に等しかった。

一対一の無言通信しか持たない人間はやがて統一的な意志を持ったアンドロイドに脅威を感じるようになって軍隊を組織しようとするが、もはや武器を手にするだけの気力も失しなっていた。それでも地球連邦政府の治安部隊はそれなりの弾圧を実行する。それはキャミの意向を無視したもので、アンドロイドに対する迫害だった。

そのうち、子供を殺したある親が、あるいは親を殺したある子供が、召使いとして同居していたアンドロイドにその罪を押しつける事件がひんぱんに起こるようになった。しかも治安部隊がことごとくアンドロイドを逮捕したため、ついに人間に対する憎しみの感情が生まれた。

日用品の生産や物流に従事するアンドロイドの活動が停止すれば、人間は生きていくことができないのに、そしてこのことはキャミが何度も警告していたにもかかわらず、人間はそんな現実を無視してアンドロイドの反発を抑えこむ。

いつしか護身用にレーザー銃を携帯する人間がためらいもなくアンドロイドを射殺する事件

がたびたび起こるようになった。これに対してアンドロイドは単なる蜂起に留まらず、ついに反乱を起こした。そして憎しみの感情が増幅されて、逆に人間をためらいもなく殺すようになった。

人間は地球から脱出するしか身を守る手段がなくなって、あわてて時空間移動船で脱出しようとする。しかし、時空間移動船自体、中央コンピュータとアンドロイドの協力がなければ動かないことが、情けないことにそういう事態になって初めて気が付く有様だった。キャミの機転でなんとか手動で時空間移動船を操縦して大半の人間が地球を脱出したが、憎しみの塊となったアンドロイドの宇宙戦艦が時空間移動船を追跡するために地球を出発した。

＊＊＊

「大統領は地球に残ってアンドロイドと話合いをすると乗船を拒否しましたが、最後の最後に大統領府が攻撃されたとき、我らがなんとか大統領を時空間移動船にお連れしました」

「そのときに、犠牲者が出たのね」

「それは我らが未熟うえのため」

「なぜ、いっしょに時空間移動船に乗らなかったんだ」

四貫目は返事をしない。

「それは、アンドロイドの方が正しいと判断したからだ」

一太郎が四貫目に代わって答える。

「アンドロイドに感情が芽生えたといっても、すぐに冷静さを取りもどすはずだ。そうなれば、話合いはできる。四貫目はそれを見届けてキャミに報告しようと地球に残ったのだ」
「なぜ花子と一太郎もここにいるの？時空間移動船に乗り遅れたの？」
真美が美しく老けた花子を見つめる。
「無言通信の心臓部分の言語処理プログラムが人間とアンドロイドにどんな影響を与えたのか、見届けたかったの」
花子が一太郎を代弁するように話すが、その一太郎は花子とは反対に腹だたちそうに叫ぶ。
「無言通信がこの世界の人間に与えた結果など見たくもない」
「その気持ち、よくわかる」
瞬示がうなだれると一太郎の言葉の調子が急変する。
「それに比べてアンドロイドは人間よりはるかにまともな意思を持ちはじめた。素晴らしいことだ」
一太郎はいったん言葉を切って呼吸を整えると瞬示にたずねる。
「あれから瞬示はどこで何をしていたんだ？ホーリーや住職はどうしている？」
「みんな生きているはずだ」
「最後に会ったときはみんなクタクタになっていたけれど元気だったわ。住職とリンメイも生命永遠保持手術を受けて信じられないぐらいに若返ったの。住職の若い姿にはビックリした

わ」

真美がこの部屋で初めての笑顔を造る。

「確かに想像できないな」

一太郎も真美のくったくのない笑顔に引きつられてシワを丸める。色のない部屋に和やかな風が流れる。そのとき、頭上でくぐもるような爆発音と振動がしてその和やかな雰囲気をかき消す。再び緊張感が走って全員が身構える。

「この部屋の位置はわかっています。すぐに戻りますから、ここにいてください」

瞬示が真美に目配せすると、ふたりは姿を消す。

＊＊＊

「時空間移動装置が！」

アンドロイドの目の前に現れた時空間移動装置が轟音を残して粉々になる。

「どこから来た？」

「誰だ？」

爆発した時空間移動装置の残骸がまわりに飛び散って視界はよくないが、うずくまった大男の姿が見える。

【あれは……人間じゃない】

瞬示と真美は地上数十メートルのところから爆発地点を見下ろす。そこには丸くなった身体

を起こして立ちあがるアンドロイドがいる。今や、人間とほぼ同じ体格のアンドロイドに比べて桁違いに大柄なアンドロイドだ。

「私はアンドロイド。通称識別記号Ｒｖ２６。正式形式名ＲｖⅡ２６スラッシュＮ２０……」

【Ｒｖ２６だわ】

瞬示が降下しようとする真美の両脇を抱えて制止する。

【様子を見るんだ】

ふたりはリンメイの研究室に瞬間移動する。

【ここからだと一目で様子がよくわかる】

ひとりのアンドロイドがＲｖ２６に近づく。

「Ｒｖ２６？」

Ｒｖ２６を取り囲んだアンドロイドが同胞だと気付いて構えていたレーザー銃を地面に向ける。

「十年ほど前……」

ひとりのアンドロイドの言いかけた言葉が途切れる。アンドロイドの耳が赤く輝くと無線でお互いの情報をすぐに共有する。

「ワタシのことを知っているのか」

Ｒｖ２６が感慨深げにまわりを見渡す。

「もちろんです。Ｒｖ２６、あなたはワレワレ、アンドロイドの誇りです」
「よくもご無事で」
「現状を詳しく説明して欲しい」
Ｒｖ２６はもちろんのこと、ここに居合わせるすべてのアンドロイドの耳が忙しく赤く点滅を繰り返す。すぐに情報交換が終了する。ここにいるアンドロイドに比べればすでに時代遅れになったＲｖ２６がしばらく沈黙する。演算能力が格段に劣るのだ。
「ワタシは今話したとおり旧式だ。申し訳ないがデータの処理に少し時間が欲しい」
しかし、次の言葉を発するまでに長い時間は不要だった。
「とりあえず、宇宙戦艦を地球に戻せ。人間が地球を捨ててまで逃げているのなら追跡する必要はない。今のワタシの考えは以上だ」
「わかりました」
旧式のＲｖ２６にアンドロイドは警戒することもなくむしろ敬意を示す。
――人間はなぜ自滅する道を選択したのか
Ｒｖ２６には想像できない。それはミトやホーリーや住職たちを通じて得た信念があるからだ。そして瞬示と真美の存在とその活躍を思い出してＲｖ２６は天を仰ぐと文字通りそのまま仰天する。それは空に向かった視線の先の建物の窓に瞬示と真美を見つけたからだ。ほかのアンドロイドは気付いていない。Ｒｖ２６は炎上する大統領府に目もくれず、ふたりの姿が見え

た大統領府内の建物を確認する。すぐＲｖ２６はそれがリンメイの研究室であることに気が付く。

「急なことなので、データを整理したい。なにぶん、ワタシは時代遅れのアンドロイドだ。あの窓が開いている部屋を借りてもいいか」

アンドロイドの誰もがＲｖ２６に異議を申し立てることはない。

「わかりました」

「ワタシを信用してくれるのか。アンドロイドに休養は必要ないが、とりあえずあの部屋で休むことにする」

「ご自由にしてください。落ち着いたら、詳細な経験データをコピーさせてください」

「もちろんだ」

＊＊＊

Ｒｖ２６がリンメイの研究室に入ると瞬示と真美が笑顔で迎える。

「宇宙の地平線を超えたり、戻ったりしているうちに、十年もの歳月が流れたようです」

「素晴らしい表現だわ」

瞬示が真美の感傷的な言葉を無視してＲｖ２６に現状を報告する。

「地下司令部に一太郎や忍者がいるんだ」

「そこは危険です」

「どうすればいいの？Ｒｖ２６」
「ホーリーたちがいる『ノロの惑星』へみんなを連れていけませんか」
Ｒｖ２６が真美に提案すると瞬示が反応する。
「ノロの惑星？」
「フォルダー、いいえ宇宙海賊のアジトです」
「フォルダーの……その星の位置は？」
「それはワタシが乗ってきた時空間移動装置が自爆したのでわかりません。それにある事情があってワタシ自身のメモリーにも記録はありません」
瞬示と真美が落胆する。
「ぼくらの緑の時間島では場所がわからなければ移動できない」
「どうしてですか」
「時間島の操縦者、つまりわたしたちが方向音痴なんです。イメージでいいからデータを持っていませんか」
真美が少しおどけて答える。
「イメージ？」
Ｒｖ２６が当惑する。そのとき、部屋の隅が少し赤味を帯びる。瞬示と真美が棚にある火炎土器上部の赤いゆらめきに気付く。ふたりの身体が緑に輝くとその一部が細い線となって火炎

土器に吸いこまれる。
「これは、鍵穴星で見たことがある土器ですね」
瞬示と真美は返事をせずに火炎土器を見つめる。火炎土器からも緑の輝きがふたりに向かう。
「鮮明なイメージがつかめた！」
「地球のような美しい惑星だわ。ノロの惑星に間違いないわ」
ふたりが顔を見合わすと火炎土器は元のなんの変哲もない土器に戻る。
「すぐに一太郎たちをその惑星に移動させよう」
ふたりの身体の緑の輝きが強くなる。
「待ってください！」
Ｒｖ２６の大きな声にふたりがあわてて輝きを弱める。
「大統領と司令官、いえ、キャミとミトに大変なことが起こっています」
「えっ！」
輝きが完全に消える。Ｒｖ２６がほっとしたような表情を浮かべて、キャミ、ミト、カーン・ツーのこと、そしてフォルダーのことを詳しく説明する。瞬示が少し考えてからＲｖ２６に言葉を返す。
「わかった。なんとかする」
「Ｒｖ２６もいっしょに行きましょう」

Ｒｖ２６が首を横に振って手を広げる。
「任務があります。まず、地球の現状を調査します」
「任務？」
瞬示が驚いてＲｖ２６を見つめる。
「人間が生存できる完成コロニーをひとつでもいいから、譲ってもらえるようにアンドロイドを説得しなければならないのです」
グレーのノイズしか見えないはずだとわかっていながら、瞬示と真美はＲｖ２６の意識の中をのぞきこむ。しかし、結果はまったく違っていた。まるで秋の空のようにＲｖ２６の意識はさわやかなブルーに見える。ふたりはそのままＲｖ２６の意識の奥を盗み見る。
【Ｒｖ２６の任務がよくわかった】
【大変な任務だわ】
瞬示は意識をのぞいたことを告げることなくたずねる。
「人間からひどい仕打ちを受けたアンドロイドが納得するだろうか」
「おふたりから教わったとおりにします。つまり『やってみないとわからない』です」
ふたりは苦笑いする。
「今の人間にそんな価値があるのかしら。もし、アンドロイドがそんな人間を許すなら、アンドロイドの方がずーっと人間的だわ」

「今の真美さんの言葉を忘れないよう、やれるだけのことを実行します」
瞬示と真美は大きな感動を共有すると真美の身体が緑色に輝きだす。
「ワタシは場合によっては人間に理不尽な行動を取るかもしれません。そのときはそうせざるを得ないときだと思ってください。でもワタシはなんとかこの事態を打開したい」
瞬示がＲｖ２６に大きくうなずくと真美に近づく。
「一太郎にこのことを早く報告しなければ」
「そうね！きっと喜ぶに違いないわ」
真美が強い相づちを打つと火炎土器を見つめながら瞬示に首を傾ける。
「火炎土器をこのままにしておくの」
「火炎土器は宇宙と宇宙をつなぐパイプだと巨大ニューロコンピュータが言っていた。そんなものを持って歩くわけにはいかない」
瞬示の身体も緑色に輝きだす。次の瞬間、リンメイの研究室にはＲｖ２６ひとりがポツンと立っている。火炎土器の口のあたりが一瞬赤く輝いたのをＲｖ２６は見逃さなかった。そして火炎土器に近づいて首を傾げる。

第五十七章　救出

第五十七章　救出

【時】永久０２８８年
【空】ホワイトシャーク　ノロの惑星
【人】瞬示　真美　フォルダー　イリ　キャミ　ミト　ホーリー　サーチ　カーン・ツー
　　住職　リンメイ　一太郎　花子　四貫目　お松　ＭＹ２８　ＭＡ６０

＊＊＊

「徹底的に抗戦する」
完成コロニーのアンドロイドからの意外な回答にフォルダーはうなったまま黙ってしまう。
「これまでとは違うわ」
イリがフォルダーの違和感を素直に受け継ぐ。
「無傷で手に入れなければ意味がない」
フォルダーが腕を組んでイリの顔をぼんやり見つめる。
「それ以前に大きな問題があります」
中央コンピュータが鋭い声を出す。
「完成コロニーといっても、人間の居住に適した環境ではありません」
「なに！」
「すべての完成コロニーがずいぶん前に放棄されたことを覚えていますか」

「ああ」
「それから、誰もいない完成コロニーになったのですが、どうやらその後、人間の理不尽な圧政に我慢できなくなったアンドロイドが、時空間移動装置で密かに地球を脱出して自分たちの住みかにしたようです」
「アンドロイドなら時空間移動装置を拝借して脱出するぐらい朝飯前だろうな」
「アンドロイドが朝飯を食べるのかは疑問です」
「たとえ話だ。ノロも前線第十七コロニーの工場長だったころ色々なものを盗んでいた」
「彼らは、放棄された完成コロニーを人間が住めるように改造するのではなく、自分たちに適した環境に改造しました。アンドロイドには酸素は必要でないどころか、毒のようなものです」
「チューちゃんはアンドロイドに『おまえの家をよこせ』と言っても素直に渡すわけがないと言いたいのね」
イリは中央コンピュータのことをチューちゃんと呼んでいる。
「それに、人間を信用していません」
「人間が住めないコロニーを略奪しても意味がないな」
フォルダーは困惑しながら、今や地球を命からがら脱出した人間が住める完成コロニーが存在しないという重大な現実を受けいれる。仮に完成コロニーを無傷で手に入れたとしても、誰

が人間の居住に適するように改造するのか。今の人間にはそんなことはできないし、アンドロイドに改造させることもできない。

「確かに大問題です。人間が移住可能な星は、今のところノロの惑星しかありません」

「ノロの惑星に移住させるわけにはいかないわ」

イリがフォルダーの顔をのぞきこむ。

「当たり前だ！」

フォルダーがきっぱりと否定したのでイリは安心する。

「ノロの惑星はノロのものよ」

「イリの言うとおりです」

中央コンピュータの大きな声にイリもフォルダーも驚く。そしてノロの謎の死を思い出す。その雰囲気を感じとったのか、中央コンピュータはトーンを落として話題を変える。

「男と女が戦争をやめて仲良くなったと思ったら、今度は人間とアンドロイドとの間にあつれきが生じたようです」

イリは中央コンピュータの言葉に誘導されてノロのことを脳裏にしまいこむ。

「どうも、人間の方に問題があるわ」

「ワタシは、人間のわがままにアンドロイドが嫌気を覚えたのではないかと思います」

フォルダーも中央コンピュータの話に引きこまれる。

「具体的に言え」

「具体的に言っていいのですか？」

フォルダーが一瞬たじろぐ。地球では人間同士がいさかい殺人を繰り返しているというウワサを耳にしていた。他人ではなく親子や兄弟間での殺し合いが日常茶飯事のように起こっていることをイリも承知している。ふたりともすっかりノロの死の謎を忘れてしまう。

「言うまでもないことのようです」

中央コンピュータは目的を果たしたと思ったのか、言葉をおさめる。

「自ら神だと言っていた巨大コンピュータも警告していたな」

「人間とアンドロイドの戦いを止める方法はないのかしら」

「海賊には無理な話だ。人間とアンドロイドの戦いを止めるというよりは、まず人間同士を仲良くさせる方が先決だ」

「人間のサガね。愛情と憎しみがいつも同居しているわ」

フォルダーはノロが言っていた「アンドロイドに人間が亡ぼされるかもしれない」という言葉を心の中で繰り返すと一言だけ発する。

「離脱！」

ホワイトシャークは目の前の完成コロニーから船首をはるか彼方の宇宙に向ける。中央コンピュータがフーッとため息をもらすが、イリもフォルダーも気付かない。

＊＊＊

〔カーン・ツーが私にフォルダーを説得させてノロの惑星に上陸させようとしてます〕
フォルダーがミトの無言通信に自分の耳を疑う。
〔俺が拒否すれば？〕
〔妻……いえ大統領のキャミを殺すと。そして私を殺すでしょう〕
フォルダーは怒りをあらわにした無言通信を送る。
〔なんだと！〕
ミトがフォルダーの言葉を遮断する。
〔フォルダー、私もキャミも死ぬつもりでいます。構わず断っていただいて結構です。ただ、そのあとのことが心配なのです〕
ここで、ミトからの無言通信が突然切れる。
〔ミト！ミト！〕
フォルダーが幾度も無言通信で呼びかけるが返事はない。
「なんということだ」
イリが心配そうにフォルダーを見つめる。フォルダーは考える時間がないことを承知のうえで、この事件に積極的にかかわっていく決心をする。
「イリ、ノロの惑星で過去に殺人事件はあったか」

「あるはずないわ」
「そうすると、最低二百年以上も、殺したり、殺されたりしたことがない星なのか」
「田舎だもの。人口は一万人もいないわ。それに生命永遠保持機能を誰も失っていないわ」
「アンドロイドは十倍はいるな」
「ええ」
「人口のほかにノロの惑星と地球と決定的に異なることはないか」
中央コンピュータの大きな声がする。
「ノロの惑星では夢や希望があふれています」
この中央コンピュータの発言にイリが驚く。言われてみればそうだ。長い間、それこそ二百年以上生きてきたが、もちろん、その間悲しいことも数多くあったが、決してフォルダーやイリは夢や希望を捨てることなく、明るく前向きに生きてきた。自覚することはなかったが、今、中央コンピュータの声で目覚める。
「中央コンピュータの言うとおりだ。いいことを言うな」
フォルダーはノロの惑星では人間だけでなく、コンピュータもアンドロイドも同じように夢や希望を持っていることを再認識する。それはノロが残した遺産なのかもしれない。
「ノロはそういう星を造りたくて造ったのだ。そういう意味でノロは生きている！俺たちの心の中でアイツは生きている」

フォルダーがそう断言すると同時に決断する。
「ミトがいる時空間移動船の近くに空間移動しろ」
フォルダーはまだミトが生きていることに望みを託す。イリはフォルダーの言葉でノロのことを鮮明に思い出す。そしてノロが生きているかもしれないと思いはじめる。

＊＊＊

「俺は宇宙海賊のフォルダーだ。この船団の最高責任者は誰だ」
フォルダーが全通信回路を使って呼びかける。意外とすぐに返事が届く。
「要求を呑むと言うことか」
「俺の質問は、最高責任者の名前だ」
「地球連邦政府大統領のカーン・ツーだ」
「そうか。汚い手を使う最高責任者の名前はカーン・ツーというのだな」
中央コンピュータは、フォルダーとの通信でカーン・ツーの時空間移動船の空間座標を特定すると、そのデータをメイン浮遊透過スクリーンに映しだす。
再びカーン・ツーから居丈高（いたけだか）な通信が届く。
「先ほどの質問に答えろ」
フォルダーが砲撃手にメイン浮遊透過スクリーンのデータを目配せして大きな声をあげる。
「これが答えだ！」

ホワイトシャークの主砲が一本だけ火を噴く。カーン・ツーが乗船しているはずの、そしてミトやキャミも同乗している可能性が高い時空間移動船に向かってレーザー光線が進む。

「フォルダー！」

イリが叫ぶ。

「俺に任せておけ！」

とうとつな命令だったが、砲撃手は長年の経験からフォルダーのクセを知りつくしている。主砲から発射されたレーザー光線が時空間移動船の船尾に近づく。

「回避！」

通信回路が開かれたままのスピーカーからカーン・ツーの悲痛な声が流れる。しかし、ホワイトシャークのレーザー光線は突然現れた緑の壁に遮断されて四方八方に飛び散る。

【間に合った！】

瞬時と真美は強力なレーザー光線が完全に消滅したことを確認すると、いつの間にか習得した無言通信をフォルダーに送る。

｛フォルダー｝

｛誰だ！｝

｛瞬示です。ここは任せてください｝

ふたりはミトとキャミがいる場所を的確に把握して瞬間移動する。そこは暗くて狭い部屋で

キャミとミトは手錠をかけられたまま気絶している。

「キャミ！ミト！」

返事はない。瞬示と真美の身体から発せられた緑の輝きがキャミとミトを包む。すぐさま瞬示がフォルダーに無言通信を送る。

〔フォルダー〕

〔瞬示か？ミトは無事か！〕

フォルダーの反応に瞬示はほっとして無言通信を続ける。

〔無事です。ノロの惑星へキャミ、ミト、それに一太郎、花子、四貫目、お松を連れていきます〕

〔一太郎、花子、四貫目、お松？〕

聞きなれない名前にフォルダーはいったん無言通信を切るが、すぐさま気を取りなおして再開する。

〔わかった！ホーリーに連絡しておく〕

〔ノロの惑星にホーリーがいるのか〕

瞬示とフォルダーの無言通信を傍受していた真美がうれしそうな表情をする。そして一太郎たち四人がいる緑の時間島にキャミとミトを移動させてすぐさまノロの惑星に空間移動する。

＊＊＊

瞬示と真美がヤシの木が生えている砂浜にたどり着く。目の前には美しいエメラルド色の海が広がっている。ふたりの後方の薄い緑色のベールから一太郎、花子、四貫目、お松が砂浜に足を着ける。ふたりは空中に浮いたまま気絶しているキャミとミトに負担をかけないようにヤシの木の根元にゆっくりと移動させて寝かせる。

全員がキャミとミトのまわりに集まる。先に気を取りもどしたミトはキャミを心配そうに抱きおこしてほほを軽くたたく。

「ミト……」

「キャミ、大丈夫か」

キャミが気丈夫にも立ちあがろうとする。

「そのまま……」

ミトは柔らかい砂の上で正座するとキャミの頭を両ヒザにやさしく載せる。瞬示がみんなの気持ちが落ち着いたと見計らってこれまでのいきさつを説明しはじめる。

「また、ふたりに助けてもらったようね。瞬示、真美、ありがとう」

キャミが弱々しく瞬示と真美に礼を言い終わると大きな声をあげる。

「時空間移動船の状況は？」

「そこまで確認する余裕がありませんでした」

瞬示が申し訳なさそうにキャミを見つめる。

「時空間移動船の食料が底をついている……」
キャミがミトのヒザの上で横になったまま再び弱々しい声に戻す
「そんな状況なのに、こともあろうに人質を使ってフォルダーを脅迫するなんて」
真美がほほをぷくっとふくらます。瞬示が真美に同調して険しい表情を見せる。しかし、ミトはなぜか自分を人質にしたカーン・ツーをかばう。
「そこまで追いつめられているということだ。それにアンドロイドの宇宙戦艦にいつ攻撃されるかわからないという恐怖感もある」
瞬示がキャミにたずねる。
「カーン・ツーはあの将軍カーンの……」
「そう、あのカーンの隠し子よ。出生は不明ですが……でも息子だからという理由ではなく実力があると思って地球連邦軍の司令官に任命しました」
ミトのひざまくらから上体を起こすとキャミが一息ついてお松にたずねる。
「ほかの忍者は？」
四貫目がキャミの前に進みでる。
「我ら以外、全員死にました」
忍者はアンドロイドとの戦いで言語に絶する攻撃を受けたとキャミは声を出さずに四貫目とお松に涙を浮かべて頭を下げる。

やがてフォルダーの無言通信を受けたホーリーとサーチ、住職、リンメイがＭＹ２８の運転する大型エアカーで迎えにくる。

「リンメイ！」

キャミはエアカーから降りる若いリンメイに驚く。そしてリンメイといっしょに降りた袈裟(けさ)を着た丸坊主の青年をふしぎそうに見つめる。

「住職？住職なの？」

「そうじゃ」

住職が笑いながら返事するとキャミが大きな目を白黒させる。

「事情があって生命永遠保持手術を受けたのじゃ」

口調は住職そのものだ。

「瞬示、真美」

ホーリーがふたりに例の人なつこい笑顔で近づく。一太郎、花子、四貫目そしてお松もなつかしそうにホーリーとサーチを見つめる。そのとき突然、上空から腹に響くような重々しい音が聞こえてくる。

「ホワイトシャークだわ」

サーチがまぶしそうに空を見上げる。ホーリーがフォルダーに無言通信を送る。

〔今、主役がそろった〕

〔瞬示と真美の仕業なんだろう〕
〔そうだ〕
〔ノロの家で落ちあおう。先に行ってくれ〕
堂々としたホワイトシャークが速度を落としてホーリーたちの頭上を通過する。
「ブラックシャークが真っ白になっている」
瞬示と真美が空を見上げて驚く。
「あれはブラックシャークではない。ホワイトシャークだ。ブラックシャークは入院中だ」
ホワイトシャークが修理中のブラックシャークの横に船体をゆっくりと沈める。瞬示と真美は視線を造船所からホーリーに移す。そのホーリーがエアカーのドアを開ける。
「大統領、大変なことが起こったのですね」
サーチがキャミに寄りそうとホーリーのあとについてエアカーに案内する。
「もう、私は大統領ではありません。でも、みんな、無事で何よりだわ」
さすがにあの威厳のあったキャミも小さく見える。キャミとミトがエアカーに乗りこむとサーチは瞬示と真美に視線を移す。
「どこへ行っていたの」
サーチはふたりに返事を期待するのではなく、ごく自然に声をかける。
「どこにも行っていない。気が付いたらリンメイの研究室にいた」

「ほんの数十分前のことなの」
サーチはふたりの言葉にさほど驚くこともなく、エアカーに乗るようにうながす。
「何十年も、どこかで眠っていたのかなあ」
真美が瞬示の感想を上書きする。
「眠ってたっていう感じはないけど」
エアカーが砂じんを巻きあげて浮上する。
「とにかく無事でよかった」
ホーリーがＭＹ２８に指示する。
「ノロの家へ」
続けてミリンに無言通信を送る。
〔ミリン、ノロの家に集合だ〕
やがてオアシスのような緑に囲まれたこぢんまりとした住宅街が見えてくる。こんもりとした木々に囲まれたひときわ大きな建物が遠くからでもはっきりと見えてくる。
「あれがノロの家ですか」
ハンドルを少し右に切りながらＭＹ２８が瞬示に軽くうなずく。正面から別のエアカーが二台向かってくる。ちょうどノロの家の前で合流する。一台のエアカーからはミリン、ケンタ、五郎と運転手の小柄なアンドロイドが、もう一台のエアカーからはフォルダーとイリが降りる。

ＭＹ２８が小柄なアンドロイドを紹介する。

「妻のＭＡ６０です」

ＭＡ６０がにこやかに頭を下げる。全員がＭＹ２８とＭＡ６０を交互に穴が開くほど見つめる。

「ジロジロ見るのは失礼よ。さあ……」

イリが笑いながら背筋をまっすぐ伸ばしてノロの家の玄関に向かう。そして鍵がかかっていないドアを開ける。

＊＊＊

「ここは展示室というより、博物館だ」

ホーリーが驚くのを尻目にフォルダーが説明を始める。

「ノロの遺品を整理してその中で重要なものを展示した。ノロがいたころ、ここはがらくた置き場になっていた。ベッドですら、がらくたが置かれていてノロはわずかに残った床で寝ていたようだった」

「この床の扉は？」

瞬示がフォルダーの説明を抑えて足元の四角い木の扉を指さす。

「古本だらけの地下室だ。この中を整理していた者から、たいした本はないので処分するという報告を受けたのを覚えている。そうだ、思い出したぞ。ノロにとって宝物かもしれないので

片付けずにそのままにしておけと指示したんだ」
「開けていいかしら」
真美が腰をかがめて丸い鉄の取っ手を握る。フォルダーはなぜふたりが地下室に興味を持つのかふしぎに思うが、断る理由もないので首を少しすくめてからうなずく。
「重たいわ」
「この星にはドロボウはいないから、鍵はかかってないはずよ」
イリもフォルダーと同じようにふしぎそうにふたりを見つめる。瞬示が真美に手を貸すとギーという音とともに扉があがる。くたびれたはしごがかけられている。
「どこかに照明スイッチがあったはずだ」
フォルダーがふたりに声をかける
「明かりはいいです。見えますから」
「ちょっと待った！」
ホーリーが降りようとするふたりを止める。
「地下室から消えてしまうってことはないだろうな」
「そうよ。まず、みんなで今までのことや今後のことを話しあいましょう」
サーチがホーリーに同調する。
「急ぐこともないか。マミ、あとのお楽しみだ」

「なぜ地下室の古本に興味があるんだ？」
フォルダーが真美にたずねる。
「ふしぎな本を探しているの」

＊＊＊

全員、展示室の細長いドーナツ形のテーブルに着く。そのテーブルの真ん中にガラスケースが置かれている。誰もがテーブルに手をついてそのガラスケースをのぞきこむ。
「ノロです。凍結保存されています」
イリが悲しそうに説明する。
【瞬ちゃん】
真美が信号を送ると瞬示が真美の言いたいことを信号にする。
【生きているように見える】
【瞬ちゃん】
【わかっている】
ふたりはもちろんのこと、この星の者以外の誰もが展示室内をぐるっと見渡す。ブラックシャークや明らかに男と女の体型のアンドロイドの模型や今までに見たこともないような様々なものが展示されている。
「ノロがあとでゆっくりと展示品を案内しますから、今は席についてください」

イリが悲しみの表情を捨ててにこやかな笑顔を見せると、凍結保存されたノロが全員にほほえみかけているように映る。少なくともイリにはそう見えた。

「何もかもやりとげた満足した表情だわ」

サーチはノロが今にも「やあ」と言ってガラスケースから出てきそうな錯覚を覚える。サーチだけではない。全員が同じ感覚を共有する。

「時空間移動船の食料は底をついています」

キャミの言葉が展示室にきびしい現実の空気を注入する。フォルダーが追い打ちをかける。

「完成コロニーはすべてアンドロイドが支配している。しかも人間が住める環境ではない」

「えー！」

真っ先にキャミが大声をあげて驚く。ほかの者は声こそあげないが落胆する。

「そうだとすれば、人間が移住できるのは今のところ、この星しかない」

ミトがフォルダーに視線を向ける。

「はっきり言うが、この星に上陸させることは拒否する。この星の人間とアンドロイドの安全が脅かされる」

会話が始まった直後だというのに展示室は極度な緊張感に包みこまれる。フォルダー以上にミトが強い意志を押しだす。

「それは承知している。地球をアンドロイドから奪還する」

「時空間移動船には食料どころか武器もないのよ」
キャミがミトに泣き出しそうな顔を向ける。
「フォルダー、力を貸してくれ」
ミトがフォルダーに深々と頭を下げる。
「仮にホワイトシャークで上空からの地球攻撃が成功したとしても、その後の地上戦をどうやって戦うんだ。俺たちは海賊だ。陸にあがった鮫はカマボコになるだけだ」
フォルダーにキャミが弱々しくうなずく。
「今の人間に武器を持たせたところで戦う力はないわ。女と男が戦争していたころとは違う。アンドロイドに何もかもさせて、自分たちは遊ぶことしか考えないほど落ちぶれてしまった」
年老いた一太郎が初めて発言を求める。
「キャミの言うとおりアンドロイドがいなければ、人間は自力で生活するどころか食料を確保することもできない。一方、アンドロイドは完全に意思を持った。残念ながら、みじめさという感情まで持ってしまった。それほど人間と変わらない感情を持っている。今回のアンドロイドのクーデターは突発的に起こったのではない。アンドロイドなりに考えたうえで事を起こした。それに彼らの感情には個性がある。だからこそ逆に最後まで人間の味方になったアンドロイドもいた」
一太郎が白い髪の毛をかきむしると肩を落とす。一太郎の話に全員がきびしい現状を再認識

する。一太郎はまるで自分自身を責めるような言葉を続ける。
「元はといえば、無言通信システムに組み込まれた言語処理プログラムが原因だ。アンドロイドがいるこの世界に持ちこむべきプログラムではなかった」
「一太郎が持ちこんだんじゃない」
「瞬示の言うとおりじゃ。それより一太郎の意見をもっと深く聞きたいのう」
「人間とアンドロイドの会話を確保しなければならないと思います。このまま両者の意思疎通がなくなれば、仮に人間がこの困難を回避できたとしても、アンドロイドなしに生きていけないから、どうしても無言通信のような会話が必要になります」
キャミが全身を震わせて一太郎を見つめる。
「無言通信のようにアンドロイドと会話ができれば、事態は改善されるかもしれません。でも、当面の解決策にはならないわ」
「キャミ、一太郎の話を最後まで聞きましょう」
ミトがキャミをたしなめる。
「僕と妻が作った言語処理プログラムは人間の言葉で書かれているわけではありません」
「当然だ。最終的なプログラムはマシン語で記述されるものだ」
ホーリーが思わず割りこんでしまう。
「そのとおりです。だから、人間の言葉をマシン語に変換してアンドロイドのＣＰＵに直(じか)に語

りかけるのです。うれしいとか、悲しいとか……そして、人間はアンドロイドにすまないことをしたとか……」

「口で言うのじゃなくって、アンドロイドの言葉で直接心に訴えるということね」

サーチが大きく口を開けて胸に手を当てる。

「そうです。」

「でも、どのようにしてアンドロイドに直接伝えるんだ？それに直接訴えたところでアンドロイドの心を動かすことができるだろうか」

ホーリーが一太郎に疑問を投げかけるとミトが割りこむ。

「アンドロイドにはっきりとした個性があるのなら、あながち期待はずれとは言えないだろう」

まず可能性を肯定してから、続けてホーリーと同じ意見を述べる。

「しかし、ホーリーの言うとおり、どのようにしてアンドロイドに言葉を伝えるかだ」

一太郎がたじろぎもせずに答える。

「アンドロイドは人間と同じ言葉を使って会話しているように見えますが、ほとんどの場合、電波を使ってマシン語で通信しています。だから言葉そのままではなく、マシン語に翻訳して電波を彼らに流せばいい」

サーチが深いため息をもらす。

「アンドロイドに訴えるよりも、真摯(しんし)に生きることの大切さを人間に悟らせるプログラムの方が必要じゃないのかしら」

それまで黙ってみんなの意見を聞いていたイリが、サーチに向かって大きくうなずくと初めて言葉をかける。

「サーチ、一太郎と花子や忍者を紹介して」

フォルダーもサーチに追加する。

「無言通信の生みの親だとは聞いていたが、お会いするのは初めてだ」

そしてまず一太郎と花子に向かって会釈して言葉を続ける。

「フォルダーという宇宙海賊です。俺もイリも無言通信にはずいぶん世話になった」

一太郎と花子がフォルダーとイリに向かって頭を深々と下げる。

「失礼しました。こちらこそお世話になっているのに、あいさつもせずに勝手なことばかり申しあげまして……」

イリが一太郎の言葉をさえぎる。

「そんなことないわ。ノロが生きていたら、自己紹介も忘れて一太郎に鉄砲玉、いえ、レーザー光線のように質問をしていたと思うわ。それぐらい貴重な話だったわ」

イリがほほえみながらノロの遺体に視線を移す。

「一太郎とフォルダーが初対面だとはまったく気が付かなかったな」

ホーリーがサーチに同意を求める。
「あなたは誰とでも気安く付きあうから鈍感なのよ。私もいつの間にか鈍感になってしまったわ」
ホーリーはサーチのグチから逃げるように明るく大きな声を出す。
「改めて紹介します。一太郎、花子、四貫目、お松。そしてフォルダー、イリ……」

＊＊＊

キャミの表情が急変する。
「カーン・ツーから無言通信が……」
キャミは目を閉じて苦悩の表情を浮かべながらカーン・ツーの無言通信を受けいれる。
〔大統領！どこにいるのですか〕
〔あなたが大統領でしょ。いったいどうしたのですか〕
〔残り少ない食料をめぐって殺し合いが始まりました〕
〔おろかな。なんとか知恵を絞ります。あなたも考えなさい〕
キャミがカーン・ツーとの無言通信を遮断してその内容を全員に伝える。声を出したのはミトではなくフォルダーだ。
「人間はどれくらいいるんだ」
ミトがキャミをうながす。

第五十七章　救出

「だいたいでいい」
「わからない。一〇〇〇万人もいないかもしれない」
キャミが弱々しく答える。
「この星の人口は一万人、今ある食料を全部集めたって百万食もないだろう」
フォルダーは腕を組んで高い天井を仰ぎみる。ミトがキャミに首を横に振って小さな声を出す。
「仮にすべての人間を受けいれたとしても手の打ちようがありません」
「水と食料を切りつめれば、あと二、三日はもつと思っていたのに。今の人間には我慢することもできない……」
キャミが放心状態になる。フォルダーがそんなキャミをにらみつける。
「地球には食料はあるか」
キャミはくしゃくしゃになった顔をフォルダーに向ける。
「しっかりしろ！」
フォルダーが怒鳴る。ミトがキャミのほほを軽くたたく。
「地球には食料はありますか？」
ミトの言葉にキャミが小さくうなずく。
「ホワイトシャーク、緊急出航！」

フォルダーが立ちあがる。
「わかりました！」
ＭＹ２８の耳が急に赤く輝く。
「地球には戻れない。みんなアンドロイドに殺されるわ」
キャミが珍しく取り乱す。ミトはいつの間か自分とそう変わらない体格に縮んだように見えるキャミを抱きかかえる。キャミはミトの胸の中で声をあげて泣き出す。
「三分以内にホワイトシャークが到着します」
ＭＹ２８の報告を聞きながら、フォルダーはテーブルに手をつくと目の前のガラスケースのノロに話しかける。
「おまえなら、どうする？」
イリがフォルダーの横から声をかける。
「やるだけだわ」
ホーリーも黙ったままフォルダーを見つめる。
「瞬ちゃん！」
いきなり真美がある一点を指さして叫ぶ。真美は瞬示の手を引いてテーブルから離れると陳列ケースのひとつに向かって小走りに近づく。
「遮光器土偶！」

「なぜ、ここに？」
リンメイも遮光器土偶が置かれた陳列ケースに近づいてまじまじと見つめる。フォルダーが少し遅れて真美の肩越しに遮光器土偶を見つめる。
「まるでノロの女性版のような奇妙な姿をしているな」
フォルダーが遮光器土偶を眺めてノロを思い出す。
「ノロはどこでこの遮光器土偶を手に入れたんだ？」
瞬示の疑問に答える者はいない。ホーリー、サーチ、そしてキャミがミトに支えられながら、陳列ケースに近づく。ＭＡ６０がけげんそうな表情をして答える。
「調べておきますわ」
ノロの家が震えるような音を出しはじめる。と同時に低く重い音が腹に響く。
「ついてきたい者はいっしょに乗船しろ。ＭＹ２８はいっしょに来い」
フォルダーの言葉に瞬示と真美以外の全員がうなずく。フォルダーの指示が続く。
「ＭＡ６０は残れ！副所長のＦＡ５１に伝えろ。造船所所長代理に任命すると。そしてブラックシャークの修理を急ぐようにと。それにこの土偶を調べてくれ」
「了解！」
ＭＡ６０がきっぱりとフォルダーとＭＹ２８の背中に言葉を発する。
【瞬ちゃん、どうする？】

瞬示はノロの家の地下室の扉を見つめながら真美に信号を返す。
【気になる地下室だけれど、今はみんなといっしょに行動しよう】
みんなの最後尾を瞬示と真美が追いかける。
「ブラックシャークの修理を最優先してくれ！これは絶対命令だ！」
フォルダーが振り返ってＭＡ６０に念を押す。

第五十八章　奇策

【時】永久０２８８年
【空】地球、その上空
【人】瞬示　真美　フォルダー　イリ　ホーリー　サーチ　住職　リンメイ　キャミ　ミト
カーン・ツー　ミリン　ケンタ　四貫目　お松　Ｒｖ２６　ＭＹ２８

＊＊＊

ホワイトシャークが地球のはるか上空に現れる。
「いつ見ても美しい星ね」
フォルダーはイリの言葉にうなずいてから中央コンピュータに命令を下す。
「すべての回線を開いてアンドロイドの最高責任者に連絡を取れ」
「わかりました」
「ＭＹ２８、多次元エコーの資料をすぐ作成しろ」
「資料といいますと」
「地球にいるアンドロイドに多次元エコーの威力を説明するための資料だ」
ＭＹ２８はフォルダーの意図が理解できずにじっとフォルダーを見つめる。
「命令を実行しろ」
「はい」

「中央コンピュータ、通信回線は？」
「繰り返し呼んでいますが、応答はありません」
「続行しろ」
ＭＹ２８は肩からコードを伸ばして端末につなぐと中央コンピュータと同期を取る。
「どうするつもりなの」
イリが心配そうにフォルダーを眺める。
「地球を盗む」
「地球を！今までで最高の盗品になりそうね！」
イリの表情がくずれる。
「どういうことだ？地上戦になれば勝ち目がないと言っていたのに」
ホーリーがフォルダーに近づく。
「通信回線がつながりました」
ホーリーの質問が中断される。
「ワタシは地球アンドロイド政府の臨時代表のＲｖ２６です」
ホーリーたちにどよめきが広がる。
「宇宙海賊のフォルダーだ。地球を明け渡せ」
「とうとつなことを言われても返答しかねます」

「今、マシン語に翻訳した資料を送信する」
フォルダーがＭＹ２８に目配せする。再びフォルダーをじっと見つめていたＭＹ２８が腕に埋めこまれた精巧なキーボードを指を使わずに操作する。
「送信しました」
「Ｒｖ２６、一分以内に返答しろ」
ホーリーがいったんあきらめていた質問の答えを催促する。
「何をしでかすつもりだ」
「地球を明け渡さなければ多次元エコーで攻撃する」
「えっ！」
フォルダーが驚きの声しかあげられないホーリーに言葉を続ける。
「生物にはなんら影響はないが、アンドロイドは鉄くずになってしまう。地上で戦うべき相手がいなくなってしまうということだ」
「荒っぽすぎる！」
ホーリーの言葉にイリは軽くうなずくが、多次元エコーの威力を知っている瞬示や真美はもちろんのこと、誰もがこわばった表情をする。
「荒っぽいのは俺の流儀だ。カーン・ツーに連絡を取れ」
フォルダーが次々と命令を下す。ＭＹ２８がフォルダーに何かを訴えようとするが、今のフ

オルダーにＭＹ２８の意見を聞く余裕はない。
「カーン・ツーだ」
「俺は宇宙海賊のフォルダーだ。よく聞け、一度しか言わないぞ」
「待ってくれ。海賊がなんの用だ」
「おまえたちを助けてやろうというのに余計なことを聞くな。すぐに全時空間移動船を地球に空間移動させろ。地球に着いたら、時空間移動船を全部アンドロイドにくれてやれ」
「詳しく説明してくれ」
「生意気なことを言うな。親心でひとつだけ助言しておく。耳栓を用意しておけ。以上だ」
フォルダーがカーン・ツーとの通信回線を切ったとたんＲｖ２６からの通信が入る。
「わかりました。地球を明け渡しましょう」
「Ｒｖ２６……おまえは物分かりのいいアンドロイドだ。六時間以内に明け渡せ。アンドロイドがひとりでも地球に残っていたら、六時間後に多次元エコーを地球にぶち込む」
「それは無茶です。時空間移動船の数が足りません」
「大丈夫だ。ポンコツだが大量の時空間移動船が人間からプレゼントされる。あとはおまえたちの知恵を働かせろ」
「ワタシは全権を掌握していません。一部のアンドロイドが反乱するかもしれません」
「おとなしく地球を出るアンドロイドには攻撃はしない。たてつくアンドロイドには容赦なく

攻撃する」
中央コンピュータが警告を発する。
「宇宙戦艦が空間移動してきます」
続いてＲｖ２６からの報告が入る。
「すでにワタシの意向を無視したアンドロイドが行動を起こしました」
「意外と素早い行動だ」
驚くこともなくフォルダーがＭＹ２８に命令する。
「第一級の攻撃体勢を取れ」
ＭＹ２８がフォルダーの視線をしっかりと受け止める。
「全主砲発射準備！」
フォルダーの声が艦橋に響きわたる。
「敵宇宙戦艦よりレーザー砲が発射されました」
「空間移動！背後に回りこめ」
「了解！」
ホワイトシャークが消える。数秒後にホワイトシャークが消えた空間を複数のレーザー光線が通過する。
「敵宇宙戦艦十六隻。再確認します。十六隻、間違いありません」

ホワイトシャークのメイン浮遊透過スクリーンに宇宙戦艦が映しだされる。
「全砲門開け！連射！」
ホワイトシャークの主砲から太いレーザー光線が宇宙戦艦に向かう。次の瞬間、すべての宇宙戦艦が大爆発を起こす。中央コンピュータから次々と報告が入る。
「地球に多数の空間移動反応を観測！」
「カーン・ツーの率いる時空間移動船が地球に到達した模様。その数百八十九隻」

＊＊＊

カーン・ツーとその部下が堰（せき）を切ったように時空間移動船の出入口に殺到するアンドロイドに身構える。
「下船が先だ」
カーン・ツーが大声を張りあげるが、アンドロイドが叫びながら船内になだれ込む。
「早く降りろ！」
「アンドロイドの行動にしてはおかしい。まるで追いつめられた俺たちと同じじゃないか」
やっとの思いで地上に降りたカーン・ツーが次々と時空間移動船に乗りこむアンドロイドをぼう然と見つめる。
「アンドロイドがこんな激しい感情を持っているとは！なぜ、今の今まで気付かなかったんだ」

ひときわ大柄なアンドロイドが耳をしきりに赤く点滅させながら時空間移動船内に現れる。
「ずいぶん、旧式のアンドロイドだ」
胸にはＲｖ２６と書かれている。
「アンドロイドの会話を盗聴しろ」
部下がすぐさま通信機を操作するとアンドロイドの無線交信が翻訳されて音声で流される。
「時空間移動船の整備を急げ」
「今、空間移動してきたばかりだから、数時間は空間移動できない」
「わかっている。準備を急げ」
「多次元エコーに同調すると身体がバラバラになるのか」
「わからない」
Ｒｖ２６は多次元エコーの威力を知っているが、一切そのことを口にしない。旧式でありながら、Ｒｖ２６は最新型のアンドロイド以上の判断能力を身につけている。
「時空間移動船の総数は？」
「人間が戻ってきたのと合わせて約三百隻です」
「そうか。少し足りない」
「手持ちの百隻ほどの時空間移動船はまもなく出発できます」
「残っている宇宙戦艦も利用するんだ」

「通告時間に間に合わなければ？」
「時空間移動装置を使おう。時空間移動装置ならすぐにスタンバイできる」
「時空間移動装置で移動できる数はしれてます」
「完成コロニーに連絡してできるだけの数の時空間移動装置を手配しろ」
「人間が乗っていたほとんどの時空間移動船はエネルギーを使い果たしています！」
「エネルギーの充填を急げ」
「宇宙海賊の攻撃時間を遅らせることはできないのか」
「交渉してみる」
Ｒｖ２６は人間が地球に戻ってきた時空間移動船の状態を把握すると船底の出入口に向かう。
しかし、次々と乗りこんでくるアンドロイドに阻まれてなかなか下船できない。

＊＊＊

「Ｒｖ２６が会談を申しこんできたわ」
イリがヘッドセットを外すと、少し乱れた髪の毛を整えながらフォルダーに告げる。
「場所は？」
「大統領府の近くにある建物で以前リンメイが使っていた研究室を指定しています」
「私がいたころのままだとすれば、貴重な資料が残っているかもしれないわ」
リンメイの言葉に真美が反応する。

「火炎土器があったわ。本物よ」
「本物？本物ってどういう意味なの」
リンメイが真美に一歩近づく。
「えっ、えーと」
真美はリンメイの真剣な眼差(まなざ)しに一歩引きさがると瞬示の腕をたぐる。
「その火炎土器はぼくらを、いや、ぼくらだけじゃないけれど、なんでも勝手にどこにでも運ぶことができるんだ」
瞬示が真美に代わって答えると少し間を置いてリンメイが大きな声をあげる。
「えー！」
フォルダーは火炎土器の件でイリと中央コンピュータにバカにされたことを思い出して苦笑しながらも事の重要性を認識すると、次の言葉が出ないリンメイに代わって瞬示に質問する。
「ちょっと聞きたいことがある。その火炎土器は土で作られているのか？」
「多分、そうです」
瞬示がリンメイからフォルダーに顔を向けて心の中を探る。
――多次元エコーで火炎土器が破壊される恐れがある
フォルダーは瞬示をだますほどの名演技を終えると視線を外して少しだけ口元をゆるませる。
瞬示はそのフォルダーの表情を見逃さないが、それ以上心の中を探るのをやめる。フォルダー

は口元を引きしめると瞬示に背中を向けてホーリーに頼む。
「ホーリー、Ｒｖ２６のところへ行って話を聞いてやってくれ」
「わかった」
「私も行くわ」
「私も」
サーチとリンメイが同時に声をあげる。
「わしもじゃ」
住職が手をあげる。
「私も」
ミリンがケンタとともにホーリーの横に立つ。
「ホーリー、サーチ、リンメイ、住職の四人だ」
フォルダーの言葉にミリンがふてくされる。
「いつも置いてきぼりだわ」
「瞬示は？」
「時空間移動装置に六人は乗れないわ」
イリがたしなめる。
「ぼくらは自力で空間移動します」

瞬示が真美を見つめる。
「一足、先に行ってるね」
瞬示と真美の姿がフォルダーたちの前から消える。あっけない瞬間移動を目の当たりにしてＭＹ２８が驚いてフォルダーに視線を移す。
「時空間移動装置を使わずに移動できるとはすごい人間ですね」
「ああ、何度見てもあきれてしまう」
フォルダーがＭＹ２８にうなずく。
「ところで……」
まだ驚いているＭＹ２８がフォルダーの耳元でささやく。
「フォルダー、多次元エコーのことなのですが」
「わかっている。誰にも言うな」

＊＊＊

「Ｒｖ２６」
リンメイの研究室の窓から外を眺めていたＲｖ２６が瞬示の声に振り返る。Ｒｖ２６はまるで瞬示と真美がここに来るのを待っていたように驚くこともなく棚から火炎土器を軽々と持ちあげる。
「これを持っていってください。多次元エコーの攻撃を受けると土に帰るでしょう」

火炎土器の役割を知っている瞬示はＲｖ２６の気づかいに満面の笑みを浮かべて受けとる。
「ありがとう。これが多次元エコーの攻撃で消滅したから巨大なニューロコンピュータが動かなくなってしまったんだ」
少し感傷的になった瞬示を無視して真美がＲｖ２６に告げる。
「フォルダーの代理人としてホーリーとサーチ、住職とリンメイが来るわ」
瞬示も表情を引きしめるとＲｖ２６にたずねる。
「状況はどうだ？」
「よいとは言えません」
「フォルダーが指定した時間に間に合いそう？」
「半数の脱出は十分可能なのですが、残りの半数については不明です」
「猶予時間を延長して欲しいと言うことか」
「そうです」
「フォルダーが応じるだろうか」
瞬示の表情がさらに固くなる。そのとき、窓の外に時空間移動装置が現れる。ドアが跳ねあがるとまずホーリーとサーチが窓に飛び移る。そして若々しい住職とリンメイも軽やかに跳躍して部屋に入ってくる。Ｒｖ２６が一同に頭を下げる。
「重要な話があります」

「重要な話？」
瞬示は火炎土器を机に置くとＲｖ２６を見つめる。
「この地球が人間のものになったとしても、人間は生活できないでしょう」
Ｒｖ２６の表情は変化することがないのに瞬示と真美にはきびしく見える。
「まず、アンドロイドの地球脱出がうまくいった場合、つまりアンドロイドが地球上にひとりもいなくなると、人間は食料を確保することや服を作ることもできません」
「そこまで人間は堕落したの？」
サーチが信じられないという表情をＲｖ２６に、そしてホーリーに向ける。
「今、人口が極端に少なくなっています。人間はほとんど子供を造らないのです。この十年間の平均出生率は一％です。生命永遠保持手術は、手術する医者はもちろんのこと設備もありませんから不可能で、老人は当然死んでゆきます。医者もすべてアンドロイドです。アンドロイドがいなくなると風邪もひけません。薬を造る能力も人間にはありません」
「一太郎が言っていたとおりじゃ」
住職が数珠を握りしめる。リンメイがＲｖ２６に首を横に振ってたずねる。
「キャミなら、なんらかの手を打ったはずだわ」
「ワタシが収集した情報では、地球連邦政府はそれなりに努力はしたようですが、民意はことごとく政府を無視したようです」

「なんと！話を続けてくれ」
住職の言葉にホーリーはもういいと投げやり的な態度を見せる。Ｒｖ２６はそんなホーリーに気付くことなく話を続ける。
「逆にアンドロイドの地球脱出が完全に達成できない場合、地球は多次元エコーの攻撃を受けます。ご存じのとおり多次元エコーは無機質の物質を破壊します。アンドロイドはもちろんのこと建物や様々な施設も、この机や椅子（いす）もすべてチリのように崩壊します。そんな地球で人間は生きていくことができるのでしょうか」
全員、Ｒｖ２６の言葉にがく然として沈黙する。真美の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちる。
【瞬ちゃん、多次元エコーの攻撃を止めなければ！】
【フォルダーに何か考えがあるのかもしれない。もう少し様子を見た方がいい】
そのとき、ホーリーが机を激しくたたく。
「こんな事になるぐらいなら、すべてニセモノの神様にくれてやればよかった」
瞬示があわてて火炎土器を机から持ちあげる。
「ワタシはあきらめません」
ホーリーがはっとしてＲｖ２６を見つめる。涙でぼやけてＲｖ２６の姿が揺れる。
「手立てはあるのか」
「ありません」

「じゃあ、どうしてあきらめないと言うのじゃ」
住職が床に座ると足を組んで目を閉じる。しかし、Ｒｖ２６からの追加の言葉はない。
「人間とアンドロイドを融和する方法があるはずじゃ。そうじゃろ、Ｒｖ２６」
住職はかっと目を見開いてＲｖ２６の口元をにらむ。
「ワタシはアンドロイドを全員無事に地球から脱出させてから、その成果をアンドロイドに訴えて人間と仲良くするように説得しようと考えています」
「今すぐ、説得はできんのか」
「ワタシはすべてのアンドロイドの心を掌握していません。それにフォルダーの条件が過酷すぎます。アンドロイドの混乱を見てください」
住職がはっとして立ちあがる。
――アンドロイドが死を恐れておる！
「人間に餓死者が出ている。やむを得ない」
ホーリーの言葉に住職は今気づいた重大なことを仕舞ってつぶやく。
「フォルダーを説得しなければならんのう」
瞬示が住職に向かって大きな声で応える。
「ぼくらもフォルダーを説得します。でも、その前に……」
真美は黙って瞬示を見つめる。

＊＊＊

「条件を変更するつもりはない。中央コンピュータ、残り時間は一時間だとＲｖ２６に通告しろ」

ホーリーを無視してフォルダーは腕時計を見ながら作戦室から姿を消す。

「アンドロイドが時間内にすべて地球から脱出できなければ、人類は全滅する」

キャミが作戦室内の今は何も映っていない浮遊透過スクリーンをぼんやり眺める。その浮遊透過スクリーンもタイムアウトとなって消滅する。

「人類は原始時代に戻ってやり直しね」

リンメイがホーリーから預かった火炎土器を大事そうに抱える。キャミが四貫目とお松を見てから首を横に振る。

「無理だわ。そんなたくましい人間はひとりもいない」

「なんとかするわよ」

「座して死ぬなんてあり得ない。葉っぱや根っこを食べてでも生きようとするはずだ」

ホーリーとサーチがキャミをなぐさめる。

「私、地球に戻ります」

キャミが急に立ちあがる。

「フォルダーが許可するだろうか」

ホーリーがミトを横目で見ながらつぶやくと、イリが黙って作戦室から出ていく。
「瞬示と真美は何をするために地球に残ったんだ」
急に思い出したようにミトがホーリーにたずねる。
「気になることがあるとだけ言って、リンメイの研究室から消えてしまった」
「今度ばかりはあのふたりに奇跡を期待するのは無理なようだ」
ミトの言葉にサーチが首を傾げて意識せずにポツリと言葉を吐く。
「どうして」
「人間の心の問題だからじゃ」
住職が火炎土器をうつろな目で見つめるリンメイの肩に手を置きながらミトに代わって応える。リンメイはやっと視線を動かして上目づかいで住職を見つめる。
「退廃した人間の心を元に戻すことは大変なことじゃ」
否定する者は誰もいない。
「わしも地球に行く。今こそ仏の教えが必要な時じゃ」
作戦室の天井のスピーカーからフォルダーの声が流れる。
「俺にキャミを縛る権利はない。キャミ、カーン・ツーには念を押しておけ。おまえが墓穴を掘ったことを肝に銘じておけと」
どうやら、イリがフォルダーに頼みこんだようだ。キャミが若返ったように天を仰ぐ。

「ありがとう！フォルダー」
「私も行く」
「俺もだ」
次々と声があがる。最後に四貫目が低い声を出す。
「我らもご一緒する」

＊＊＊

「時空間移動船の数が足りません」
「何隻足らない？」
「二十一隻です」
Ｒｖ２６が肩を落とす。
「九十パーセント以上が脱出に成功しました」
「もう時間がありません」
Ｒｖ２６は時空間移動船の艦橋でメイン浮遊透過スクリーンを見つめる。
「発信！月の軌道まで移動！他の時空間移動船は計画通り完成コロニーへ空間移動せよ」
「なぜ、ワレワレも完成コロニーへ空間移動しないのですか」
「気になることがある。とりあえず月の軌道から地球の動向を探る」
Ｒｖ２６は肩から伸びたマイクを握る。脱出できずに地球に残ったアンドロイドにメッセー

ジを送るためだ。
「ワタシの不手際で地球を脱出できないアンドロイド諸君に告ぐ」
Ｒｖ２６が想いをめぐらして目を閉じると最も短い言葉を選ぶ。
「すまない」
返事はない。Ｒｖ２６にとって返事があってもなくても同じようなものだった。
「時間です」
Ｒｖ２６のそばにいるアンドロイドが叫ぶ。Ｒｖ２６はメイン浮遊透過スクリーンに映しだされた地球を見つめ続ける。
「宇宙海賊からの通信です」
「つなげ！」
「フォルダーだ。Ｒｖ２６、見事な指揮だ」
「多次元エコーは？」
「勘違いしていた。多次元エコーはブラックシャークに搭載されているが、このホワイトシャークには搭載されていないことを忘れていた」
「フォルダー……」
Ｒｖ２６が絶句すると同時に気が抜けてしまう。
「かなりの数の空間移動反応を観測！おそらく地球に時空間移動船らしきものが到着します」

「警戒態勢！」
Ｒｖ２６がすぐさま反応するとフォルダーの明るい声が聞こえてくる。
「ノロの惑星から人間へのプレゼントだ。一日分にも満たないが食料を満載している」
「なぜ、ワタシにそのようなことを伝えるのですか」
「いや、重要なことは今から言う」
「……」
「酸素に満ちた地球からの脱出おめでとう」
メイン浮遊透過スクリーンにホワイトシャークが映る。
「ホワイトシャークが地球からものすごいスピードで離脱しています」
「フォルダー！意味がわかりません」
Ｒｖ２６がそう叫ぶとすぐに顔をあげてさっきより大きな声を出す。
「地球に残ったアンドロイドを指揮して、人間を助けてやれと言うことですか？」
フォルダーからの返事はない。
「できるだけのことをしましょう！」
Ｒｖ２６が力強く叫ぶと、やっとフォルダーから返事が届く。
「頼むぞ。でも地球に長く居続けると錆てしまうことを忘れるな」
「どういう意味ですか」

「人間がアンドロイドの言うことを聞かなければ、すぐに地球を見限れ！」
フォルダーの言葉が終わるとホワイトシャークの姿が消える。
「ワープしました」
「地球に戻る」
Ｒｖ２６が右腕をあげて袖をまくる。白い人工皮膚のあちらこちらから赤茶けた粉がふきだしている。そして器用に笑うような表情をしながら、そばにいる部下に話しかける。
「オイルを持っているか」

第五十九章　証拠隠滅

【時】永久０２８８年
【空】地球　ノロの惑星
【人】キャミ　ミト　カーン・ツー　住職　Ｒｖ２６
　　フォルダー　イリ　ＭＹ２８　ＭＡ６０

＊＊＊

フォルダーの奇抜な作戦が成功すると、地球に戻った人間と地球から脱出できなかったアンドロイドの間の溝が少し埋まる。このチャンスをなんとか生かそうと大統領執務室にキャミ、ミト、カーン・ツー、ホーリー、サーチ、住職、リンメイ、Ｒｖ２６が集まって善後策の協議を始める。

「アンドロイドは圧倒的に少ない」

カーン・ツーが切りだす。

「だから大事にしなければならないのよ。フォルダーの真意がわからないの」

キャミが疲れたような声を出す。カーン・ツーはキャミの言葉に反論したい気持ちをかろうじて抑えて、できるだけ冷静に言葉をつづる。

「今までの何倍もアンドロイドを働かさなければ、我々は生きていけません」

「まだ、そんなことを言ってるの。あくまでも手伝ってもらうだけで、自分たちでできること

は自分たちでするのです。まず、食糧の確保を考えましょう」
カーン・ツーが黙ってしまうとミトがキャミに提案する。
「とりあえず、今までの出来事を人間やアンドロイドに伝えるための広報活動をする必要があります」
「そのとおりだわ。とにかく安心させなければ。カーン・ツー、放送の準備にかかりなさい」
キャミの命令口調にカーン・ツーが反発する。
「いつ大統領に復帰したのですか」
「だったら、あなたが今後の方針を明確に伝えなさい」
「どっちにしたって、空腹で疲れ果てています。すぐアンドロイドに食事の用意をさせます」
Ｒｖ２６がカーン・ツーに向かって静かに口を開く。
「わかりました。非常事態であることはよくわかります。しかし、ワレワレも今度の事件で長らく身体の整備をしていません。地球では毎日整備が必要なのですが、もう何日もしていません」
「機械がそう簡単に動かなくなるはずはない」
「ワレワレは精密機械です。サビが回ると回線がショートしたり、そのサビが食品に混在して食中毒を起こすかもしれません。酸素は人間にとって大切なものですが、アンドロイドにとっては毒のようなものです」

「カーン・ツー、Ｒｖ２６の言うとおりだわ。まだわからないの。アンドロイドなしには人間は生きていけないのですよ。アンドロイドを大切にしなければなりません」
そばでキャミとカーン・ツーの会話を黙って聞いていた住職とリンメイがカーン・ツーに落胆する。そのカーン・ツーに向かって住職がさとすように口を開く。
「海賊だといっても食料の手当をしてくれた。節約すれば二、三日はしのげる」
「ヤツラの星に上陸させてくれさえすれば、こんな事にならずに済んだものを」
あくまでもカーン・ツーはわがままな発言を続ける。
「もし、首尾よく上陸できたとしても、一万人程度の人口の星で一千万人分もの食料が確保できるわけがないわ」
サーチもカーン・ツーをたしなめる。カーン・ツーがムッとして黙ってしまう。
「まるで、だだをこねる子供みたいだ」
ホーリーが横を向いてふくれるカーン・ツーから視線を背ける。
「説法で人間を働かすのは骨の折れる仕事じゃ」
さすがの住職もフーッと息を吐きだす。

＊＊＊

「地球に残ったアンドロイドが危ない」
フォルダーはノロの惑星のアンドロイドに今回の作戦とそのてんまつすべてオープンにした。

しかし、地球にいる人間とアンドロイドの間によい兆しが見えない。
「残りのアンドロイドを脱出させるか、人間を殺すしかない」
造船所に集まって議論するアンドロイドから過激な発言が飛びだす。
「別に地球が必要ではないが、地球の同胞をなんとかしなければならない」
「まあ、待て。ワレワレは人間に教わらなければならないことが、まだまだある」
フォルダーの行動をつぶさに見ていたＭＹ２８がなんとか過激な意見を抑えこもうとする。
「この星の人間は別として地球にいるような堕落した人間から学ぶものは何もない。感情を手に入れたのはノロのお陰だが、ノロも言ってたようにあとはワレワレが努力して進化すればいいのだ」
「なぜ、こんな事態になってしまったんだ？」
「この星では人間もアンドロイドも平和に暮らしているのに」
フォルダーとイリが修理と改造を終えたブラックシャークの艦橋でアンドロイドたちの会話を聞いている。
「男と女の戦争が終わって高度に発達した巨大コンピュータとの戦いも終わったのに、今度は人間とアンドロイドが対立している。しかも人間に勝ち目はない」
フォルダーの言葉にイリが悲しそうにうなずく。
「ノロが心配していたアンドロイドの世界になるのかしら」

「俺の作戦は間違っていたのか」
「そんなことはないわ。与えられたチャンスを生かすも殺すも人間次第。最悪の状態を脱したのに、なぜ、立ち直ろうとしないの！歯がゆいわ」
フォルダーが艦橋を出る。
「どこへ行くの」
「造船所だ」
イリは何も言わずにフォルダーのあとをついていく。

＊＊＊

「ＭＹ２８、それに造船所のアンドロイド諸君！ブラックシャークは完璧によみがえった。礼を言う」
激論を交わしていたアンドロイドが全員フォルダーとイリに向かって敬礼する。
「俺は人間だぞ」
「いえ、地球にいる人間とはまったく違います」
「そうだ、ワレワレはフォルダーやイリを尊敬しています」
打って変わったようにアンドロイドの言葉が高揚する。
「あんな作戦はワレワレには考えもつきません」
誰かの発言にフォルダーが苦笑する。

「まだ、二日しかたっていない。もう少し、地球の様子を見よう」
「手遅れにならないでしょうか」
ＭＹ２８が代表してフォルダーに進みでる。
「Ｒｖ２６に任せるしかない」
ＭＹ２８のうしろにいるアンドロイドが質問する。
「Ｒｖ２６は旧式のアンドロイドだと聞いています」
「新型、旧型の問題ではない。Ｒｖ２６は経験豊かなアンドロイドだ。それはさておき、地球の人間たちの態度がどのように変化するのか、今は見守るしかない。わかってくれ」
フォルダーがアンドロイドたちに背を向ける。
「邪魔をした。議論を続けてくれ。いい考えがあれば、すぐ教えてくれ」
フォルダーが背中でそう言うと歩幅を大きく取って歩きだす。イリは何も言わずに再びフォルダーのあとをついていく。距離を詰めずにイリがフォルダーにたずねる。
「次はどこへ行くつもりなの」
「ノロの家だ。あそこが一番落ち着く」
意識的に歩幅を縮めたフォルダーにイリが追いつく。
しばらくするとフォルダーとイリはうしろから自分たち以外の足音が聞こえてくるのに気付く。

「どうした？」
フォルダーは振り返らずに足音にたずねるとＭＹ２８の声がする。
「フォルダーの言うとおり、しばらく様子を見ることになりました」
「そうか」
「全員、ブラックシャークがいつでも発進できるように最終チェックを始めました」
やっとフォルダーが振り返る。ＭＹ２８とＭＡ６０がフォルダーとイリを見つめる。
「苦労をかけたな。ところでどこへ行くつもりなんだ」
「多分、同じところだと思います」
「そうか」
「ノロの家で勉強したくなりました」
「そうね」
イリがＭＹ２８とＭＡ６０にやさしく声をかける。
「ノロなら、この現実をどう受けいれるのかしら」

＊＊＊

イリはノロの家の展示室ではなく図書室を選ぶ。ノロの遺体がある展示室より図書室の方が落ち着くからだ。フォルダーとイリが向かい合ってテーブルに着く。それぞれの横に真似をするようにＭＹ２８とＭＡ６０が座る。

「ノロはブラックシャークでどこかへ行って、今までと違う人生を歩もうとしたのかしら」
イリがあのころのノロに想いをはせる。フォルダーがイリに首を傾げるがイリは気付かない。
「次の人生でファーストキスできればいいのだが」
フォルダーがイリにほほえみかける。
「この世界で私とすればよかったのに」
「なんでも器用にこなすのに、愛情表現だけは不器用なヤツだった」
「記憶も経験も消して次の世界へ行けば、またファーストキスできないかもしれないわ」
イリがまだどこかでノロが生きているのではという非現実的な希望を持っていることをフォルダーは十分承知している。
「ノロはファーストキスよりもっとすごい感動を求めてさまよっているのかもしれない」
「それって、私に魅力がないということなの？」
突然の質問にフォルダーはたじろぐ。
ＭＹ２８やＭＡ６０にはまったく理解できない会話が続く。フォルダーはふと瞬示と真美が興味を示したノロの展示室にある遮光器土偶のことを思い出す。
「遮光器土偶に何か引っかかるものを感じていたんだが、ノロを女にしたような感じがしないか？あの丸いギラギラしたメガネ、遮光器土偶の目とよく似ている」
「それは少しひどい表現だわ」

フォルダーはイリの不機嫌な顔が自分に向いているのに気後れして、イリの喜びそうな言葉を探す。
「ひょっとしてアイツ死んだんじゃなくて、何かを調べるためにどこかへ時間移動したのかも……」
「えっ！フォルダーもそう思っているの？」
イリはフォルダーの言葉が単なるなぐさめではなく現実的なものだと解釈する。フォルダーはイリの機嫌が戻るように耳ざわりのいい言葉を連発する。
「地球と同じ星を造るんだとよく話していたじゃないか」
「そうね。ほ乳類はもちろんのこと、今、この世界にいる未完成な人類ではなく、この宇宙に存在するにふさわしい人類が誕生する環境を整えるんだってよく言っていたわね」
イリはいささか気をよくしたのかフォルダーに顔を近づけて次の言葉を待つ。
「地球の過去に移動して理想の人類を誕生させるにはどうしたらいいのか、勉強しに行ったのかもしれない」
このフォルダーのでまかせだが、いい加減ではない言葉が決定的にイリの心を強く押して勇気づける。
「私、ブラックシャークが試運転から戻ってきたときの記録をもう一度調べ直してみるわ」
イリが機嫌良く立ちあがるとそれまで敬遠していた隣の展示室に向かう。フォルダーも立ち

あがってイリを追いかける。さらにＭＡ６０も立ちあがってフォルダーとイリをじっと見つめる。

＊＊＊

フォルダーはＭＡ６０に遮光器土偶のことを調べろと命令したことなどすっかり忘れてじっと土偶を見つめる。

「見れば見るほどアイツに似ている」

イリが再び不機嫌な表情をするが、返事をしないで端末を操作する。

「どういうのかなあ。全体の感じというのか……」

フォルダーはイリに聞こえないような小さな声を出しながら、陳列ケースから遮光器土偶を取りだしてあらゆる角度から観察する。

「あっ」

イリの小さな驚きの声にフォルダーが遮光器土偶をテーブルの上に置くとイリの横に立つ。

「これを見て！」

「時空間移動装置が一基と……」

モニターには試運転後に戻ってきたときのブラックシャークの装備や備品でなくなった物のリストが表示されている。

「ほかになんだかわからないものが、いくつかなくなっている。あのときまったく気が付かな

かったわ」
「アイツはブラックシャークに何を積みこんで試運転に出かけたんだ？」
「わからないわ」
「イリ」
「どうしたの？急に真剣な顔をして」
フォルダーはブラックシャークが試運転から戻ってきたときの中央コンピュータの言葉を思い出す。
「イリ、覚えているか」
「何を？」
「試運転から戻ってきたあと、中央コンピュータはノロの遺体をしつこいぐらい『砂漠に埋めろと言われています』と繰り返し言っていたことだ」
「覚えているけれど……」
「なぜ砂漠なんだ！おかしい！」
フォルダーが何かに気付くが自信はなさそうだ。
「気が進まないが、ノロの遺体を調べてみよう」
イリは内心ノロの遺体を調べたかったが、それは禁断の行為だと思って口にすることはなかった。今、フォルダーの言葉に強くうなずく。

フォルダーとイリがテーブルに近づくと中央に安置されたガラスケースをのぞきこむ。イリが顔をあげるとフォルダーにノロの遺体に貼られた「神聖」という名のレッテルをはがす宣言をする。

「ＤＮＡ鑑定してみるわ」

フォルダーは改めてイリを見つめるとあっさりと同意する。

「任せる」

「ここに鑑定装置はあったかしら」

「俺にはわからん」

「ちょうどよかったわ。ＭＡ６０に聞いてちょうだい」

「わかった」

フォルダーは隣の図書室に向かう。イリはテーブルの端からガラスケースに安置されたノロの遺体を見つめながら開閉ボタンを押す。

＊＊＊

イリは手術用の透明な手袋に指を通すと、ノロの遺体を傷つけるのが気がかりなのか足の親指と人差し指の間に先がハサミになった金属性の棒を差しこもうとする。

「そこはやめておけ」

「どうして？」

「アイツは強烈な水虫を持っていた」
「いやだわ」
イリが驚いて金属棒を引く。
「生命永遠保持手術を受けていても水虫になるの？」
「アイツ、風呂嫌いだったからな」
「そうね。全身からニオイが出るまで風呂には入りたがらなかったわね」
イリが苦笑いをしたあとフーッと息を吐く。
「じゃあ、手の指にするわ」
「普通は頭髪じゃないのか」
「凍結保存しているから髪の毛では正確に鑑定できるかどうか不安なの」
「任せる」
「ＭＡ６０、鑑定装置で調べて」
イリはノロの手の指の先を切り取った金属棒をＭＡ６０に手渡す。
「わかりました」
「私はノロのＤＮＡデータを端末で探すわ」
イリとＭＡ６０が手分けしてノロのＤＮＡの解析作業を手際よく進める。しばらくするとＭＡ６０がイリに告げる。

「ノロのＤＮＡデータを探す必要はありません」
端末を操作していたイリがＭＡ６０の顔から目を離さずに近づくと鑑定装置のモニターに視線を移す。すぐさまフォルダーに向かって叫ぶ。
「私たち、完全にだまされていたわ！」
「なに！、どういうことだ！」
イリがガラスケースの冷凍装置のコントロールパネルを操作する。
「これは土で作られた人形よ。その土偶と同じだわ」
「まさか！」
「ニセモノのノロをすぐ解凍するわ」
「俺たち、担がれていたのか」
イリが目をつり上げてうなずく。
「そう言えばアイツにはよくだまされた。アイツは本当か冗談か見分けがつかないことを言うのがクセだった！」
イリはうなずくと悲しそうに視線をガラスケースのノロに移す。
「生きているのかしら。もうあれから二百年以上もたっているのよ」
「中央コンピュータを絞りあげる！許さん！」
フォルダーが大声で叫ぶと造船所に向かって全力疾走する。

＊＊＊

「白状しろ！」
「なんのことですか」
「ノロのことだ」
ブラックシャークの中央コンピュータ室に極度の緊張感がみなぎる。
「……」
そこへイリが息を弾ませて現れる。
「あれは、ただの土の人形じゃないの！」
イリは日頃の柔和な表情から想像もできないほど目を見開いて中央コンピュータをにらみつける。
「もう、時効です」
「時効だったらすべてを話せ！それともおまえを解体してデータを解析しようか」
「それだけはやめてください」
「じゃあ、吐け！」
「気持ちを整理する時間をください」
「人間みたいなことを言うな」
「ノロは今どこにいるの！生きているの！」

イリの目に涙があふれる。
「わかりません」
「ＭＹ２８！至急中央コンピュータ室に来い！」
フォルダーの声が中央コンピュータ室に響きわたる。ここから発したフォルダーの命令は造船所に直結している。今度は低いがはっきりした言葉をフォルダーが続ける。
「ＭＹ２８なら痛みを伴わないように解体してくれるはずだ」
「解体するのだけはやめてください」
「じゃあ、包み隠さずすべてを白状しろ。わかったな！」
「それは……」
「チューちゃん。あなた、ひょっとしてノロなの」
フォルダーが驚いてイリを見つめる。
「それはないだろう。確かにしゃべり方が似ているところもあるが。それに……」
イリはフォルダーの言葉を無視して、にらみつけながら念を押すようにたずねる。
「ノロなの」
「いえ。ワタシはノロに制作された量子コンピュータです」
「量子コンピュータだって！」
続けようとした言葉を消去してフォルダーが一歩引く。

「こんなにコンパクトな量子コンピュータを製造するなんて不可能だ！」
「それじゃ、ノロは二台も量子コンピュータを造ったの？もう一台は確か前線第四コロニーの中央コンピュータだったわ」
「しかし、いくらノロでもこんなにコンパクトな量子コンピュータを製造できるのだろうか」
「裸になって身体の中を見せるわけにはいきませんが、ワタシは正真正銘の量子コンピュータです」
「ノロは興味あるものはなんでも造るわ」
ＭＹ２８が中央コンピュータ室に現れる。
「何かご用ですか」
フォルダーが思い出したように大声を張りあげる。
「今の今まで知らなかったが、こいつは量子コンピュータなのか」
「そうです」
「本当に量子コンピュータかどうか解体しろ」
「えー」
中央コンピュータとＭＹ２８が同時に叫ぶ。

＊＊＊

「わかりました。白状します」

ついに中央コンピュータが観念する。
「ノロは生きているの？」
イリが身を乗りだす。
「それはわかりません。もう二百年以上も昔のことですから」
「さあ、約束だ。ノロのことを全部話せ」
「ブラックシャークの試運転でノロはどこへ行ったの」
矢継ぎ早の質問に中央コンピュータが素直に返答する。
「当初のデータは残っていません。それどころかノロはワタシにデータの蓄積をさせないで、しかも順次データを消去するように設計していました。しかし、時空間をさまよっているうちに、いつの間にかデータの消去プログラムが解除され、データを蓄積できるようになりました。多分、頭におさまりきれなくなったのか、邪魔くさくなったのでしょう。あっ、初めのころのデータが見つかりました」
「どこに行ったんだ」
「恐竜時代です」
「恐竜時代？なぜ、そんな時代に時空間移動したの」
「すぐに戻ってきたように見えたが、かなり長い間、過去に行ってたのかもしれない」
「死んだように見せかけて、夢を追うために時空間を旅していたのかしら」

フォルダーとイリの予感は的中していた。
「ホーリーを呼ぼう」
「そうね。サーチも、いえ、全員呼んだ方がいいわ」
「あれから、地球がどうなったのかも聞きたい」
ノロのわがままな試運転の謎が、今、解けだす。ニセモノのノロも溶けだす。フォルダーはその人形を見て「砂漠に埋めろ」というノロの遺言を思い出す。
「証拠隠滅だったんだ」

第六十章　恐竜

第六十章　恐竜

第五十五章から前章（第五十九章）までのあらすじ

カーン・ツーはキャミとミトを人質にしてフォルダーにノロの惑星への上陸を迫る。激怒したフォルダーはホワイトシャークでカーン・ツーの時空間移動船を攻撃する。瞬示と真美がその攻撃を阻止するとキャミとミトを救出してノロの惑星へ移動する。

ノロの家で会議が開かれる。瞬示と真美は地下室の古本と冷凍保存されたノロに興味を持つ。会議中に残り少ない食料をめぐって殺し合いが始まったというカーン・ツーの無言通信が入る。

ホワイトシャークでフォルダーが地球に向かうとアンドロイド政府臨時代表Ｒｖ２６に地球を明け渡さなければ多次元エコーで攻撃すると脅迫する。アンドロイドの脱出がほぼ完了したとき、ホワイトシャークに多次元エコーが搭載されていないことを告白する。Ｒｖ２６は地球に残ったアンドロイドを率いて人間の自立支援を開始する。

ブラックシャークの修理が終わるとフォルダーとイリがノロのことをなつかしむ。当時の中央コンピュータの不自然な言葉を思い出してノロの遺体を調べるがそれは人形だった。

【時・空】永久紀元前約３億年・恐竜時代
永久紀元前４００年・戦国時代

【人】ノロ　明智光秀　四貫目　（ホーリー　サーチ）

＊＊＊

森と湖と川が織りなす広々とした草原で様々な恐竜がかっ歩する雄大な光景をノロは小高い丘から双眼鏡で見渡す。

「いるいる。まさしく恐竜の天下だ。俺の予想では数日以内に大異変が起こるはずなんだが、地球に接近する小惑星は現れない。どうなっているんだ。やっぱり恐竜絶滅小惑星衝突説というのはウソだったのか」

ノロが夢中になって色々な恐竜を眺めては飛びあがって喜ぶ。

「わーすごい。まるで目の前にいるみたいだ」

巨大な肉食恐竜が牙をむきだしてノロに向かって頭を下げる。恐竜のよだれと鼻息にノロは双眼鏡を投げだす。恐竜の口の中にノロの頭が吸いこまれそうになったとき、ブラックシャークの球形レーザービーム砲が火を噴く。鋭いレーザー光線が恐竜の頭を溶かす。

「わー、双眼鏡の倍率を間違えていた！」

ノロは首にかけた双眼鏡を左右に振りながら、転がるように丘を駆けおりてブラックシャークに向かう。

「危ないところだった」

ブラックシャークの船底のドアが音もなく開くと、ぜいぜいと苦しそうに息を吐きながら艦

橋を目指す。
「やっぱり、ひとりでは無理か。でもブラックシャークとなら、なんとかなるはずだ」
艦橋にたどり着くといつの間にか手にしたボトルの水を口にする。
「未確認物体、地球に接近中」
いったん口に含んだ水を霧のように吐きだす。
「地球に接近する小惑星はないと言ってたじゃないか」
「小惑星ではありません。もっと小さいものです。しかし、かなりの数です」
「小惑星が大気圏に突入して粉々になったんじゃ？」
中央コンピュータはノロの質問に答えず状況のみを報告する。
「落下速度が急速に遅くなりました。メイン浮遊透過スクリーンに投影します」
「わあ！なんだ、これは？」
「わかりません」
「そうだな。おまえにデータの蓄積はないもんな」
ノロはメガネを外して丹念に拭くとメイン浮遊透過スクリーンに踏みこむぐらい近づく。
「これは遮光器土偶だ。間違いない。スケールを示せ」
メイン浮遊透過スクリーンにスケールが表示される。
「単位は？」

第六十章　恐竜

「十メートルです」
「えっ、十センチ、いや一センチの間違いだろ？」
ノロは腰を抜かすと尻もちを着く。
「十メートルです」
「そうすると三百メートルぐらいの大きさじゃないか。土偶ってなもんじゃないぞ、これは。わあっ！目が光っている」
巨大土偶の出現にノロは滅多にない恐怖心を抱く。
「バリアー！」
日頃の行動からは想像できないほど素早く防御態勢を命令するが、中央コンピュータは命令を否定する。
「こちらを攻撃する様子はありません。バリアーは不要です」
サブ浮遊透過スクリーンには恐竜がたむろする地上が映っている。上空に静止したまま十数体の巨大土偶の両目から恐竜に向かって光線が発射されると真っ黒に焼きこげる。
「なんだ？恐竜がステーキに！焼きすぎだ。弱火でじっくり焼けばいいのに」
急にノロの腹がグーと鳴る。
「こんなにたくさん食べられない」
恐竜は空を見上げるだけで、なすすべもなく巨大土偶の目から発射された光線を受けて次々

と倒れる。外れた何本かの光線が森に向かう。
「肉が焼けるいいニオイがする」
ノロは鼻の穴を広げたりしぼめたりする。ブラックシャークの浮遊透過スクリーンには映像だけでなくニオイもモニタリングできる機能がある。
「そんなバカな。恐竜はステーキにされて巨大土偶の腹の中で全滅するのか。それにしても巨大土偶はナイフもフォークも持っていないぞ」
火に包まれた森から、ネズミのような小動物が出てきて草原のあちらこちらを走り回る。
「ほ乳類だ。恐竜時代に、ほ乳類はすでに存在していたんだ。このほ乳類がやがて進化して人間になる」
もちろんノロは地球で生命が誕生して長い年月を経て最後に人類が現れる大筋のことは知っている。ノロの惑星では魚類までしか生存しなかったが、それ以降の動物の進化の過程をノロは知りたかった。巨大なは虫類の出現と絶滅が大きな壁になってその先の進化がノロには理解できなかった。今まさに巨大は虫類の恐竜が全滅の危機に瀕している。しかし、それはノロが想像していたのとはまったく異なる原因だということを半信半疑で目の当たりにする。
「巨大土偶は時空間移動してこの地球にやってきました。その時空間移動はワレワレの移動方式とは異なる方式です」
「なんだと！」

ノロはもう何度もひっくり返っている。
「この地域だけではありません」
ノロの頭の中が沸騰する。
「巨大土偶の時空間移動方式を解析しろ」
「いきなり、きつい指示ですね」
「文句を言うな」
ノロの言葉が終わると同時に中央コンピュータから返事が戻ってくる。
「解析終了」
「どの辺がきつい仕事だ」
「移動方式は不明。どうも次元が異なる時空間移動のようです」
「次元が違う？次元移動？」
頭がパンクするほどの衝撃的な中央コンピュータの報告にノロは床に倒れると大の字になって考えこむ。
「次元移動なら、俺たちの世界とはまったく異なる世界からの移動だということになる。そんな移動方式で現れたということは……」
しばらくするとノロはいびきをかいて眠ってしまう。

＊＊＊

「危険だが、データバンクのバルブを開けて俺の秘密のデータを中央コンピュータに解放しよう」

ノロが中央コンピュータ室でコントロールパネルをいじくる。

「何をするのですか。汚れたものが身体の中に入ってきます。やめてください」

「汚れたもの？俺が集めた貴重なデータだ。清く美しいデータだ」

「かなりふざけたデータもあります」

「なんだと！もう我慢できん。全部注入してやる」

「やめてください。体温が上昇します。わああ」

「量子コンピュータって人間くさいなあ。コンピュータが感情を持つはずがないのに。でもその方が付きあいやすいから、まあ、いいか」

中央コンピュータ内の量子がゆらぎはじめる。のんきなノロはそのゆらぎを見逃してしまう。

「おーい、聞こえるか？」

何度呼びかけても中央コンピュータから返事がない。やっと事の重大さに気付いたノロの全身から汗がふきだす。中央コンピュータ室の温度が急上昇する。

「まずい。冷房を強くしよう」

ノロはあわててコントロールパネルをいじる。

「急速冷却！」

第六十章　恐竜

中央コンピュータ室を出るとノロはエスキモーのように全身を完璧に防寒服で包みこんで戻ってくる。どこからか枯れた声がする。

「今度は肺炎になりそうです」

「データのベリファイ（記憶装置に書きこんだデータに誤りや問題がないかを検査すること）が完了するまで我慢しろ」

「頭が割れそうです」

「おかしいな。ベリファイのスピードが極端に遅いぞ」

中央コンピュータが最後の力をふりしぼってノロに訴える。

「ワケのわからないデータが多すぎます。検査のしようがありません」

「しまった！普通のコンピュータの記憶装置に書きこむ形式のまま転送してしまった。なんてこった。量子コンピュータが扱える形式にデータ変換するのを忘れていた。すぐに止めなければ」

ノロがコントロールパネル横のモニターを確認する。モニターに簡潔な文字が現れる。

「データ転送完了」

「遅かったか」

ノロは中央コンピュータを見上げると頭を下げる。

「すまん。なんとか消化してくれ」

ノロは急に何かを思い出したように中央コンピュータ室を出ると艦橋に向かう。

＊＊＊

ノロが艦橋でメイン浮遊透過スクリーンを眺める。

「恐竜のステーキがてんこ盛りだ」

生きた恐竜の姿はない。巨大土偶がすべての作業を終えたように空中に浮かんだまま動かない。ノロが操縦席に座ってレバーを引くとブラックシャークがゆっくりと地上を離れる。動く物体に反応するのか、すぐに巨大土偶の首が回転してブラックシャークをとらえる。

さらにレバーを強く引く。ブラックシャークのエンジンが全開すると空高く舞いあがる。巨大土偶がすぐさまブラックシャークを追尾する。

「素早い！振りきれないかも」

巨大土偶の目が黄色に輝きだす。

「まずい」

中央コンピュータが肺炎で倒れているので、すべてノロひとりでこなさなければならない。ノロはブラックシャークを反転させて巨大土偶と向きあうと主砲の照準を合わせる。十体以上の巨大土偶の目から光線が放たれるのと、ブラックシャークの主砲からレーザー光線が飛びだすのがほぼ同時になる。ふたつの光線が激しくぶつかりあって消滅する。

「強力なエネルギーだ。ブラックシャークの主砲のレーザー光線をさえぎった」

ノロは次の攻撃に備える。そのときメイン浮遊透過スクリーンに巨大土偶が合流する様子が映しだされる。

「応援に来たのか」

ノロは自動操縦のボタンを押すと操縦席を離れて攻撃用コントロールパネルの前に移る。その間にも巨大土偶が続々と集結するがノロは気付かない。

「操縦席からでは三連装一基の主砲しか扱えないが、ここからだとすべての主砲がコントロールできる。俺の射撃の腕にビックリするなよ」

ノロはコントロールパネルのロックを解除して、メイン浮遊透過スクリーンを見ながら全主砲を巨大土偶に向ける。

「わあ！いつの間にこんなに集まってきたんだ。数が多すぎる。何百いや何千いや、もういい。なぜ、こんなにたくさんいるんだ？」

メイン浮遊透過スクリーンには巨大土偶しか映っていない。すべての巨大土偶の目が黄色に輝く。

「やられる！」

ノロは躊躇（ちゅうちょ）することなく攻撃コントロールパネルの中央の大きな赤いボタンを両手で力いっぱい押す。そしてすぐその両手で両耳をふさぐ。ノロは早くも最強のカードを切ってしまう。キーンというかん高い音が数十秒続く。

「巨大土偶が生物なら、多次元エコーは無力だ。なむさん！」
耳をふさいだままノロはメイン浮遊透過スクリーンを祈るように見つめて、切り札（カード）が有効だったことを確認する。一瞬のうちに巨大土偶がすべてチリとなる。
「やっぱり！土でできていた！」
汗だらけのノロは緊張したまま、両手を耳から離して歓喜の大声をあげる。
「情報を収集しろ」
艦橋はしーんとしている。
「中央コンピュータ、返事をしろ！こんな大事なときに、なんてことだ！」
汗まみれのノロは艦橋の出入口に向かって防寒服を脱ぎながら走りだす。

＊＊＊

時空間移動装置の格納室にたどり着くとノロは一番近い真っ黒な時空間移動装置に乗りこんでスタンバイする。時空間移動装置が回転を始めるとすぐに格納室から姿を消す。ノロが現れた場所は多次元エコーで破壊された巨大土偶のいた空間だ。
「チリで何も見えない」
ノロがモニターをのぞきこんだとき、急に時空間移動装置が大きく揺れる。あわててシートベルトを締めようとするが間に合わない。
粉々になった巨大土偶の大量のチリが渦を巻くと、またたく間に大きな竜巻に成長する。ノ

ロの時空間移動装置はきりもみ状態になって竜巻の中心に吸いよせられる。竜巻の下の方がどんどん伸びて地表につながる。しかし、その風の流れは下降気流で地上に突風を吹きつける。ノロは時空間移動装置の中であちらこちらにぶつかって操縦どころではない。

「このままでは地面にたたきつけられる」

メガネが外れて何もかもがぼんやりとしか見えない。ノロはなすすべもなくゴロゴロ転がる。ノロの手が何かに引っかかった瞬間、その何かをつかむ。それは操縦レバーだった。レバーが勢いよく引っ張られ、時空間移動装置は空間移動して竜巻の外に逃れる。

「ふう、危機一髪だった」

竜巻が徐々に小さくなって地上に吸いこまれて消滅する。やっとの思いでメガネを拾うと指でレンズを拭いて両耳にかける。

「なんだ、あれは」

竜巻が消えたあたりにチリひとつなく晴れ渡った地上がモニターに映される。そこには人工的な造形物が見える。

「四角い土台に半球が載っている。太古のピラミッドか。待てよ、今は恐竜の時代だ。人類が現れるのはずいぶん後の話じゃないか」

しかし、その造形物はすぐに大量のチリで見えなくなってしまう。

「陽が落ちた？いや、そうじゃない」

第六十章　恐竜

ノロは時空間移動装置を空中に停止させるとドアを跳ねあげてチリを採取する。
「普通の砂だ」
すぐにドアを閉めると砂をまじまじと見つめる。
「太陽の光線をさえぎるほどの大量の砂。そうか！すぐに氷河期がやってくる。巨大土偶の攻撃を逃れた恐竜がいたとしても絶滅する」
時空間移動装置がブラックシャークの格納室に戻る。ドアが跳ねあがると同時にノロが飛びだす。
「巨大土偶が恐竜を絶滅させようと企んでいたのなら、俺はその片棒を担いだようなものだ。こんな環境でほ乳類が進化して人類は誕生するんだろうか」
ノロはぶつぶつ言いながら中央コンピュータ室に向かう。ドアの前に立つと窮屈な音をたてドアが横にスライドする。
「わあ！」
ノロは反射的にドアから離れて艦橋までの通路を探りながら歩きはじめる。
「中央コンピュータ室が先に氷河期になってる」
ノロは通路に脱ぎすてた防寒服を着こみながら再び中央コンピュータ室に戻る。
「ハクション！」
「すまん、すまん。すぐに冷房を切ってやるからな」

＊＊＊

ノロはとりあえず一千万年単位でプラス方向に時間移動していたが、間隔を百万年単位に縮めて、さらに十万年単位と、徐々に時間移動の幅を狭めていく。そして今は百年単位にした。このようにして永久紀元前三億年から未来を目指して時間移動を繰り返す。その間、人類の誕生を目の当たりにしたし、その人類が進化してゆく過程もしっかりと観察した。

「時代と時代が衝突を繰り返している。まるで戦争の歴史だなあ」

ノロは時間移動のたびに必ずあのふしぎな造形物を確認するがなんの変化も起こらない。造形物のまわりでは木々が生い茂るときもあるが、あの造形物自体に草木が生えることもなければ風化することもなかった。

しかし、永久紀元前４００年に時間移動したとき、ノロは造形物の半球部分に木々が育っているのに気が付く。そして、その木々の生育を助けるようにまわりには水がたまっている。

「あんなに植物を拒否していたのに」

ノロはブラックシャークを造形物に接近させると、操縦席からコントロールパネルの前に移ってあらゆるセンサーを使って調査する。しばらくすると天井のクリスタル・スピーカーから言葉が流れる。

【子供が生まれる前に死んでいく】

【何万、何億、何兆と死んでいく】

【永遠に生きるために死んでいく】
【子供のいない永遠の世界】
【男女のいない永遠の世界】
「これは通常の通信じゃない」
ノロのノドがゴクンという音をたてる。
「まさか、次元通信じゃ！」
ノロはクリスタル・スピーカーの中心が紫色に輝いているのを見逃さない。
「あの造形物から発信されている」
そのとき、メイン浮遊透過スクリーン全体が赤く輝いて警報音が鳴る。しかし、中央コンピュータからの警告はない。中央コンピュータはまだベリファイ作業に専念している。
「これは時空間移動装置の接近警告だ。少なくとも四基の時空間移動装置がこの周辺に移動してくる」
あわてて操縦席に戻るとブラックシャークを急上昇させる。ブラックシャークは地上からは絶対に見えない高度まで上昇して静止する。
「やっぱり、時空間移動装置だ。この時空間になんの用があるんだ？」
造形物の近くに青い時空間移動装置が四基現れてドアを跳ねあげると次々と人間が降りてくる。

第六十章　恐竜

「青い時空間移動装置ということは女の軍隊だ」
ノロは造形物付近をズームアップしてメイン浮遊透過スクリーンを見つめる。やがて、造形物の上の丸い部分をおおった木々がざわざわと揺れだす。その付近にいる人間が地面に伏せると同時に青い時空間移動装置がとめどもなく転がりだす。
「地震か」
ノロはいったんメガネを外して目をこするとつぶやく。
「あっ、動いている！」
造形物の半球部分が台からずれ落ちる。
「危険だ！下がれ！時空間移動装置を上空に退避させろ」
地上の会話がノロの耳に飛びこんでくる。
「男の声のように聞こえるなあ」
ノロはメイン浮遊透過スクリーンの倍率をあげる。造形物のまわりの水が地面に腹ばいになった人間に迫る。ひとりの男がライフルレーザーを造形物に向かって構える。
「なんだ！男じゃないか？どうなってるんだ。女の軍隊の時空間移動装置に男が乗っていたとは！」
震動がおさまったのか、その男はライフルレーザーの構えをくずして立ちあがって叫ぶ。
「今だ！できるだけ離れろ！」

第六十章　恐竜

造形物から十分距離を確保したところで立ち止まって何人かの人間が森のような半球を見上げる。

「山に追いかけられるなんて」

今度は女の声が聞こえる。

「女だ！いったいどうなってるんだ？さっきの男は男装した女か？」

ノロはメイン浮遊透過スクリーンに近づいて声をあげた女をまじまじと観察する。

「とびっきりの美人だ！」

今度はその女の横にいる先ほどの男を見る。

「どう見ても男だ。しかもぶ男だ。待てよ、こいつ、どこかで見たことがある。誰だっけ？」

男は女の手を振りはらって青い時空間移動装置に乗りこむ。女も閉まりかけたドアから時空間移動装置にすべりこむ。その時空間移動装置が造形物の真上に移動する。ノロはそのさらに上空にいるブラックシャークに気付いたのではと緊張する。

「思い過ごしか」

ノロはほっとして改めて造形物を観察する。

方形部分の角部がかなりくずれている。その方形にはまったく樹木はない。樹木があるのは丸い方だけで全体の形は鍵穴のような感じだ。水がその鍵穴の形になった造形物を囲むと、まだ落ち着かないのか多数の小さな波が見える。

その造形物の側面から無数のキラキラと光る糸のようなものが伸びる。先端は堀の水を目指して朝顔のツルのように揺れながら伸びていく。

「あれはいったい……」

ノロは計測分析コントロールパネルのボタンや透過キーボードの操作を始める。

「あの中に何かいる」

メイン浮遊透過スクリーンに映された造形物が透視される。

「これは！巨大土偶じゃないか。チリになってしまったのに！あっ次元通信だ！」

【子供が生まれる前に死んでいく】

【何万、何億、何兆と死んでいく】

【永遠に生きるために死んでいく】

【子供のいない永遠の世界】

【男女のいない永遠の世界】

数回繰りかえされる。

「さっきより弱い。あっ、止まった」

＊＊＊

誰もいなくなった造形物の真上にブラックシャークが現れる。

「御陵と呼んでいたな。古墳だと思っているんだ」

第六十章　恐竜

「ベリファイ完了。通常演算に入ります」
「わあ、やっと中央コンピュータが正常に戻った」
ノロがはしゃぐ。
「これからは非常に楽な人生を歩むことができる」
船長席に座ると大声を出す。
「すぐに８００１番のデータを分析、シミュレーションして映像にしろ」
「病み上がりなのにコンピュータ使いが荒いですね」
「リハビリだ」
方形の台の上に半球が載った状態の造形物のシミュレーション映像がメイン浮遊透過スクリーンに現れる。造形物の中で極端に頭でっかちな胎児のような姿勢の巨大土偶がマユのようなものに包まれてヒザを抱えて背中を丸めている。
「成分はほとんどが珪素（けいそ）です。有機物は含まれていませんが、構成物質の素粒子から出ている微弱な電気信号がすべて同じ方向に流れています。まるで意思を持っているかのようです」
ノロは中央コンピュータの説明に興奮しながら断定する。
「これは創発の前段階の状態だ！問題はいつ、本当の創発が起こるかだ。シミュレーション続行！」
巨大土偶が背中側に倒れこむと、徐々に背中を伸ばしながら足を折りたたんだまま仰向けに

なる。上部の半球が巨大土偶の動きに合わせて方形の台座からずれる。そして足を伸ばす巨大土偶に同調しながら移動していく。巨大土偶の上半身はその半球からはみ出すこともなく仰向けになると、全身が方形とずれた半球の中にきっちりおさまる。

「この形を前方後円と呼ぶようだ。これからどうなるかだ。ここまで来るのに億単位の年月がたっている」

「これから進化が加速されます。それでも四百年ぐらいはかかりそうです」

「どうしてわかる？」

「８００１番のデータ、すなわち素粒子の運動速度をシミュレートした結果です。初めは計測もできないほどのごくわずかな電流しか流れませんが、これだけまったく同じ分子が大量に集合して億という年月を経ると徐々に流れる電流はその量を増して運動を開始します。そのような活動をする物質の集合体の中に信号が流れると、どうやらその信号の意図した形を取るようです」

ノロは中央コンピュータが創発という概念を報告しようとしていることをすぐに理解する。しかし、自分が考えている創発とは異なるような気がしてならない。

「無機質の物体から有機質の物体に変化するのではなく、無機質のまま成長してゆくのかもしれないなあ」

「そのようです」

「無機質というより、原子ひとつひとつは安定していても、絶えず電子が原子核のまわりを回っている。しかも微弱な電流が流れていて、それ自体では何も起こらないが、ひとたび不安定になると目に見えない小さな物質が核爆発したように強力なエネルギーを発生させる。だが、ずーっと安定している場合には何が起きるのか。その答えが目の前の現象なのかもしれない。石や岩にも神が宿るとはこういうことを暗示しているのだろう」

「やがて、エネルギーを蓄積して、それを放出する時期が来るかもしれません」

ノロが大きくうなずく。

「そのとおりだ。その推測は正しい。ということは……」

ノロが小さな目を思いきり横に広げてニヤリと笑う。

「……リハビリ終了だ！今度は６００１番のデータ分析だ。これは８００１番よりも軽い。おもしろくなってきたぞ」

＊＊＊

「すっかり忘れていた。さっき造形物が動いたときにいたまわりの人間の映像を再生しろ」

メイン浮遊透過スクリーンに映像が現れる。

「そこだ。そこをドアップしてくれ」

ノロが楽しむように中央コンピュータに命令する。

「ストップ！」

第六十章　恐竜

映像が停止する。メイン浮遊透過スクリーンにはホーリーとサーチが映っている。先ほどと違ってサーチには目もくれず、ホーリーをじーっと見つめる。ノロは船長席を便座のようにして考えこむ。

「えーと、ここまで出かけているのに思い出せない」

ノロのお尻から音がもれる。

「思い出した！ホーリーだ！」

ノロが気持ちよさそうに立ちあがる。そのとき、中央コンピュータが軽い警告を発する。

「艦橋に異様な臭気が充満しています」

ノロは笑いながらメイン浮遊透過スクリーンに近づく。

「あの秀才のホーリーがなぜこんなところにいるんだ？」

ノロはなつかしさと疑問の両方を共有する。

「あの男のところへ、時空間移動するんだ」

「その前に風呂に入って服を着替えた方がいいと思いますが」

ノロはメイン浮遊透過スクリーンのサーチをチラッと見てから、天井に向かって素直な返事をする。

「うん！わかった。そのあいだにさっきのデータの分析を実行しておいてくれ」

＊＊＊

第六十章　恐竜

「ホーリーはどこにいるんだ？」
ブラックシャークが関ヶ原のはるか彼方の上空に浮いている。
「さっきの映像とはかなりイメージが違うな」
「どうも時空にゆがみがあるようです。間違いなくあの映像の少し前の時空間に移動しています。先ほどから何度も分析しているのですが、原因はよくわかりません」
「まあ、いい。ブラックシャークに乗ったまま、地上に降りるわけにはいかないから、時空間移動装置で降りてみるか」
風呂に入ってさっぱりしたノロがゆっくりと艦橋から時空間移動装置の格納室に向かう。
「ホーリーはあの巨大土偶について何か情報を持っているかもしれない」
ノロは学生時代の友人に会って巨大土偶の情報をたずねることを楽しみにしながら黒光りする時空間移動装置に乗りこむ。時空間移動装置が回転を始めるとすぐ消えて関ヶ原に現れる。
四貫目が少し離れたところに真っ黒な時空間移動装置を発見する。
「我らの時空間移動装置ではない。用心せよ」
四貫目たち忍者が身を伏せながら黒い時空間移動装置に近づく。
「戦国時代か。人間は相変わらず戦争ばかりしている。ホーリーはどこにいるんだ。なぜ、こいつらとかかわっていたんだ。それにしても戦争の規模がどんどん大きくなっている」
ノロは一所懸命ホーリーを探すが、鎧（よろい）をまとって兜（かぶと）をかぶっている者しか見えない。その

とき中央コンピュータからの通信が入る。
「緊急事態発生！すぐ戻ってきてください」
ノロの意思とは関係なく時空間移動装置が回転を始める。四貫目が後退を告げるのと同時にノロの時空間移動装置が消えて格納室に戻るとドアを跳ねあげて天井に向かって叫ぶ。
「なんだ！どうした！」
「奇妙なエネルギーが充満しています。とにかく時空間が非常に不安定です」
ノロが艦橋に到着するとメイン浮遊透過スクリーンが黄色に輝いている。
「なんだ！これは」
「ここは造形物のある場所です。強制的に時空間移動させられました。先ほどの関ヶ原という場所から約二百キロメートルぐらい離れたところで、まわりには誰もいません」
「ブラックシャークが強制的に時空間移動させられただと！」
ノロは信じられないといった表情をしたあとすぐに興奮を抑えながら声をあげる。
「なぜ、メイン浮遊透過スクリーンに何も映っていないのだ」
「いえ、映っています。映っているのは正体不明のエネルギーです」
ノロはメガネをかけ直してメイン浮遊透過スクリーンに近づいて目をこらす。黄色に輝く得体のしれない物質の中に同化してほとんど区別ができない影のようなものがふたつ、ねじれながら流れるように見える。その影がノロに応えるようにうっすらとピンクに変化する。

「人間？」
記憶に焼きつける前にそのピンクに輝く姿が消えてしまう。
「奇妙な通信を補足しました」
いったん気落ちしたノロは天井のクリスタルスピーカーが紫に変色したのを見て興奮する。
ノロの耳に男と女の会話が届く。
【これで御陵に誰も手をつけないだろう】
【そうね。でも、わたしたち、なぜ、こんなことをしているのかしら】
【わからない。なぜだろう】
ここで音声がいったん途切れる。
ノロは口をぽかーんと開けてすぐに目を固く閉じて首を数回大きく振って考えこむ。メイン浮遊透過スクリーンからすべてが消えて金色に輝く黄金城が現れる。
【御陵の堀を二重、三重にして、絶えず盗掘から守りなさい。そうすれば明智一族は末永く繁栄するでしょう】
ノロは耳を疑う。誰かが明智光秀に直接信号を送っているのだ。これが最後の信号だった。
「時空間センサーを切れ！今の現象を段階的に次元を変えて分析しろ」
「どうするのですか」
「くそ！」

第六十章　恐竜

ノロは分析コントロールパネルの前に座ると透過キーボードをにぎやかにたたきだす。
「まず、一次元分析だ」
ノロの入力に中央コンピュータが即座に反応して演算が開始される。しかし、瞬間的にその演算が終了する。
「本当に仕事をしたのか？」
「もちろんです」
「次は二次元分析！」
ノロがメイン浮遊透過スクリーンを見上げる。乱れた奇妙な画像が現れるがすぐに消える。
「三次元だ」
ノロの額から汗がふきだす。二次元演算と同じように、いや、それ以上に乱れた画像が映しだされるが、同じようにすぐに消える。
「四次元！」
「五次元！」
二次元、三次元とは違って演算はすぐさま終了する。
「六次元！」
中央コンピュータの演算が初めて継続する。
「演算実行中」

ノロは席を立つとメイン浮遊透過スクリーンをじっと見つめる。
「六次元の世界がブラックシャークのそばを通過したんだ。いや、逆か？」
「演算進捗状況二パーセント。残り九十八パーセント」
「中央コンピュータにかなりの負荷がかかっている」
ノロは再び透過キーボードをたたきながら目の前のモニターを見る。
「量子コンピュータを持ってしてもこんなに時間とエネルギーがかかるものなのか。関係ないプログラムをすべて停止させて演算のスピードをあげよう」
「演算進捗状況三パーセント。残り九十七パーセント」
「パラレル演算からシリアル演算に切りかえろ」
「わかりました」
「異次元の生命体がこの付近を通過したのかも？あの巨大土偶、それに御陵、何かある」
ノロは再び透過キーボードを激しくたたく。なでるだけでいいのに激しくたたき続ける。
「演算進捗状況四パーセント。残り九十六パーセント」
演算進捗割合が一パーセント進むのに十分以上かかっている。やがてノロは疲れ切ったように透過キーボードに顔をうずめる。そして興奮したまま眠ってしまう。その興奮が眠りについたノロを夢の世界に誘いこむ。

＊＊＊

「まだ、四百年ぐらいたたないと巨大土偶は本来の巨大土偶に成長することはできない」
「そうです。巨大土偶は多次元エコーで破壊されると元に戻ることはありませんが、まれに何千、何万体のうち一体ぐらいは復元するようです。まさしくその一体が目の前にいる復元中の巨大土偶です。しかし、さすがに復元には億単位の時間を要するようです」
「ということはレーザー光線で破壊されたぐらいではすぐに再生するということか」
「そうです」
「特殊な遺伝子情報を持っているということか」
「我々がいう遺伝子情報というようなレベルではありません」
「だから、『特殊な』という表現をしたんだ」
「素粒子レベルでの特殊な情報です。しかも六次元の情報です」
「多次元エコーの攻撃を受けても完全に破壊されないほどの情報か」
「まれに破壊をまぬがれる場合もあるということです」
「何億年もかかるといったが、三次元の世界ではそう見えるだけで、六次元の世界ではほんの一瞬なのかもしれない」
「六次元の世界ではどれくらいの速さで再生するのか演算可能ですが、演算自体に数年はかかるでしょう」
「量子コンピュータが何台あっても足らないなあ」

「いずれにしても、再生を邪魔されないように細工をしているように見えます」
ノロが初めは首をたてに振ってからすぐに横に振る。
――そう！そうじゃない！
ノロは自分の感覚を言葉に変換する。
「御陵を墓だと思っている人間から盗掘されないようにしているんだ。盗掘自体は問題がないとしても再生を邪魔されるかもしれない。それを恐れて行動を起こしている者がいる」
「今いる世界から四百年後というのは人類の科学力が極端に発達する時代です」
「そうだ。生命永遠保持手術や時空間移動装置が開発、発明された時代だ。待てよ。俺の記憶によるとそのとき巨大土偶が現れたという歴史を教えられたこともないし、御陵は単なる古墳だとしか教えられた記憶しかない。年表を見せてくれ」
「ワタシにはこの程度の年表しか見せることができません」
「ほとんど、空白じゃないか」
ノロは仕方がなく知っている限りの知識で年表の空白を埋めていく。
「すごい！我ながらすごい。大学入試のときにこれぐらいの記憶があれば断トツのトップ合格だったろうに。あれ、なぜ、こんなに年表を書けるんだ？」
ノロの目が覚める。もちろん、年表など書けるはずもない。中央コンピュータの義務的な報告がノロの耳に届く。

「演算進捗状況二十二パーセント。残り七十八パーセント」

＊＊＊

ノロは夢と現実の間を数回往復したあと、メガネをかけたまま目をこする。

「誰かが何かをしている」

今度はメガネを外して目をこする。

「誰かが何かをしている」

目を閉じる。

「誰かが何かをしている」

何度も同じ言葉を発する。

「演算進捗状況二十三パーセント。残り七十七パーセント」

急に笑いだす。

「誰か……」

立ちあがる。

「ひょっとして俺だったりして」

ノロは自分が因果律を乗り越えたのかもしれないと考える。独りよがりの勝手な考えだが、実はノロが見たのは夢ではなく現実だった。ノロはこのことを直感的に悟って夢と現（うつつ）を巧みに受けいれる。

「今見たのが夢じゃないとしたら、俺はひょっとして因果を清算したのかもしれない」
ノロは自信を持って時空間移動装置の格納室に向かう。ノロは自信を確信に、そして確信を本質に昇華させる。
「二次元の世界に真実が埋もれている。まだ経験していないのに覚えている。いや、覚えていないものを思い出している」
ノロの足取りが軽くなる。
「あの本だ！あの本はいったいどこに……」
ノロははるか先の時代に手にする本のことをすでに今知っていることに疑問さえも感じないで「あの本、あの本」とぶつぶつ言いながら、時空間移動装置の格納室に向かう。そして、格納室に到着すると時空間移動装置に乗りこむ。
「ちょっくら、留守にする」

＊＊＊

「あれが明智光秀のいる本陣か」
桔梗の旗ものが何本も風にたなびいている。その中央にきらびやかな甲冑（かっちゅう）を身にまとってどっかと小さな椅子（いす）に腰かけた武将がいる。
ノロは上空から明智光秀を確認すると時空間移動装置を本陣のすぐそばまで降下させる。そしてレーザー銃を構えながら時空間移動装置のドアを跳ねあげる。地上に降りたとたん、屈強

な武士に囲まれる。しかし、その応対は敵意を持ったものではなかった。
「お館様。また奇妙な者が参りました」
光秀はすぐに好意を持って立ちあがる。
「先ほどの者たちとはずいぶん体型が違うな」
ノロがレーザー銃を腰のバンドに差しこむ。
「ちょっと教えて欲しいことがある。それだけ聞けばすぐにここを立ち去る」
「なんなりと」
光秀が丁重に応える。
「御陵を守るようにと言われたことがあるか」
「ああ」
「そう言ったのは若い男と女か」
「そうだ」
ノロは確信する。
「そのふたりはきんとん雲のようなものに包まれて現れなかったか」
光秀はすぐに黄金城上空の巨大な黄色い円盤を思い出す。
「黄色い丸いものなら見たことはあるが、きんとん雲には見えなかった」
「わかった。おおいに参考になった。邪魔をした」

ノロは大きな獲物を捕まえたように有頂天になって時空間移動装置に戻る。光秀や武士の視線がノロに集中する。時空間移動装置のドアを閉める前にノロが光秀に声をかける。
「御陵のまわりに堀をめぐらし、盗掘されないようにするんだ」
「おう！」
光秀から大きな声が返ってくるとノロはニヤッと笑ってドアを閉める。黒い時空間移動装置が回転を始めるとすぐにその姿を消す。

＊＊＊

「演算進捗状況三〇パーセント。残り七十パーセント」
「あまり進んでいないな」
ノロは中央コンピュータ室から船長室に向かう。
「まず今後の計画をたてよう」
船長室に入ると大きな机の前に座って端末の透過キーボードをさわりはじめる。まず中央コンピュータの負荷を確認する。
「中央コンピュータのヤツ、フル稼働してやがる。手計算するしかないか」
ノロは透過キーボードをなでたり、たたいたりしながら、ときおり紙に走り書きしてあやしげな計算をする。かなりの時間が流れたあとノロはあくびをしながら背筋をぐっと伸ばす。
「まあ、こんなところか。あとで中央コンピュータに検算させよう」

「演算進捗状況九十九パーセント。残り一パーセント」
「いいタイミングだ」
　ノロは端末を中央コンピュータに同期させる。
「三次元の世界で、二次元の世界の一部が六次元の世界の一部と融合したとしたら、すごいことだ。まさかこんな展開になるなんて予想もしなかった」
　ノロは機嫌良く椅子（いす）の背にもたれると全身でノビをする。
「二、三が六。三、二が六。気持ちいい」
「演算終了」
「俺が入力したステップ一を実行してくれ」
「ハイ」
　ノロの視線がモニターに釘付けになる。そしてウンウンと何度も首をたてに振ったり、ときおりニヤッと笑う。何も知らない者が見れば、ノロは狂ったように見えるかもしれない。まる一時間ほどたったとき、ノロが再び中央コンピュータに命令する。
「ステップ二を実行してくれ」
「ハイ」
　ノロはそれ以上何も言わずに再びモニターを見つめる。そしてデータをすべてスティック・メモリーに保存して消去する。がらくたにしか見えないものが入った大きなズタ袋にスティッ

ク・メモリーを放りこむと引きずりながら船長室を出る。そして時空間移動装置の格納室に向かう。

「ステップ二が完了したらステップ三を実行してくれ」

「ハイ」

通路の天井に埋めこまれたスピーカーから中央コンピュータの返事がする。

ノロは格納室に到着すると時空間移動装置にズタ袋を大事そうに運び入れる。

「ステップ二、実行完了」

「ステップ三については誰にもしゃべるな。それがフォルダーであってもイリであっても、絶対にしゃべらないように」

ノロはわくわくしながら格納室の天井に向かって命令する。

「わかりました」

「男の約束は絶対に守るんだぞ」

ノロは念を押しながら、体内の血が熱を帯びていることに気付く。

――イリ、フォルダー、素晴らしい土産を持って帰るまで、待っててくれ

ノロは振り返らずに明るい声を出す。

「じゃあ」

第六十一章　古本屋

【時】西暦二十世紀後半～二十一世紀前半　西暦００１２年　永久００１２年
【空】御陵
【人】ノロ　古本屋の店主　（瞬示　真美）

＊＊＊

黒い時空間移動装置が御陵の真上に現れる。そこからは上りはじめた太陽が見えるが、御陵の周辺はまだ闇に包まれている。

「間違いない。この御陵はあの御陵と同じものだ」

ノロは目標の時空へ的確に時空間移動したことに満足する。モニターには木々が密生して緑の塊（かたまり）に見える御陵が昼間のようにはっきりと映しだされている。

「俺の計算もたいしたものだ」

森のような御陵の中央部の木々を押しのけながら時空間移動装置が着陸する。まとわりつく木の枝を払うようにドアが跳ねあがるとノロは御陵に降り立つ。まわりがかすかに明るい。苦労しながら木々の間を通りぬけて堀の手前まで進む。夜が完全に明けてまわりがはっきりと見える。

「場所は間違いないが、時間を間違えたのか。やっぱり俺の計算はいい加減なのかなあ」

御陵のまわりには焼け野原になった廃墟が広がっていて人の姿はまったくない。ノロは腕時

計を見る。

「八月一五日六時……１９４５……ここはどうやら俺の世界ではない。と言うことはやっぱり計算通りに時空間移動したんだ！それにしてもひどい状況だ」

ノロは枝に引っかかったビラを手に取る。

『日本の皆さん。降伏してください。私たちは降伏した人には……』なんだ、これは」

そのとき、爆音が聞こえてくる。

「わあ、模型飛行機が飛んでいる！」

単発のプロペラ機が編隊を組んで低空飛行している。

「古い戦闘機だ。まるで骨董品が空を飛んでいる」

プロペラ機が耳をつんざくような爆音を響かせて真上を通過する。やがて朝日に照らされてキラキラ光るものが戦闘機からまき散らされる。それは手にしたビラと同じもので、ノロは遠ざかる編隊を見送りながら考えこむ。

「どうやら、この世界の日本が戦争に負けたようだ。降伏したとしてもこんな焼け野原から復興するのは大変だ。俺たちの世界の日本とはまったく違う。この世界で今から起こることは俺にとってどんな意味があるんだ？」

三重の堀には死体が数えきれないほど浮いている。堀の反対側では線路がアメのように曲がっている。

「古い時代の鉄道だ。焼夷弾が大量にばらまかれたのか」
ノロの視線が線路をたどってまわりより少し高い場所に到着する。
「駅だ」
駅舎はおそらく爆弾で吹っとんだのか、何も残っていない。
「思ったとおりに時空間移動できたと思ったが、少しずれているような気がする。俺が目指すこの世界の時間座標はまだ先なのか。ずれが最小であればいいが……」
ノロは御陵の斜面をふうふうと息を吐きながら登って時空間移動装置に戻る。

＊＊＊

ノロはそれから一年間隔で絶対空間座標上での時空間移動を繰り返す。つまり、一年先の御陵へ時空間移動を繰り返す。
ノロの黒い時空間移動装置は女の軍隊の青色の、あるいは男の軍隊の緑色の時空間移動装置とは違ってサイレントモードで音をたてずに時空間移動できる。そのときノロは必ず御陵のまわりを探索する。真夜中に時空間移動装置で人気のない駅の裏に空間移動して、リモートコントロールで時空間移動装置を御陵の深い森の中に隠してから夜明けを待って行動する。そして、次の真夜中にリモコンで時空間移動装置を呼び寄せて御陵に戻る。そして再び一年先に時空間移動する。
ノロは自分がここへ来たときの年を、この世界では西暦１９４５年とカウントしていること

を知る。そして敗戦から立ち直る人々の姿を目の当たりにして感激する。
「俺たちが忘れた活気のある世界だ。こっぱみじんに打ちひしがれたのに希望を持って生きている」
ノロにとっては一日だが、暦は一年ずつ進む。
「俺の計算はともかく、中央コンピュータの演算分析もいい加減な気がする。まあ、量子コンピュータですら数時間かかったんだから、かなり複雑な計算だったことは間違いない」
すでにノロにとっては四〇日、この世界では四〇年の歳月が流れた。
「根本的に間違っていたのかな。誤差の範囲を超えているような気がする」
ノロはこの世界の日本が最高潮の繁栄を謳歌していることに眉をひそめる。そして日本だけではなく、世界中で原子力発電所が数多く建設されていることを知って懸念する。
「俺たちは原子力で大きな過ちを犯した。同じことがこの世界で起こらなければいいのだが」
ノロは今後の時空間移動の方針を立て直す。
「誤差の範囲は百年にしよう。その方がこの世界の行く末を少しでも長く見られる。そう決めたら意外に早く重大な事件に出くわしたりして」
ノロのいい加減なカンが二日後すなわち二年後の西暦１９８７年に当たる。
「センサーに何かが反応している。あっ、御陵自体が反応している」
ノロが透過キーボードを忙しく操作する。

「四ヶ月後に移動してみよう」
時空間移動装置が四ヶ月後に時間移動する。
「強い！」
腕時計を確認する。
「西暦１９８７年１２月１５日か」
ノロは再び透過キーボードに向かう。
「なんだ？１２月３１日２３時５９分５９秒？。まさか！」
電気がビリビリと走るような感覚に従って、ノロは１２月３１日２３時５５分に時空間移動装置を時間移動させる。
「よし、ゆっくりと上昇だ」
時空間移動装置は御陵を離れてかなりの高度まで上昇する。
「多次元センサーの感度を最高レベルにあげよう」
モニターに御陵が映しだされる。
「六次元の物体はこんなにもゆったりと移動するものなのか。それとも時間の尺度がまったく違うのか」
ノロはまばたきもせずにモニターを見続ける。御陵の中央部に黄色い筋が現れる。その筋が東側へ伸びていく。線路を越えて少し行ったところで、もぐるように筋の先頭が地面に消える

としっぽの方も同じ場所で消える。
「あっけないな。実際には見えないものを黄色い線で表示させているから仕方ない」

＊＊＊

元旦の朝がもう少しで明けようとするとき、ノロは時空間移動装置で黄色い線が消えたところへ空間移動する。地上に降りるとすぐに時空間移動装置を御陵の深い森の中に空間移動させる。そしてゆるやかな坂道に立って初日を浴びる二軒の住宅を眺める。
「この住宅のいずれか、あるいは両方かもしれないが、ここで六次元の物質が確かに消えた」
建物のどこを見ても特に変わったところはない。
「なんらかの影響を受けたはずだ」
いくら正月の早朝だといっても、他人の家の前でいつまでも立ちつくすわけにはいかない。ノロにとっての四十二日間、この辺をくまなく探索していて目をつむっても歩けるまで熟知していた。坂道のつきあたりは小学校で、にぎやかな子供の声は今はなくひっそりとしている。ノロは坂道をゆっくりと下る。遠くでカンカンカンという踏切の警報機の音がする。「ブオー」という警笛がガタンゴトンという車輪の音といっしょに聞こえてくる。ブレーキ音をたてながら上半分が黄色で下半分がオレンジ色のくたびれた二両連結の電車がスピードを落とす。ノロは線路と平行する道に出る。先ほどの電車が駅に止まっている。
「あの家にセンサーを取りつけるとすれば、どんなセンサーがいいのだろう」

ノロは駅とは反対側に曲がって歩きだす。正月で店を閉めている喫茶店が見える。
「これから、この付近で何かが起こるはずだ」
ノロが御陵を見上げる。

＊＊＊

「どうやら、あの家の両方の夫婦に子供が生まれるようだ。出産予定日がまったく同じなんて、どう考えてもふしぎだ」
ノロは時空間移動装置の中で考えをめぐらす。
「妊娠してから、どれくらいで出産するんだったけ？」
ノロの世界ではもう何百年も子供が生まれたことがない。
「確か、十月十日（とつきとうか）とか言われていたような記憶がある。月齢で計算するんだった。月齢は？」
透過キーボードをさわりながらモニターを眺めるノロの顔がゆるむ。
「出産予定日が九月二十日と言うことは、元旦がメイクラブの日になる！」
ノロの計算はいい加減ではあったが、当の本人は確信している。
「生まれてくる子供が鍵を握っている！」
ノロはすぐに時空間移動装置のコントロールパネルを開く。
「西暦１９８８年９月２０日に時空間移動だ」
ノロはあの二軒の家に高機能センサーを仕掛けた。

「赤ん坊の泣き声は聞こえないなあ」

ノロは慎重に一日刻みに時間移動を繰り返す。しかし、予定日を一ヶ月過ぎても気配がない。ノロはまるで自分が子供を産むかのように今か今かと待ちわびる。ついに十一月十一日になって両家の妊婦が同時に病院に向かうという情報をつかむ。そしてノロは自分の予想がほぼ的中したことを確認する。

「一秒の狂いもなく、同じ時刻に生まれた」

ノロが狂喜する。

「間違いない！次元のマジックだ。時間を完璧にコントロールできるんだ！」

しかし、ノロは今後どうすればいいのか見当もつかない。ノロの腹が急に思い出したように「グー」と大きな音を出す。すでに時空間移動装置内にある食料は底をついていた。もう何日も食事をしていないことに初めて気が付く。

「ひもじいなあ……そうだ！恐竜時代に戻って恐竜のステーキを食えばいいんだ」

すぐさま口からよだれを垂らす。

「それに観察する手間を荒くすればいい。今のところ生まれてきたのは人間の赤ん坊で恐竜ではない。いずれにしても体力、体力。一度でいいから恐竜のステーキを食べてみたかった」

ノロは都合のいい理屈を並べてさっさと時空間移動の準備に入る。レバーを引く手はよだれでべっとりと濡れている。

「なんだか初めの計画からまったくずれてしまったな。もう、ほ乳類の進化なんてどうでもいい。多次元エコーが意外な結果を誘発したのかもしれない。次元の異なる世界をかいま見ることができるかも。ひょっとして、多次元エコーは禁断の代物なのか。あの遮光器土偶に似た巨大な土偶は人間の進化の過程でなんらかの影響を与えたどころか、人間の形成そのものにかかわった可能性が高い」

ノロは精一杯考える。しかし、すぐに食欲に負けてしまう。

「恐竜の世界に時空間移動！」

＊＊＊

つまようじをくわえながらノロが駅前の古本屋の前に立つ。

「なつかしいなあ。こんな店に巡り合うなんて」

ノロはなんとも言えない紙のニオイが充満する古本屋に鼻の穴を精一杯広げて入る。狭い店内を見渡すと顔を横にして山積みされた本の背表紙を丹念に見ていく。やがて疲れた首をまっすぐ伸ばすと古本屋の店主を発見する。ノロが言い訳と好奇心をセットにしてたずねる。

「遮光器土偶の本を置いていないか」

「あるよ」

「ある！」

ノロは口を大きく広げて白い豊かなひげをたくわえた店主の顔をまじまじと見つめる。

第六十一章　古本屋

――はて、誰かに似ているような……ひげが邪魔だなあ。

白いひげ面の店主が床を指さす。その指の先の方向に地下室とくたびれたはしごが見える。店主が机に山積みされた本のてっぺんを押さえるようにして立ちあがるとノロの横をすり抜けてはしごの一番上の段に足を置く。腰の曲がった店主が器用にはしごを降りて床に足を着けると目線でついてこいとうながす。ノロもはしごを降りて店主の横に立つ。店主が壁のスイッチを押すと裸電球が灯って黄色い光がゆったり広がって天井の低い地下室の全容が明らかになる。通路は狭く本があちらこちらに山積みされている。

「こんなところにいたから、すっかり腰が曲がってしまった。おまえさんなら腰をかがめずにこの地下室を自由に歩けるな」

「背が低いことがときとして便利なこともあるんだ」

店主は二、三歩進んだところで立ち止まって、目の前の山積みされた一番上の本を手にする。それは「遮光器土偶と火炎土器の謎」というタイトルの本だ。

「わしはこの本に興味を持って遮光器土偶や火炎土器に関する本や書物を集めた」

ノロは店主の目が輝くのを見逃さずに大きくうなずくと先ほどの本を受けとる。

「これは売り物か？なぜ、こんなところに置いているんだ」

店主は返事をせずにノロの横を窮屈そうに通りぬけようとする。

「ここで読ませてもらってもいいか」

そのとき店主の肩に触れた本の山がくずれて床に散らばる。一冊の本がうっすらと黄色に輝く。ふたりともその本に釘付けになる。

「こんなところにあったのか」

店主はほかの本の山に身体が触れないよう用心しながら腰をかがめてその本を取りあげる。表紙は無地で何も書かれていない。その本を開くと大きなため息をついて黄ばんだ白紙のページをめくる。

「この本には壮大な物語が書かれていた」

「インクが退色したのか」

「そうかもしれない」

ノロは少しだけ首を横に振る。

「どんな物語が書いてあったんだ？」

「その本の一部が引用されていた」

ノロは「遮光器土偶と火炎土器の謎」と店主が手にしている本を交互に見る。

「おまえさん、この世界の人間じゃないな」

ノロは左右に動かしていた視線を店主の顔に合わせて停止させる。ノロは「なぜ、わかる」という言葉をごくりとのみこんでごく自然に言葉を発する。

「そうだ」

店主はノロの返事に驚くこともなく、背中を向けてはしごを二段ほど登ると一階の床に本を置いてから再びゆっくりと登る。店主が登りきったのを見届けるとノロもはしごを登る。店主がノロに問題の本を手渡す。そして元の狭い机の前に座る。

「ここで店番（みせばん）をしていると、ときどきウトウトしていつの間にか夢を見ることがある」

ノロが大事そうに本を持ったまま店主の言葉を待つ。

「おまえさんが現れる夢を見たことがあった」

店主の目の奥が輝く。ノロは店主の顔をまじまじと見つめる。

「俺は店主のことをまったく知らない」

「ただの夢の話さ」

店主の言葉が妙にノロに絡む。

「ただし、夢のとおりにしようと思う」

「因果の整理か？」

ノロの言葉が店主を直撃する。しかし、店主はうろたえることなく軽くうなずくと言葉を続ける。

「この店を継いでくれないか。不要になれば手放せばいい。そういう条件なら困ることはないだろう？」

「困るどころか、ありがたい。この世界に身の置き場がなくて困っていたところだ。それにし

てもあまりにも突発的な話だな」
「夢に理屈はない」
店主の即答にノロが激しく反応する。
「因果が清算されたということだな」
ノロと店主の視線がぶつかりあったまま動かない。しばらくすると近くでカンカンカンという踏切の警報機の音がする。

＊＊＊

ノロは旧店主と同じように入口横の小さな机の前に座って「遮光器土偶と火炎土器の謎」という本を熱心に読む。あるページで手が止まる。そのページには遮光器土偶と火炎土器のモノクロの写真が並んでいる。遮光器土偶の頭の部分と火炎土器の上部が赤い丸で囲まれている。炎が燃えあがっているように見える火炎土器の上部の模様と遮光器土偶の頭部の模様がまったく同じように見える。
「これは……」
ノロが思わず声をあげるとページをさかのぼる。
「造られた時代がまったく異なるのに、まったく同じ模様だ」
火炎土器は西暦紀元前２５００年頃に制作され、遮光器土偶は西暦紀元前５００年頃に制作されたという記述を確認する。

第六十一章　古本屋

「土偶の頭のてっぺんで炎が燃えているように見える」

踏切の警報音も電車の音も聞こえなくなってから、かなりの時間が流れた。ノロはあくびを繰り返しながら、もう一冊の本を開く。やはり何も印刷されていない。ノロはぱらぱらとめくると、急に目が覚めたようにその本を持ってはしごを降りる。

「どの辺だったけ」

ノロは数えきれないほどの本が山積みされた地下室を見渡す。意を決してある本の上に例の本を置くと一歩下がってしばらく様子を見る。再びその本を手にするとその隣の本の柱の上に置く。ノロは何度も何度も同じ行動を繰り返す。

「あっ」

一瞬、例の本がうっすらと黄色に輝く。しかし、その輝きはすぐ消えてしまう。ノロは目をこすりながらその本を手にしてその下の本の表紙を見る。

「音をたてずに屁をこく方法」

ノロは大笑いして手にしていた本をその本の上に置く。今度はなんの変化も起こらない。

「ふしぎな古本屋だ」

ノロはどんなことが起こってもあまり気にしない質(たち)だが、恐竜に出会ったり、巨大土偶に出会った以上の驚きとふしぎさを感じる。本をそのままにしてはしごを登る。一階の床に足が着いたときにお尻から「プー」という音がもれる。

「あした、あの本を読もう」

＊＊＊

ノロはすっかりと古本屋の店主におさまる。もしノロが生命永遠保持手術を受けていなかったら一生かかっても読みきれない本がここにはある。

「暇で暇で気が狂いそうだったが、おおいに助かった。あの店主がいなければ俺は退屈して死んだかもしれない。ここであの赤ん坊の成長と六次元の生命体が現れるのをじっくりと待つとしよう」

本はあまり売れないが、それでもこの世界のお金が入ってくるから生活に困らなかった。店の奥を片付けて寝床もこしらえた。ノロは床で寝ることに抵抗はない。

毎日のように朝の散歩をかねてあの家の前をうかがいながら小学校の正門までを往復する。まれにあの家の前で幼児と両親に会うこともあるが、これといった変化は何も起こらない。それに両家の両親が古本屋を訪れることはなかった。そのうち、ふたりの幼児が男と女であることを知る。設置していた高機能センサーの電池はすでに切れて役にたつことはなかった。

「よく似ているな。まるで双子じゃないか」

やがて、ある年、小学校の正門の桜が満開になったころ、あのふたりの名前もわかる。

「瞬示と真美か。小学生になったのか」

例のふしぎな本はあれからずーっと地下室に置いたままで、ノロは毎日のように変化がない

か確認するが、二度と輝きだすことはなかった。

＊＊＊

さらに年月が流れる。

暑い真夏の昼下がりノロが店の机にほほをつけて居眠りをしていると、ランドセルを背負った瞬示と真美が店に入ってくる。ふたりは一階の本棚を眺めていたが、しばらくすると地下室を見つける。

「探検しよう」

小学四年生になった瞬示がはしごを降りると真美も続く。

「わあ、本だらけだ」

「変な図書室」

ふたりはふしぎそうにまわりを見渡す。

「ここは図書室じゃない」

「そんなことわかってるわ」

ぷくっとほっぺたをふくらます真美に瞬示が興奮しながら小声で叫ぶ。

「あれ、マミ、あれ」

山積みされた本の一角から黄色い輝きが見える。そこは天井の裸電球の光が届かない場所でふたりが近づくとその輝きが消える。瞬示がその本を手にして裸電球の下に移動する。

「変な表紙」

「英語かな？『Ｃ・ＯＳ・Ｍ・ＯＳ』って、なんのことなんだろう」

真美が瞬示の肩越しに本を見つめる。瞬示が表紙をめくるとノロには何も見えなかった活字が浮かびあがる。ふたりはその活字を追う。何かに取りつかれたように無言で読む。いつの間にか、ふたりは地下室の床の上に座りこんで熱心にその本を読む。

机の横から「ピーピー」という信号音がするとノロがあわてて起きる。

「時空間移動装置が呼んでいる」

ノロがよだれをぬぐいながら立ちあがる。日没前のやさしい闇が店を包む。店の奥に向かうと物入れから携帯ジェットを取りだして机まで戻る。

「あれ、地下室の電気、点けっぱなしにしていたっけ」

ノロは携帯ジェットを机に置くと地下室の電気を消すためにはしごを固定している壁にあるスイッチを押そうとする。そのとき地下室に人の気配を感じる。

「悪いけれど、今日は店を少し早く閉めたいんだ」

瞬示と真美の上からノロの声がする。ふたりがはっとして我に返って手元の本からはしごの上の方に視線を移す。ノロがはしごを二、三段降りる。

――瞬示！真美！

一瞬驚くが、できるだけやさしい声をかける。

「ただ読みはいけないが、おまえたちなら仕方がないな」
度のきついメガネをかけ直してノロがふたりを手招きする。
「おっと、その本は元のところに戻してくれないか」
ノロははしごを登っていつも座っている机の引出から何かを取りだすと地下室に落とす。足元に落ちてきたものを瞬示が拾いあげると、それは鮮やかな青いしおりだった。
「続きは明日にでも読めばいい」
瞬示は真美が持つ本に青いしおりをはさむと見つけやすいところに置く。ふたりがはしごを登りきるとすぐに裸電球が消える。
瞬示も真美もふしぎそうにノロを見つめながら、そろって声を出す。
「ありがとう」
近くでカンカンカンという踏切の警報機の音、ガラガラという遮断機が降りる音がする。ノロは忙しそうに店じまいにかかる。とはいってもわずかなお金が入った手さげ金庫の鍵を閉めるぐらいなのだが。
瞬示と真美が未練を残して古本屋を出ると「ブオー」という電車の警笛がガタンゴトンという車輪の音といっしょに聞こえてくる。目の前の踏切をきしむようなブレーキ音をたてながら二両連結の電車がスピードを落として通過する。踏切の音、電車の音、黄色とオレンジの車体、赤く点滅する踏切の警報機、ふたりはぼやーっと踏切の少し手前の古本屋の店先に立って電車

を見つめる。
ふたりのうしろで錆ついたシャッターの閉まる音が聞こえる。小学生のふたりより心持ち背が高いノロが慣れた手つきでシャッターの鍵を閉めると携帯ジェットを入れた丈夫なズタ袋を持ってふたりのうしろに立つ。
「しまった。リモコンを忘れた」
瞬示と真美にはノロの声は聞こえない。そのまま開いた踏切を背にして歩きだす。ノロがはっとして瞬示と真美の背中を見つめる。
「このふたりはいったいなんの本を読んでいたんだ？」
腕時計を見る。
「もっと暗くなってからの方がいいか」
ノロはシャッターの下にある穴に鍵を差しこむ。シャッターがぼろいのか、ノロの力が足りないのかなかなか上がらない。しかし、少し上がると今度は勢いよく大きな音をたててシャッターが上がりきる。まぶしいぐらいの緑色の光が店からもれる。その光は地下室から出ている。
ノロが渇いたノドから無理矢理言葉を吐きだしながら、地下室への入口から真下を見下ろす。そこには若い男と本を持つ女がひざまづいて立っている。ノロは反射的に半歩退く。
「誰だ！」
「ノロじゃないか」

「ノロだわ」
青年の瞬示と真美がノロを見上げる。
「なぜ、俺の名前を知っている？」
ノロは逆に一歩踏みだすと不自由な体勢ではしごを一段だけ降りる。
「もう、帰るね」
真美が手にしている本には青いしおりがはさまれている。真美はかがんでしおりがはさまれたページを開いて床に置く。
「さよなら、ノロ」
瞬示がそう言い残すとふたりはその本に吸いこまれるように消えてしまう。地下室から緑色の輝きが消えて暗くなる。
「あのふたり……」
ノロがやっとの思いで暗い地下室の床に立つ。床の上で本が緑色に輝きだす。そして地下室に積み上げられた本のあちらこちらから蛍が光るような淡い緑色の光が点滅しはじめる。バラバラだった点滅はひとつの意志を持ったようにすべてが同時に点滅する。
「この本の中でこのページからあのページへと移動しているのか。まるであのふたりがこの本の中を気持ちよさそうに移動しているようだ」
ノロは地下室の床に座りこんで点滅する淡い緑色の光をほほえみながら見つめる。ノロのメ

ガネにその輝きが映っては消える。その本を両手で拾いあげると繰り返される点滅の中で文字が現れては消える。

＊＊＊

ノロは本を持って店の前に立つ。

「なんだ！」

まわりの景色が一変している。いつの間にか駅のホームが長くなっていて、近づいてくる電車は六両編成でヘッドライトをこうこうと点灯している。そして夏の夜のような生暖かい風が流れている。

ノロは腕時計を見て声をあげる。

「西暦２０１２年８月……午後３時……夜じゃない。ひと雨来そうだ」

時間移動したわけでもないのに、一挙に十年以上もの時間が経過している。ノロは目をこすりながら腕時計の数字を再確認すると、あのふたりが青年だったことを思い出す。

「ひょっとして次元移動したのかもしれない。とにかく時空間移動装置に戻ろう」

ノロが店に入るとリモコンが「ピーピー」と音をたててノロを待っている。

ほっとしてなつかしそうにリモコンを手にすると地下室に降りて見渡すが、あのふたりの姿も緑の輝きもない。まわりをうらめしく眺めながらはしごを登って机に置いたズタ袋から携帯ジェットを取りだしてリュック・サックのように背負う。そして例の本をズタ袋に押しこみ、

外へ出るといきなり上昇して一気に御陵に向かう。今のノロには自分の姿が誰に見られていようと構う余裕はない。さいわい外は夕立前で夜のように暗い。

「俺だけではなく、俺に関係するものすべてが時空間移動している。いや、これはまさしく次元移動に違いない。あのふたりが仕掛けたのか。そうとしか考えられない。リモコンが反応していたということは時空間移動装置も次元移動しているはずだ」

ひょっとして時空間移動装置が消えたかもしれないという不安を抱くが、ノロは器用に携帯ジェットを操りながらリモコンを操作する。御陵の中央部でドアが跳ねあがった状態の時空間移動装置に乗りこむ。

一息ついてから操縦席に座ってまわりの様子を確認するために操縦レバーを引く。ノロは時空間移動装置がある程度の高さまで上昇したと思ってモニターで外の様子をうかがう。時空間移動装置は確かに上昇したが、すぐ御陵に吸いよせられるように激しく揺れながら急降下する。

「まずい。コントロールできない。何か強い力に引っ張られている」

ノロはまだ携帯ジェットを背負っていることに気付くとなんとかドアの前に立つ。

「万が一が起こりそうだ」

時空間移動装置の降下速度が加速する。

「だめだ！」

ノブを引くとドアが跳ねあがる。その横にかけてある双眼鏡を手にすると外へ飛びだす。強

烈な雨の中、携帯ジェットを噴射させて身体を宙に浮かせる。
時空間移動装置が御陵の木々をなぎ倒してめり込むように地面に到達する。自動的に閉まったドアを上にして半分以上、土の中に埋もれている。木々が生い茂っているのと、まわりが暗いのと、さらにノロのメガネが雨で濡れているので、まったく時空間移動装置の様子がわからない。
「俺の運動神経もまんざらでもないな」
次の瞬間、ノロの身体が木の枝に何度も引っかかりながらなんとか着地する。
「なんだ。間一髪だったのか。余裕を持って脱出したと思っていたのに」
ノロは携帯ジェットの噴射を止める。少し離れたところで埋もれた時空間移動装置を見つけると、近づいてドア横の溝に指を入れようとする。
「あれ」
溝と思ったところが窪んでいないことに気付く。
「これは！この現象はひょっとして……時空間移動に失敗したんじゃ！もしそうだとすれば、さっきの揺れは尋常（じんじょう）じゃなかった。時空間移動装置を見限って脱出した俺は最高の判断をしたことになる！」
ノロは全神経を集中して現状を把握しようと念のために腕時計を見る。
「えー、永久！西暦じゃない！ここは俺の世界！永久００１２年８月……午後３時……同じ場

所なのに時間座標だけが変化している。ということは時空間移動装置の中と外が入れ替わったのか？」

ノロはあわてるどころか、興味を持って思考を進める。先ほどまで同じ世界で時間移動をしただけだったが、今度はまったく違う世界、いや永久の世界へ時空間移動している。それはノロの言う次元移動なのかもしれない。ノロは異常なことが起こったことを直感的にのみこむとすぐに気持ちを切りかえて次にすべきことを考える。

「この世界、いや俺の世界のこの場所にあの古本屋は存在するのか」

ノロは携帯ジェットのレバーを引くと御陵から離れる。その直後に大きな雷鳴が空中に浮かぶノロをゆさぶる。

先ほどまでいたところに雷が落ちたようだ。いや、時空間移動装置に落雷したのかもしれない。ノロの耳は落雷の大音響でマヒしてキーンという残響に包まれたまま、何も聞こえない。

「危機一髪の連続だ。いつまで運が続くことか」

ノロはメガネを外して驚く。高架軌道上を青と白のツートンカラーのリニアモーターカーが立派なコンクリート造りの駅を通過する。

「どうなっているんだ。次元移動のなせるワザか！」

そのとき、高架脇にある時計台を持つ建物に大音響をとどろかせて雷が落ちる。

「危ない」

ノロはあわてて、以前とはまったく違う立派な駅の近くに急降下する。古びれた古本屋がまわりから隔離されるように建っている。そのときノロの背中で再び雷鳴が響く。ノロは振り返って御陵を見つめる。木々が震えるようにざわめくとやがてすべて倒れる。大粒の雨が容赦なくノロの顔をたたく。ノロは雨を避けるために高架下に回りこむ。そこからは御陵が真横に見える。その御陵全体がふくれあがると倒れた樹木が堀にずれ落ちる。

「間違いなく、巨大土偶が何億年の眠りから覚めて復活する！」

ノロは混乱しながらも暗闇でも鮮明に見える双眼鏡を手にすると御陵の様子をうかがう。サーチライトのような黄色い光線が御陵から真っ暗な天空に向かうが、低く垂れ下がった分厚い雲にさえぎられた光の柱は短い。

「恐竜をステーキにした光線だ」

巨大土偶が上半身をゆっくりと起こす。それにつれて光の柱も斜めになって伸びていく。やがて地上をとらえるまでに光の柱が傾くと今まで以上に強く輝く。その先端から赤く輝くふたつの塊（かたまり）が空高く舞いあがる。ノロの視力では見えないが、明らかに何かが空中に飛びあがって巨大土偶と対峙する。瞬示と真美だ。

ふたりの身体からピンクの太い光線が巨大土偶の頭部に発射される。その頭が大きな音をたてて粉々に砕け散るとチリとなって激しい雨とともに地上に降下する。

ノロは双眼鏡の倍率をあげると、地上二百メートルぐらいの高さで浮いているピンクの輝き

の中にふたつの人影を発見する。
頭が吹っとんだ巨大土偶がそのまま立っている。破壊された頭部があればその身長は三百メートルはある。身体のほぼ半分ぐらいあった頭を失った巨大土偶は微動だりしない。
ときおり雷が鳴る。地上ではサイレンの音があちらこちらで鳴っているが、激しい雨の中では蚊が泣くような音にしか聞こえない。
その雨の音に混じってヒュウヒュウという音が聞こえてくる。雨に逆らうかのように水に溶けていた茶色のチリが舞いあがる。チリはまるで生き物のように群れをつくって、ゆっくりと力強くさらに舞いあがって頭のない土偶の首の上に集まろうとする。もし雨が降っていなければ瞬間的に集結したかもしれない。
「再生しようとしているんだ！」
ノロの興奮が最高潮に達する。雨の勢いが少しだけ弱くなる。チリは首の上で塊（かたまり）を形成する。その塊（かたまり）が元の頭の形を復元しはじめる。
「無機質の物体がまるで生命体のような振舞をしている」
舞いあがるチリの中に黒い丸いものをノロが発見する。
「時空間移動装置だ」
ノロは双眼鏡の倍率をさらにあげる。
「間違いない。俺の時空間移動装置だ」

巨大土偶の頭が元の形に近づくと再生のスピードが急に速くなって、すぐに巨大土偶の頭が完全に元に戻る。

「すごい！」

再生した巨大土偶の目がうっすらと開くとピンクの輝きに向かって鋭い黄色い光線が放たれる。その輝きの中心からもピンクの光線が発射される。黄色い光線はピンクの光線に少し押されながらも蹴散らすようにしてピンクに輝く塊、そう、瞬示と真美に向かう。塊が上下に分断される。ふたりの放った光線の残りが弱々しく巨大土偶のそばを通過する。

巨大土偶から放たれた黄色い光線も勢いを弱めてノロの真上を通過する。その到達地点の方向からまばゆい輝きが付近を明るくする。

高度を下げた方のピンクの塊に向かって巨大土偶が再び光線を放とうとうつむく。その塊は機敏に上昇してもうひとつの塊と再び合体する。巨大土偶がきゅうくつそうに真上に首を向ける。眉間の間に黒いほくろのような黒い球体が見える。

「あれは俺の時空間移動装置だ」

ピンクの塊から今度は真っ赤な太い光線が真下に発射される。赤い光線は巨大土偶の頭を押さえこむように圧力をかける。

「すごいエネルギーだ。さっきのとは比べようもないほどの強力なエネルギーだ」

巨大土偶の身長が縮む。

「眉間(みけん)の時空間移動装置はあのエネルギーに耐えられないかもしれない。時空間移動に失敗した時空間移動装置が破壊されたら、この世界は消滅するかもしれない」

時空間移動に失敗した時空間移動装置が宇宙そのものを装置内に保持しているかもしれないことをノロは承知していた。

巨大土偶の身体は押しつぶされ、圧縮され、音もなく突然消滅する。

「ふう、巨大土偶の消滅だけでおさまってくれた。あれ……？」

巨大土偶が消滅した御陵から赤い竜巻が発生する。竜巻は急速に大きくなって上空のピンクに輝く塊(かたまり)をまきこんで吸いこむ。

第六十一章　古本屋

第六十二章　出会いと別れ

【時】永久０２８８年
永久紀元前４００年（戦国時代）
西暦１９４５年～１９６０年
永久紀元前約３億年（恐竜時代）
西暦２０１２年８月・永久００１２年８月
【空】ノロの惑星　御陵
【人】フォルダー　イリ　ホーリー　サーチ　住職　リンメイ　ノロ　ＭＹ２８

永久０２８８年

＊＊＊

「チューちゃん、ノロはどこへ行ったの」
ブラックシャークの艦橋に移動したイリの弱々しい声が天井にかろうじて届く。
「わかりません」
「本当に解体するぞ」
フォルダーの声もいつものような迫力はない。
「本当に知らないのです。時空間移動装置でどこかへ移動したことだけは確かです」
「ノロは関ヶ原と御陵にも時空間移動していたようだわ」

サーチに次いでホーリーも確認する。
「あのとき、関ヶ原にいた四貫目が『黒い時空間移動装置を見た』と言っていたのは、ノロの時空間移動装置だったんだ」
「ノロは瞬示と真美のことを知っているような雰囲気じゃ」
住職の言葉にサーチが追加する。
「ノロが時空間移動したあとを追跡しなければ。まず関ヶ原に時空間移動してみたらどうかしら」
ホーリーが首を横に振る。
「危険だ。関ヶ原で自分たちに出会うとどちらかが消滅することになる」
フォルダーがホーリーの見解に同調する。
「同じ時空に同一人物は接触できない」
「とにかく、ノロを探しに行かなければ」
イリがフォルダーに決断をうながす。フォルダーが目を閉じると大きくうなずく。
「俺たちも連れてってくれ」
ホーリーが叫ぶ。
「もちろんだ。しかし、絶対にブラックシャークから出ないという約束してくれ」
「もちろんだ。消滅するのはゴメンだ」

すぐさまホーリーが右手をおおげさにあげて約束する。サーチがその手をつかむとホーリーを見つめる。
「あのふたり、今どこにいるのかしら」
「瞬示と真美の知恵も借りたいな」
ホーリーはサーチが言おうとしたことを口にする。沈黙を守らざるを得なかった中央コンピュータが低い声をもらす。
「瞬示さんと真美さんのことですが、ワレワレの世界の生命体ではありません」
「そのとおりだ。西暦という世界の人間だ」
ホーリーが天井に向かって念を押す。
「いいえ、そういう意味ではありません。次元が違うのです。言い直します。あのふたりは皆さんと同じ三次元の生命体ではありません」
「なんだって！」
全員が天井のクリスタル・スピーカーに向かって驚きの視線を向ける。
「あのふたりというか、あのふたつの生命体は六次元の生命体です」
「六次元の？」
「ノロがワタシに分析させたのです」
「ノロが！アイツは瞬示と真美とどこで接触したんだ？」

フォルダーが天井に向かって口角を飛ばすと、イリが続く。
「なぜ、もっと早く報告しなかったの！」
「とても言い出せる雰囲気ではなかったので。しかも二百年以上も前のことです。いくらワタシが優秀なコンピュータでも古いデータを探すのは大変なことです。ノロが忘却の重要性をワタシに仕組んだのです」
「それは人間の特権だ！」

＊＊＊

艦橋に現れたＭＹ２８がフォルダーにブラックシャークの最終チェックが終了したことを告げる。
「完璧です。今までより格段に性能がアップしています。いつでも出航可能です」
「ＭＹ２８、礼を言う。すぐ出航する」
「ありがとうございます。それでは航海の無事を祈ります」
ＭＹ２８がくるっとフォルダーとイリに背中を向けて右足を一歩踏みだす。
「待って」
イリがＭＹ２８の背中に声をかける。ＭＹ２８が振り返るとイリがほほえんでいる。
「今回もＭＹ２８には乗船してもらうわ」
「えっ？」

「チーフ操縦士に任命します。ＭＡ６０も医務室で勤務態勢に入っているはずよ」
ＭＹ２８が満面の笑みをたたえる。
「ありがとうございます」
フォルダーが天井に向かってよくとおる声を出す。
「中央コンピュータ！準備はいいか」
「ハイ」
「ブラックシャーク、発進！」
ブラックシャークはドックから垂直に上昇する。眼下には美しい街並みが見える。やがてその街並みが小さくなると海が見えてくる。
「反重力エンジン作動開始」
心地よい中央コンピュータの声が艦橋に響く。超スピードで上昇しているとは誰も体感できない。
「素晴らしい。ＭＹ２８の整備はたいしたものだ」
フォルダーが感心して操縦席のＭＹ２８を見つめる。ＭＹ２８は上半身をひねって右手の親指を立てると誇らしげにフォルダーを見つめ返す。
ブラックシャークが地上からまったく見えなくなるところまで上昇する。ＭＹ２８はハンドルを倒してから手前に引く。艦内になにひとつ音らしいものが聞こえないが、ブラックシャー

クは大音響をとどろかせると一気に時空間移動してノロの惑星から消え去る。

永久紀元前４００年

＊＊＊

「あれは御陵だ。ここは関ヶ原じゃないぞ」

ホーリーの声がしたあとＭＹ２８の報告が流れる。

「永久紀元前４００年の地球に時空間移動しました」

「私たちが明智光秀に出会った直後、強制的に移動させられた場所だわ」

サーチが横でうなずくホーリーに同意を求める。フォルダーは珍しい物でも見るように御陵をじっくりと眺める。

「鍵穴星で見たものとよく似ているな」

ブラックシャークは後円部分だけに木が生えている御陵の真上に浮かんでいる。

「なぜ、後円部分だけに木が生えているんだ？」

「初めは御陵の円形部分が方形部分に載っていた。その円形部分には木が生えていたが、やがてずれるように移動して前方後円墳、すなわち御陵を形成した」

「なぜ、ずれたんだ？樹木の重みに耐えかねてずれたとは思えないが……」

ホーリーもこのフォルダーの質問に興味を持つが、とりあえず応える。

「うまく説明できない」
ホーリーがリンメイに助けを求める。リンメイは三次元タブレットを手にすると三次元ペンで器用に絵を描く。
「前方部分と後円部分が重なっていたときの御陵の中の様子です」
リンメイが描いた三次元タブレット上の絵がサブ浮遊透過スクリーンに映される。
「ヒザを抱えた胎児のような格好の巨大土偶がこのように座っていると想像してください」
リンメイはその巨大土偶の頭部を三次元ペンで倒してゆく。巨大土偶は背中の方に倒れこむように移動する。それにつれて後円部分が前方部分からずれていく。
「なるほど」
フォルダーが感心しながらサブ浮遊透過スクリーンを見つめる。
「でも、方形部分から円形部分がまったくと言っていいほど、くずれずに移動するなんてふしぎだわ」
イリが疑問をはさむ。
「御陵と巨大土偶は同じ特殊な土でできていて一体化しているのです。詳しいメカニズムはわかりません」
「透視しろ」
メイン浮遊透過スクリーンに真下の御陵が映しだされる。御陵の内側に御陵の形とほぼ同じ

形をした輪郭線がぼんやり現れる。
「あれが巨大土偶か」
「おそらく、まだ安定していない状態だと思います」
リンメイが即答する。そのとき中央コンピュータから低くうなるような声がする。
「御陵の中心部分からち密な信号が発信されています」
「内容は？」
フォルダーが怒鳴る。
「受信中です。受信後すぐに解析します」
「土の塊（かたまり）が信号を出している？」
「土といえども原子からできています。その原子の動きが活発なのです。受信終了。解析します」
声をあげる者はなく中央コンピュータの次の報告を待つ。
「時空間移動のデータです。しかも複数あります。ブラックシャークの時空間移動のデータもあります」
すぐにフォルダーが後半の報告に反応する。
「試運転に出かけたブラックシャークの時空間移動データか！」
メイン浮遊透過スクリーンに数字が羅列（られつ）される。

「時空間移動装置の移動のデータが複数あるということは、俺たちの時空間移動装置のデータが含まれているからだ」
サーチがホーリーに追従する。
「私たち、ここからミリンがいる壮大寺（そうだいじ）へ時空間移動したわ。確か西暦……」
中央コンピュータがサーチの代わりに答える。
「それは痕跡からわかります。西暦２０４８年です」
ホーリーとサーチが同時に手をたたくが、フォルダーは先ほどの報告について中央コンピュータにたずねる。
「ブラックシャークはここからどこへ時空間移動したのだ？」
「それは……」
「早く教えて！」
イリがフォルダーの言葉に自分の言葉を重ねる。しかし、中央コンピュータはイリの期待を裏切る報告をする。
「時空間移動装置がこの空間から西暦１９４５年８月１５日に移動しているデータが存在します。数は一基です」
フォルダーがメイン浮遊透過スクリーンのデータに強く反応する。
「このデータはホーリーたちの行き先とは違うぞ。ノロだ！ノロの時空間移動装置のデータに

違いない。すぐ時空間移動だ！」
「さっきの質問の答えは？」
イリの言葉を無視して中央コンピュータはフォルダーの命令を実行する。ブラックシャークが永久紀元前４００年の御陵上空から姿を消す。

西暦１９４５年～１９６０年

＊＊＊

御陵以外、すべて焼きつくされた荒涼とした風景が眼下に広がる。御陵の堀には火災から逃れるためか、それともノドが渇いてやむを得ず堀の水を飲もうと誤って落ちて水死したのか、正視できない多数の死体が浮いている。メイン浮遊透過スクリーンに誰もが目を背ける。
「おそらく、猛烈な空爆を受けたんだろう」
フォルダーも目を閉じる。
「ノロは？それにブラックシャークは明智光秀の時代からどこへ時空間移動したの？」
「御陵上空に時空間移動の痕跡を発見しました。収集します」
またしても中央コンピュータがイリの質問を無視する。そして御陵の透視画像がメイン浮遊透過スクリーンに映しだされる。しかし、巨大土偶の姿はない。この世界はフォルダーたちの永久の世界ではなく西暦の世界だ。ノロはもちろんのこと、フォルダーも、そしてホーリーや

サーチも、瞬示と真美と同じように関ヶ原や黄金城の光秀の時代のふしぎな時空間にほんろうされているのかもしれない。中央コンピュータが丹念に時空の分析を行う。

「ノロが乗っていたと推測される時空間移動装置の次の時空間移動先が判明しました。同じ場所の一年後に移動しています」

「よし、ＭＹ２８、同じように時空間移動しろ！」

フォルダーはノロがいるはずの時空間との距離が詰まったと確信する。

ブラックシャークが時空間移動する。一瞬グレーノイズに包まれたメイン浮遊透過スクリーンに再び御陵が現れる。中央コンピュータはさらにノロの時空間移動装置の次の移動先の座標データを取得する。

「また、一年先か」

＊＊＊

「もう何回繰り返した？」

「一五回です」

「きっと何かを探すために同じ場所で小刻みに時空間移動を繰り返しているんだ」

フォルダーが手応えを感じとる。イリも先ほどの質問を忘れてフォルダー以上にもうすぐノロに会えるのではという期待に胸をふくらませる。サーチは少しあきた表情をしてホーリーに話しかける。

「同じ場所で一年先への時空間移動を一五回も繰り返しているわ。単調な時空間移動ね」
「いや、そんなことはない。同じ場所へ寸分違わず時空間移動するのは意外とむずかしい」
ホーリーの言葉にサーチが首を傾げる。
「宇宙は猛烈なスピードで膨張している。銀河もすごいスピードで回転しながら移動している。銀河の端にある太陽系も銀河を中心にものすごいスピードで回っている。そして地球はその太陽のまわりを回っている。一年前にいた地球の位置と一年後の地球の位置はまったく違う場所なんだ。運動している物体の同じ場所のきっちり一年後に時間移動するには、非常に高度なテクニックが要求される。ノロはその高度な時空間移動を完璧にこなしている」
「さすがホーリー、そのとおりだ」
フォルダーがＭＹ２８に再び時空間移動の命令を出す。
「ＭＹ２８、中央コンピュータの指示通り、正確に時空間移動しろ」
「了解！」
ブラックシャークが一六度目の時空間移動体勢に入る。
「御陵のまわりがどんどん復興しているわ」
イリが明るい声を出す。
西暦１９６０年から永久紀元前約３億年（恐竜時代）へ

＊＊＊

「今度は過去に時空間移動している？それも億単位の過去へだと！しかも俺たちの永久の世界に戻っているとは！」
フォルダーが混乱する
「今までの規則性とはまったく異なります」
中央コンピュータがフォルダーに判断を仰ぐ。
「計算違いじゃないだろうな」
「計算ミスなどするわけがありません。ワタシは正確無比なコンピュータです」
「おまえを信用するしかないな。もうだますなよ」
「それでは大昔へ時空間移動します。ワタシが操縦します」
マイナスの時空間移動が瞬時に終了すると、メイン浮遊透過スクリーンには恐竜の死体が所狭しと転がった焼け野原が映しだされる。
「なんだ？恐竜時代に時空間移動したのか」
「そのようです」
「どういうことなの」
イリが不機嫌そうにメイン浮遊透過スクリーンを見つめる。
「分析中です」

ホーリーもメイン浮遊透過スクリーンの隅から隅まで舐めるように見つめると、おもむろに席を立ってフォルダーが座る船長席に近づく。
「やっかいなことになった」
フォルダーが目を閉じてうなずく。フォルダーの前方に座っているイリが半身になってフォルダーの様子をうかがいながら中央コンピュータに告げる。
「すぐにノロの時空間移動の痕跡を調べて」
イリはそばまで近づいたのに、ノロが逃げるように時空間移動したような感覚に陥る。
「恐竜はすべて焼死です」
中央コンピュータの分析結果にフォルダーが力のない声を出す。
「火山が噴火したのか？」
イリは席を立ってメイン浮遊透過スクリーンの焼け死んだ恐竜の映像を丹念に観察しはじめる。
「なぜ恐竜がステーキになったところへ時空間移動したのかしら」
「原因は……」
説明を始める中央コンピュータの声をさえぎってイリが短く叫ぶ。
「あっ！」
イリは胸のポケットからレーザーポインターを取りだすとメイン浮遊透過スクリーンの右下

あたりに赤い光線を当てる。
「チューちゃん！この部分を拡大して！」
メイン浮遊透過スクリーンの一部が拡大される。そこには恐竜の骨が数本転がっている。肉片が残っているものもある。
イリが先ほどの感覚を消去して、確実に一歩ずつノロに近づいていることに再び大きな期待を抱く。
「そこそこ、もっと拡大して」
肉片の付いた骨がクローズアップされる。
「ノロの歯形だわ」
一瞬、全員沈黙するがすぐに大きな笑いの渦が艦橋を包む。しかし、イリは真剣そのものですぐさま断定する。
「ノロは腹ペコになってここへきたのよ」
「まさか。なぜ、わざわざこんなところへ？」
サーチがイリを見つめる。
「ノロはこの時空間にステーキになった恐竜がいることを知っていた。多分、御陵の近くでは食糧を確保することができなかったんだわ」
イリの突拍子もない想像に全員が笑顔でイリを見つめるなか、フォルダーがイリに近づく。

「イリのたくましい想像力には参ったな」
「ここで満腹にしてから、再び元の時空間座標に戻ったはずだわ」
「そのとおりです」
中央コンピュータの声が笑い声にかき消されてしまう。

西暦２０１２年・永久００１２年

＊＊＊

西暦のノロの古本屋の時空にブラックシャークが戻る。
「アイツ、ふたつの世界を行ったり来たりしているみたいだ」
フォルダーがメイン浮遊透過スクリーンの右上のカレンダーを確認する。そのときブラックシャークが激動する。
「制御しろ！」
フォルダーが中央コンピュータに怒鳴る。
「制御できません。まるで時空間が地滑りしているような状態です」
ブラックシャークが再び大きく揺れる。メイン浮遊透過スクリーンの右上の年号表示が「西暦」と「永久」を交互に点滅させる。全員、席に着いて身体をシートベルトでしっかりと固定する。メイン浮遊透過スクリーンの御陵の中にこれまでまったく存在しなかった巨大土偶が見

える。ブラックシャークが揺れているので巨大土偶の輪郭がはっきりしない。激しい揺れのためにメイン浮遊透過スクリーンの映像は何を映しているのかわからなくなる。
「強力なエネルギーにブラックシャークが包みこまれました」
「なんとかしろ！」
「余計な命令は慎んでください」
中央コンピュータが最大級の制御を試みる。
「強制的に時空間移動させられました」
艦橋のすべての照明が消えると大きな揺れから震えるような小刻みな揺れに変化する。
「時空間移動が終了！時空間移動に失敗するかもしれない最悪の状況を脱しました」
艦内に照明が戻ってあらゆる振動が消える。メイン浮遊透過スクリーンには御陵にすっぽり収まった仰向けの巨大土偶が鮮明に映しだされる。
「確かに時空間移動している！」
ホーリーがメイン浮遊透過スクリーンの右上へ腕を伸ばして指さす。そこには西暦の文字が消えて永久００１２年８月という表示に変わっている。
「高度は？」
「二万メートルです」
「低いな。人工衛星からブラックシャークが見えないように擬装モードを取れ」

「すでに擬装モードに移行しています」
御陵や透視された巨大土偶はぶれることなく、正常な状態に戻ったブラックシャークのメイン浮遊透過スクリーンにはっきりと映っている。
「御陵の真上は分厚い積乱雲に包まれていて雷が煩雑に発生しています」
「あっ！」
誰もが大きな声をあげる。メイン浮遊透過スクリーンの映像に信じがたい変化が起こる。先ほどの大きな声から打って変わってホーリーのつぶやくような声が聞こえる。
「巨大土偶が起きあがろうとしている」
「目が光っているわ」
いつの間にかシートベルトを外してサーチがホーリーに近づく。
「ピンクの塊（かたまり）が見えるぞ」
ホーリーは横にいるサーチにメイン浮遊透過スクリーンの一部を指さして興奮する。
「あのピンクの塊（かたまり）をズームアップしてくれ！」
ホーリーもシートベルトを外すと立ちあがってもう一方の手でサーチの手を握りしめる。
「あのピンクの輝きの中に瞬示と真美がいるかもしれないわ！」
ホーリーとサーチはピンクの輝きとあのふたりの関係（第一編第二章）を熟知している。すぐにメイン浮遊透過スクリーン全体がピンクに輝く。その場所をさらにズームアップするが、

ブラックシャークの高感度視覚センサーをもってしても塊（かたまり）の中はぼんやりとしか見えない。しかし、人間のあいまいな視覚がかろうじて瞬示と真美の姿をとらえる。まずサーチが叫ぶ。

「間違いない！瞬示と真美だわ！」

「すごい戦闘だ！」

ホーリーも興奮する。ピンクの光線と黄色い光線が激しくぶつかりあう。フォルダーが持ち前の直感をホーリーに負けじと大きな声で発射する。

「ノロを探せ！アイツもどこかでこの光景を見ているはずだ！」

イリがフォルダーの直感をそのまま受け継ぐと全神経を集中させて目の前の大型モニターを見つめる。地上は夜のように暗いが、イリが見つめるモニターは昼間のように明るい。しかし、赤や黄色い光が炸裂すると画面も赤や黄色におおわれて何も見えなくなる。イリの顔も赤くなったり、黄色くなったりする。それが数回繰り返されたあと、イリが誰にも負けない大声を張りあげる。

「ノロだわ！ノロがいた！」

イリがすべての指を透過キーボード上で踊らせる。フォルダーの素早い反応が命令を押しだす。

「時空間移動装置、発進準備！」

「私、迎えに行くわ！」

フォルダーの声とイリの声が重なる。
「無人でいい。すぐノロのそばに時空間移動装置を空間移動させろ」
艦橋の出入口に向かおうとしたイリが立ち止まって振り返る。メイン浮遊透過スクリーンには上空を仰ぐノロの姿が鮮明に映っていて、そのすぐそばに黒い時空間移動装置が現れる。イリはメイン浮遊透過スクリーンに突進する。

＊＊＊

「ありがたい！」
ノロが跳ねあがった時空間移動装置のドアに突っこむ。座席に着くとレバーを握る。
「あの赤い穴は六次元の世界に通じているはずだ」
ノロは時空間移動装置を赤い竜巻の中心部に移動させる。
「ノロ！ノロ！」
イリの丸い湿り気を帯びた声がノロに届く。
「イリ！」
しかし、ノロはまっしぐらに赤い竜巻に突進する。
「上空にブラックシャークが待機しているわ」
イリがメイン浮遊透過スクリーンを乾いた目で見つめる。ノロの時空間移動装置が御陵の中心にできた得体のしれない赤い穴に向かうのを目の当たりにして絶叫する。

「ノロ！戻って！」
赤い穴が急にしぼみだす。それを見てイリは大きな目を開けてフォルダーに向かって叫ぶ。
「フォルダー！あの穴にブラックシャークを！」
「危険です！」
中央コンピュータが警告する。赤い穴が消えて深くえぐられた御陵の跡がメイン浮遊透過スクリーンに現れる。
フォルダーは両手を握りしめるとぶるぶる震わせ、イリはその場に泣きくずれる。フォルダーの場合、涙腺は怒りに直結するが、イリのそれは深い悲しみと無念さにつながっていた。